

紀 北

—紀要第14集—

和歌山県立紀北支援学校

はじめに

本校において、「自立活動」の実践研究をスタートして早4年が経過いたしました。

平成22年度から2年間は、和歌山県教育委員会の研究指定を受けて、教員一同が「自立活動の時間における指導」はどうあるべきか、一から取組を進めた2年間でありました。他県の先進的な実践事例にも学びながら、また、自立活動の牽引的な指導者である福岡大学の徳永先生や和歌山大学の武田先生に様々なアドバイスをいただきながら、授業の在り方、指導の在り方について論議し、実践を重ねてきました。この2年間の研究指定最終報告会では、全教員が一定の共通理解のもと、自立活動の時間における指導の方向性をまとめ、県内外の皆様にも成果を報告することができましたが、その総括を行う中で、教員自身の思いとして、一人一人の児童生徒の実態把握の弱さや授業実践におけるPDCAサイクルの適切かつ最適な運用が不十分である等の反省がありました。

この反省を受け、引き続き「授業作りの基本は実態把握から」を合い言葉に、自立活動実態把握チェックシートの内容の見直しを行い、それを活用しながら、実態把握をもとに本校独自の自立活動学習指導案で授業を立案し、授業実践、授業評価、活動内容・支援の見直し等の検討を行ってきました。

目の前のこの児童、この生徒に対するこの授業は最も必要かつ適切な自立活動の取組であるか、自らにまた共に指導する教員に問いながら、研究を進めてきました。

この2年間、私が本校の自立活動の様々な授業を見て、まず感じたことは、教員が子どもたちの得意なことや強みをしっかりと捉えて、子どもたちの主体的な活動を促すことを大切にしているということです。

自立活動とは、児童生徒の様々な場面で課題となっている実態に着目して、中心となる課題にアプローチし、どのようにその子どもの「生きる力」を育てていくか、という領域です。だからこそ、子どもたちの生活の中で、どのような支援があればできるようになるのか、子ども達の強みを発揮できるのか、いきいきと活動し生活の中で活かしていけるのか、という視点が重要であろうと考えます。子どもたちは、教師の指導や支援を受けながら、自分の持てる力を存分に発揮し、ハードルを乗り越え、果敢にチャレンジしています。

私たち教員のまず「指導内容ありき」という意識のパラダイムを転換することから初めた本校の実践研究の成果をここに報告させていただき、改めてご指導、ご助言を頂ければ幸いです。

最後になりますが、根気強く温かく本校の実践研究を見守り、ご指導いただきました和歌山大学の武田鉄郎先生をはじめ、和歌山県教育委員会の先生方に深くお礼申し上げ、教員一同今後とも、さらに研鑽して参りますこととお誓い申しあげ感謝の言葉といたします。

平成26年1月

校長 金川 宏

目 次

はじめに

I 本校の教育目標と大切にしている4つの柱	4
II 「自立活動の時間における指導について」 ～P D C Aサイクルを活用した授業改善を重ねて～	
研究紀要をまとめるにあたって	6
小 学 部	7
中 学 部	3 5
高 等 部	6 7
愛徳分教室	9 3
抽 出 指 導	1 0 3
ま と め	1 1 0
III 寄宿舍 「生活に即した自立を目指してII」	1 1 2

I 本校の教育

1. 学校教育方針

一人ひとりの障害・発達・生活の実態を正しくとらえ、すべての子どものもつ発達の可能性を最大限追求し、子どもを中心とした教育を創造する。よって、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服し、社会の一員としての自立をめざし、明るくたくましく生きる力を育む。

2. 学校教育目標

- 『健康でたくましく、主体的に生活を送る力をつける』(生活・からだ)
- 『生きる力としての学力・コミュニケーションの力を高める』(学力・人との関わり)
- 『働く力や生涯をとおして学んでいく力を高め、よりよい社会参加をめざす』(生涯学習・進路)

3. 学部教育目標 (教育目標系統表)

	就学前	小学部の教育目標	中学部の教育目標	高等部の教育目標	卒業後
前文		小学部段階は、外界とのかかわりを拡大し、内なる世界を飛躍的にひろげ自我を確立していく時期である。この時期に、豊かな経験や学習活動をとおして、個々の要求や表現方法を広げ、わかる力やできる力を高める。また、基本的生活習慣の定着をめざすとともに、他者との信頼関係を築きながら、楽しく主体的に学校生活を送る力をつける。	中学生は、からだは急速に成長変化する思春期を迎え、心と体の調和を図ることが最も大切な時期である。この時期に、健康なからだづくりをすすめるとともに、集団との関係を大切にしながら自己の形成を助け、生活を組み立てていく力をつける。また、中学生としての自覚を促すとともに、主体的に活動できる人格を育む。	高等部の生徒にとって、青年期は、健康でたくましい体を育て、心を豊かにすることが大切な時期である。この時期に小・中学部(小・中学校)で獲得してきた力を高め、仲間と共に育ち合いながら、自らの生活を切り拓き、さらに人格の形成をめざす。	
柱①「生活」		【生活】 ・基本的生活習慣を身に付け、主体的に学校生活を送る力をつける。	【生活】 ・基本的生活習慣を確立し、主体的に生きる力を養う。	【生活】 ・自立心を養い、社会生活に参加し適応できる力をつける。	
柱②「からだ」		【からだ】 ・生理的基盤を整え、自らのからだをコントロールする力をつける。	【からだ】 ・運動機能を高め、体力をつけ、様々な生活場面に生かす。 ・性に関する理解を深め、思春期の心と体を正しく認識する。	【からだ】 ・思春期から青年期を迎えるからだの変化を受け止め、健康なからだの育成をめざす。 ・生命の大切さを知り、自分や相手の命を大切にすることを育む。	
柱③「学力」		【コミュニケーション】 ・教師や友だちとの関係を軸に、人やものにかかわる力を広げ、個々に応じたコミュニケーションの力をつける。	【学力】 ・認知・興味・関心を高め、コミュニケーションの力を養う。 ・基礎学力を高める。	【学力】 ・自ら学ぶ意欲を育て、学んだことを生活に生かせる力をつける。	
柱④「人との関わり」			【人との関わり】 ・集団生活をとおして、仲間と共に協力する力や自主的に活動する力をつける。 ・身近な地域生活をとおして、社会性を育む。	【人との関わり】 ・自分の気持ちを伝えることや、仲間と共に意見を出し合い問題を解決していく力をつける。 ・自分や仲間の個性を認め合い、共に助け合う心を育む。	
		低学年	中学年	高学年	
		生活	学校生活のリズムをつかみ、基本的生活習慣を獲得する。	基本的生活習慣の定着を図り、学校生活に見通しをもつ。	主体的に学校生活を送る。
		からだ	しっかりと身体を動かし、健康なからだをつくる。	運動機能を高め、自らのからだをコントロールする力をつける。	運動機能を高め、自らのからだをコントロールする力をつけ、様々な場面でその力を発揮する。
		コミュニケーション	教師との関係を軸に、人やものにかかわる力を広げ、要求を出せるようになる。	教師や友だちとの関係を軸に、人やものにかかわる力を深め、要求を相手に伝える。	集団の中で、人やものにかかわる力を発揮し、互いの要求を受け止めあう。

生涯学習・進路

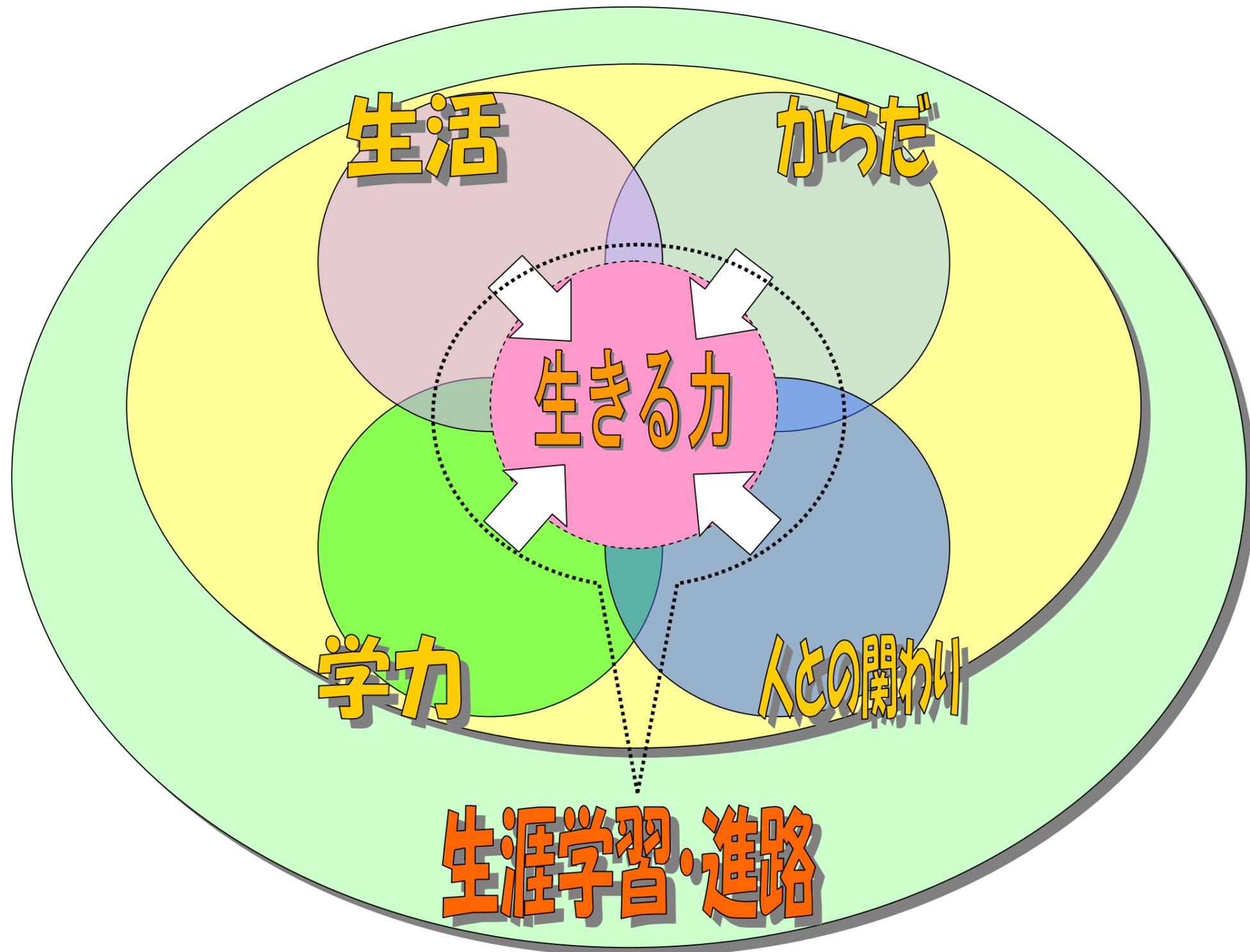
将来について考え、社会の中で自分の生き方を見いだす。

生涯をとおして学んでいこうとする意欲や態度を育む。

「からだ」(ひらがな)・・・「心」と「体」の両側面を広義に捉えた言葉として

4. 学校として大切にしている4つの柱

本校では、下図のように『「生活」「からだ」「学力」「人との関わり」』の4つの柱から子どもの発達課題をとらえ、日々の教育活動を展開しています。すべての子どもたちが、自らの生活の主体者として豊かな人間性を育めるよう支援を行います。



II 「自立活動の時間における指導について」

～PDCA サイクルを活用した授業改善を重ねて～

研究紀要をまとめるにあたって

本校では、4年前に「個から始まる自立活動」というテーマを掲げて自立活動の研究を始めた。では、具体的にどのように自立活動の指導を組み立てていけば良いのだろうか。自立活動は、他の教科と同じように、学習指導要領に段階的な内容が示されているものではない。「一般的に自立活動はこのような内容の授業をすればよい」といった固定観念を教師が先に持つようであれば、「授業で何をしよう」と活動に意識を向けてしまい、「何をねらうか」がなおざりになる恐れがある。個々の実態把握から指導目標を立て、指導内容の選定を行う事ができず、本来は個別に指導計画を作成するはずのものが、活動内容から個々の指導目標を設定してしまい、本末転倒となる。

本校では、「自立活動を個別の指導計画から始める」ことを大切にして、自立活動の指導の計画を進めている。まず、5月に実態把握チェックシートを用いて、担任がクラスの児童生徒の実態把握を行い、それをもとに個別の指導計画を立てる。その時には、指導目標を達成するために、時間における指導、各教科等を合わせた指導や各教科、日常生活の中、それぞれの場、時にどんな活動や支援をするかを具体的に計画しておく。そして、個別の指導計画に沿った形で、実際の時間の指導の授業計画を立てていく。もちろん、それまで「時間における指導」を全く行わないというのではない。実態把握を的確に行い、仮説を立てるために様々な活動を試みながら授業の内容や形態を決めていく時期としている。そして個別の指導計画が完成し、取組内容を決定し、個別に指導が必要な児童生徒は個別で、集団が必要な児童生徒は集団で、環境も整えて実践を開始する。

今回の研究における実践では小、中、高等部では学年や教育課程別に4グループ、分教室と抽出指導はそれぞれ1つのグループとし、合計14のグループが研究授業実践を行った。授業実践を進める際には、PDCAサイクルを活用し、P l a n（計画）は実態把握と指導案の作成、D o（実践）は研究授業の実施、C h e c k（評価・反省）は研究授業の協議会、A c t i o n（検証・改善）は協議会での改善点の提示のサイクルを2回行い授業改善を進めた。1サイクル（前期）は6月からの授業開始に合わせて、指導案をつきあわせて研究グループで方向性を確認しながら、7月に研究授業を行い、夏季休業を活用し協議を深めた。また、各グループは自分たちの研究授業の協議をするだけでなく、他学部の研究授業についても協議をし、意見を出し合った。2サイクル（後期）には夏季休業中の協議会で出した改善案をもとに、前期と同じ流れで指導案のつきあわせ、研究授業、協議を行った。

本紀要は、これらの前期及び後期の授業改善で得た成果についてまとめたものである。

小学部

1. はじめに

本校には、知的障害学級（以下1ブロック）、肢体不自由学級（以下2ブロック）がある。小学部では、1ブロックを低学年（1・2年）、中学年（3・4年）、高学年（5・6年）の3グループに分け、2ブロックは全学年を1つのグループとして実践を行い、研修を進めた。

「なぜからはじまる自立活動」をテーマに取り組んだ2年間で踏まえ、より丁寧な実態把握、『個』に迫る」ためのいろいろな授業の方法を探るために、それぞれのグループで1つの授業を取り上げ、子どもの実態把握、ねらいの設定、授業の組み立て、支援の方法等、よりよい授業となるように教員一人一人が授業に関する意見や疑問、改善案を示し、協議を深め授業改善に取り組んできた。

1ブロック低学年は月曜日・水曜日の2限目、中学年は月曜日・金曜日の2限目、高学年は火曜日・水曜日の2限目、2ブロックは毎日2限目と月曜日・木曜日・金曜日の5限目の始め15分を「自立活動の時間の指導」として位置づけ実践を進めた。

より『個』に迫るために、PDCAサイクルのチェック段階で実態把握に立ち戻り、ねらいを達成するために「個別」での取組がより効果的か「小集団」が必要かの協議も重ね、授業改善に取り組んだ。「ねらい」に迫るため指導形態の工夫、丁寧な実態把握、各グループでの「個別の指導計画」の読み合わせ、日々の授業での子どもたちの変化の報告等、全体で共有できるよう取り組んできた。

本紀要では、「自立活動の時間における指導」で獲得した力を日々の学習や生活に発揮できているか、という視点で子どもたちの変化をとらえていこうと観察し、授業を組み立て、改善し、成果を検証し、よりよい授業へと改善してきた2年間の取組をまとめた。

2. 授業研究

(1) 小学部1ブロック低学年

① 自立活動学習指導案（前期）

児童の実態	<p>本児は、明るくて人懐っこい性格であり、人とかかわることは大好きであるが、大人とのかわりが中心である。言葉の表出も多く、日常の簡単な会話のやりとりができる。「〇〇した」や「嬉しかった」等、気持ちの共感を求める姿が見られる。しかし、大人からの言葉かけが、自分の意図としていない返答や興味のない内容になると、意味のない言葉を発したり、違う話に切り替えようとしたりする。</p> <p>学習や活動の中で、できそうと思える課題には、褒めてもらうために積極的に取り組もうという姿勢が見られる。しかし、課題に対してやらなければいけないという気持ちも強いため、がんばりすぎた結果、次の授業では教師からの指示が通りにくかったり、注意されると近くにあるものを投げたりするといった衝動的な行動が見られる。1日の学校生活の中においても感情の起伏が激しく、気持ちを自分で調整することが難しい面がある。</p>		
指導目標	<ul style="list-style-type: none"> ・会話のやりとりを通して内容に沿った受け答えができる。(コミュニケーション) ・興味のある課題に落ち着いて取り組む。(心理的な安定) 		
活動(単元)内容の設定理由	<p>課題に取り組むための力はあるが、気持ちの面で集中できる時間が短いため、心の安定を図りながら少しずつ集中できる時間を増やしていくことが大切ではないかと考えた。プレスレット作りは、手先の動きが器用な本児が身近な人へプレゼントするという目的をもって取り組むことで達成感が得られるような教材である。学習の合間には、本児の好きなトランポリンで心の安定を図ることとした。この学習を通して、学校生活全体で落ち着いて活動に取り組める環境づくりや指導・支援などを導き出していきたい。</p>		
今までの評価	前時の評価と反省	<p>心の安定としてトランポリンを取り入れたが、本児の様子から、身体活動を最初に取り入れなくても集中できるように感じた。プレスレット作りでは、教師の顔写真を提示し、「誰にあげる?」と聞くと、「ママ」と答えた。プレスレットを作った後、他の担任に見せて褒めてもらい、嬉しそうな表情をしていた。ストローをハサミで切る、ストローをひもに通す等の活動は集中して取り組んでいた。色の名前を理解しており、ストローの色を見て、切りたい色の名前を言葉で伝えられた。ストローのひも通しがだんだんと難しくなり、できないときには、自分の顔をつねってしまうことはあったが、それでも諦めずに何度もチャレンジしていた。長く切ったストローにひもを通すときは、外れないように、ストローと通ったひもを押さえながら取り組んでいた。活動が終わるごとに写真カードを外すことで、活動の区切りが少し意識できた。</p>	
	日常生活や各教科等の中での評価	<p>身体を動かした後には心の安定が見られ、落ち着いて活動している。</p> <p>コミュニケーションの面では、本児が自分から話したい、伝えたいことがあれば、相手が自分の方を見てくれるまで、待っている。しかし、教師からの話し掛けに視線を合わせることはなく、耳だけを傾けて聞いていることが多い。</p>	
本時の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・教師を見て視線を合わせる。 ・ストローにひもを通す。 		
時間	活動内容	留意点及び支援の方法	評価の視点
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> ○始まりの挨拶をする。 ○活動内容を知る。 ・写真カードを見て活動内容を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・見通しをもちやすいように写真カードを提示して説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話を聞くと、視線を合わせることができるか。
展開 25分	<ul style="list-style-type: none"> ○プレスレット作り ・完成品を見て、プレゼントすることを知る。 ・ハサミを使ってストローの切り方を知る。 ・ストローをハサミで切る。 ・小さく切ったストローと花びらをひもに通していく。 ・プレスレットになるように教師と協力してゴムひもを結ぶ。 ・作ったものをプレゼント袋に入れて完成させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・切ったストローがバラバラにならないように、入れ物を置いておく。 ・ひもを結ぶとき、完成品を見せたり、簡単な言葉かけをしたりして気づかせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・集中してひもを通すことができるか。 ・難しく感じたときには、「手伝って」と伝えられるか。

まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> ○ルールを確認し、トランポリンで遊ぶ。 ・音楽が終わったら、終了し、いすに座る。 ○活動を振り返る。 ○終わりの挨拶をする。 ○ブレスレットを渡す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・できた作品を見せながら、振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ブレスレットを作った喜びを言葉で表現することができるか。
準備物	ストロー、ゴムひも、いす、机、トランポリン、ハサミ、プレゼント袋、リボン音楽、CDデッキ		
本時の評価	<p>ブレスレット作りは、最後まで集中して取り組むことができた。しかし、花びらを通しにくかったことや花の量が多すぎて見通しがもてなかったこともあり、本児が「おしまい」と自分で終わりを決めてしまった。上手く通せないと自分の顔をつねることがあった。気持ちを切り替えて取り組もうとしていたが、「手伝って」という言葉による表現にはつながらなかった。発言としては、「青のおばけ」や「ピンクのおばけ」とストローのことを表現しているようだった。事前にプレゼントする相手を伝えなかったので、本児の課題に対する意欲や期待感、達成感を高めることはできなかった。</p>		
支援の改善点	<p>活動の終わりを見通せるような教材の出し方が必要であり、言葉かけの工夫をすることで、目標の線までひもを通せるように支援する。また、「ここ」や「これ」等、抽象的な言葉による支援が多かったことも反省点である。分かりにくい発言に対しては、正しい言葉にして返していく。苛立ちを感じているときには、気持ちを受け止めるような言葉かけをする。不必要な発言に対しては聞き流すという方法をとったが、その他にもっと適切なかわりがあったのではないと思った。本児の発言を適度に返すことは必要ではあるが、活動に集中するため、会話を制限する時間を作っていく。また、様々な状況や活動、場所によって声のボリュームを自分で調整できるような支援も必要である。</p> <p>今回のように1人で取り組む課題は、意欲的に行うことができていた。しかし、授業後に衝動的な行動が見られたことから、がんばりすぎたために、心理的な安定にはつながらなかったと推測できる。そこで、教師と一緒に活動する中で共感関係を築き、人とのやりとりの楽しさや気持ちが通じ合うことの嬉しさを感じることを大切に授業内容に変更していきたい。</p>		

② 授業評価まとめ（前期）

ア 協議の内容（本時の目標に対して）

○教師を見て視線を合わせる。

- ・教材を提示したときにはよく見ることができている。しかし、会話をするときには、視線が合いにくい。

→視線を合わせやすいように、教師のいすを低くする。視線が合ってから話（挨拶）や活動を始めるようにする。

○ストローにひもを通す。

- ・学習に向かう態度が前向きで、両手を上手に使うことで集中して取り組むことができた。
- ・授業者の「これ作る」、「これ」、「ここ」等の言葉かけが抽象的であった。

→「ブレスレットを作る」、「ひもに」、「花を」など具体的に言葉かけをしていく。

→活動の途中での評価や言葉かけを簡潔に精選する。本児の活動に対して待つ姿勢を大切にする。

- ・ストローにひもを通す活動については、花びらをひもに通せなかったことと花の量が多す



<ブレスレット作り>

ぎて終わりの見通しがもちにくく、本児が「おしまい」と終わりを決めて活動を終了させてしまった。

→達成感が得られるように、あらかじめ使う花の量を決めるなど、

教材の出し方を工夫し、「ここまでがんばろう」と目標を決めて言葉かけをする。

→花のひも通しのときに、上手にできないときの苛立ちの気持ちをまず受け止め、「てつだって」という言葉によって気持ちを切り替えることができるように指導していきたい。また、言葉で自分の気持ちを伝えられるようにもしていきたい。併せて名詞や動詞などの語彙数も増やしていけるように指導していく。

イ 次の授業に向けて

今回の課題は最後まで集中して取り組めたが、更に指導目標に迫るための改善点がいくつか挙げられた。授業中に自分の頬をつねったり、授業後に物を投げたりする行動が見られたことから、この課題で心理的な安定を図ることは難しいのではないかという意見が出された。

そこで、本児の実態の把握に戻って検討をおこなった。本児は人とかかわることが好きで共感を求めている場面もしばしば見られる。しかし、気持ちが不安定になったとき、意味のない言葉を発したり注意された後、近くにあるものを投げたりして自分自身を落ち着かせようとする行動が見られ、自分の意としないことがあると気持ちを切り替えることが難しいという実態から、人間関係の形成における『行動の調整』の部分にアプローチが必要と考えられた。

そのため、現在までの教師との関係の土台を大切に、次からの授業では教師が本児の視線に立ってともに活動をすすめていく。その中で、人とかかわることの楽しさや気持ちが通じ合うことの嬉しさを感じとり、教師を介して安心して活動に取り組むことができる関係を築くことを目標に変更する。そのようなやりとりの中で、教師の言葉かけ等を模範とし表現方法を学ぶことを通して、気持ちの切り替えをスムーズに行ない、人へ伝えたい気持ちやかかわりたいという意欲を引き出していきたい。

③ 自立活動指導案（後期）

児童の実態	【指導案（前期）より実態把握が深まった点のみ記載】 これまでの取組から、人との関係づくりに課題があることが見えてきた。 本児は自分のしたいことができなかつたときやしたいことを制止されたとき等、自分の気持ちと違う場面に置かれたときに、衝動的な行動につながってしまう。それらの行動は、自分の気持ちに折り合いをつけ、適切な行動に移すという行動の調整が未熟なために、気持ちの切り替えができずに起こる。
指導目標	・教師と一緒に課題に取り組むことで、教師との共感関係を築き、かかわりをもつ。（人間関係の形成） ・安定した気持ちで、日常生活を過ごす。（心理的な安定）

活動(単元)内容の設定理由		<p>実態から、本児は課題に取り組む力をもっているが、難しい課題に直面すると、適切に対処できず気持ちが不安定になってしまうことがあるので、集中して課題に取り組めるようになって欲しい。また、教師と一緒に活動する中でやりとりの楽しさや通じ合うことの嬉しさを経験し、教師との共感関係を築くことで、安定した気持ちで日常生活を送って欲しいと考えた。</p> <p>本単元では、本児が好きなものや興味がもてそうなことを課題とし、教師と一緒に活動することで人のかかわりを楽しめるようにしたいと考えて、ストラックアウトをとりあげた。本児が理解しやすい簡単なルールを設定することで、活動に対して失敗してもいいという安心感をもたせ、活動意欲を高めていけると考えた。</p> <p>また、身体を動かしながらの活動に取り組むことにより、気持ちの安定を図り、維持していくことができると考えた。</p>	
今までの評価	前時の評価と反省	<p>玉を投げる際の位置を何度も伝えたことで、ルールに固執しすぎて、自己否定的な発言が多くなっていった。</p> <p>教師と順番にストラックアウトをする中では、自分の順番がくるまでいすに座って待つことができるようになってきた。また教師が的を外したときに、「おいしい」という声の本児から聞くことができた。</p> <p>反省点は、教師が的に当たったときの本児の喜びをうまく引き出すことができなかった。授業の雰囲気作りや、児童からの言葉を待ったり、感想を聞いたりするような言葉かけの工夫も大切にしたい。</p>	
	日常生活や各教科等の中での評価	<p>日常生活では、友だちと一緒に遊びたい気持ちを言葉で表現できるようになってきている。また集団遊びの中では、順番やルールを守って遊ぶことも意識して活動できるようになってきた。</p> <p>身体を動かした後だけでなく、抱っこしたり、抱きしめたりしても、心の安定が見られ、落ち着く様子が見られる。また褒めてもらいたいときには、「〇〇した」と両手を広げながら、嬉しそうに報告しに来るようになった。そのような様子から、本児が好きな身体遊びだけでなく、抱きしめるといったかかわりが心理的な安定に有効であったと考えられる。</p>	
本時の目標		<ul style="list-style-type: none"> ・的に当たったときの嬉しさや当たらなかったときの悔しさを言葉や表情で表現する。 ・ストラックアウトを通じて、教師とのかかわりを楽しむ。 	
時間	活動内容	留意点及び支援の方法	評価の視点
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> ○いすに座り、始まりの挨拶をする。 ○活動内容を知る。 ・写真カードを見て、活動内容を言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・時間中、抱きしめるなどのスキンシップを積極的にとる。 	
展開 35分	<ul style="list-style-type: none"> ○ストラックアウトをする。 ・遊び方を知る。 ・ゲームをする。 ・好きな絵を選び、的を貼る場所を決める。 ・教師と交代で的当てをする。(待っている間はいすに座る) 	<ul style="list-style-type: none"> ・玉を投げる場所が分かりやすいように、フラフープで投げる位置を知らせる。 ・15玉を準備し、児童の様子に合わせて、玉数を減らす。 ・好きな絵を選ばせ、活動意欲を高める。また、好きな絵を手掛かりに教師とのやりとりを楽しめるようにする。 ・教師とハイタッチをして交代することで、教師とのかかわりを増やす。また、うまくいかなかったときの気持ちの切り替えを促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・玉が的に当たったときに「当たった」とうれしい気持ちを言葉で表現できているか。 ・選んだ絵や貼りたい場所を言葉や指差しで教師に伝え、やりとりを楽しめているか。 ・玉を投げた後、教師のところへ行き、ハイタッチをできるか。 ・うまくいかなかったときも、落ち着いてゲームに取り組むことができているか。
まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> ○活動内容を振り返る。 ○終わりの挨拶をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題に対する達成評価を伝えたり、ストラックアウトの写真を見せたりして、振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・写真カードを見たときにストラックアウトをしたことを思い出し、簡単な言葉で気持ちを表現できるか。
準備物	場所の写真、赤玉、ストラックアウトセット、ホワイトボード、机、いす、フラフープ		

<p>本時の評価</p>	<p>活動する空間が広すぎるため、活動場所をプレイルームから学習室に変更した。挨拶後、すぐに本児から抱っこを求めてきた。場所の変更や活動内容への不安から、気持ちを安定させようとする様子が見られたので、抱っこしながら話す時間を設けた。抱っこしながら本児が自由に話すことを受けとめる会話をする中で、少しずつ不安が和らいだのか「(にこにこタイム)する！」と言い、自分のいすに座りなおし、落ち着いて始めることができた。</p> <p>的を貼る活動では、本児が好きな的を選び、自由に貼る活動を取り入れた。「何から貼る？」という教師の問いかけに対して「電車から貼る」「パンダ貼る」など、意味のある言葉で答えることができた。</p> <p>教師と交互に的当てをする際は、ハイタッチを交代の合図にしたことで本児とのかかわりが増えた。的に当たったときには教師にハイタッチをしに来たり、的に当たらなくても次々と玉を投げたり、自分の頬をつねったりすることなく交代できたことから、本児が教師とのかかわりを楽しみ、心に余裕をもって取り組むことができたと考えられる。</p>
<p>支援の改善点</p>	<p>今後も抱きしめるなどのスキンシップを積極的に取り入れる。また、ハイタッチでの交代をゲーム開始すぐから取り入れ、かかわりを増やす。その際、雰囲気作りを大切に、本児の気持ちを引き出せるようにする。</p> <p>全体的を落とせたという達成感を味わえるように貼る的を少なくしたり、的に当たらなかったときの気持ちの切り替えをスムーズにするために1回ごとに教師と交代したり、ゲームのやり方を整理することで、本児がより楽しく教師とかかわり、楽しめる取組にする。</p>

④ 授業評価まとめ (後期)

ア 協議の内容 (本時の目標に対して)

○的に当たったときの嬉しさや当たらなかったときの悔しさを言葉や表情で表現する。

- ・言葉に意味のあるものが増え、教師との会話のやりとりが増えた。
- ・教師は玉を投げるごとに気持ちの表現をすることを考えていたが、本児が次々と玉を投げたり途中で落ちた的を貼ったりしたので、結果として表現の機会が減ってしまった。本児はすべての的を落とすことの方に興味があったのかもしれない。1回のゲームに使う的や玉の数、投げ方等のルールを再検討してみる。落ちた的はすぐに箱などに片付ける等の工夫をする。
- ・教師がうれしい気持ちをどんな言葉で表現してほしかったのかが分かりにくかった。また、教師の言葉かけや表現が単調になっていた。表現がうまくできない本児に代わって教師が表現してみせることも必要である。



<ストラックアウトゲーム>

○ストラックアウトを通じて、教師とのかかわりを楽しむ。

- ・ゲームの準備 (的貼り) をしながら言葉のやりとりができ、本児から教師に抱きついてきた。また、ハイタッチでの交代は分かりやすく、かかわりが増えるので良い。
- ・本児にとってはかなり長い時間を集中して取り組んでいた。しかし、本児の場合はそれが良いかどうかはすぐには分からない。その後の学校生活全体の様子も含めて判断するのが良い。
- ・何度投げても的が落ちないと本児がやる気をなくすかもしれない。また、ストラックアウト自体は個別に行うゲームである。教師がいないと活動できない課題の方が、さらにかかわりを深めることができるのではないか。

イ 次の授業に向けて

本児が1人で活動する場面では、興味が的を落とすことや貼ることにあつたので、会話は

あるものの、教師とのかかわりが楽しめていたとは言えず、気持ちの表現もうまく引き出すことができなかった。本児と教材との関係に教師がうまく入り込めていなかったからと考える。しかし、教師と本児が交互に玉を投げる場面になると、ハイタッチなどを行って教師とのかかわりを楽しむ姿が見られるようになった。また、教師が児童の求めに応じて抱きしめると気持ちの切り替えができ、気持ちに寄り添った言葉かけをすると会話につながりやすくなった。教師とのかかわりが気持ちの安定に影響したことがうかがえる。

以上のことから、次のような改善や工夫を行い、教師との関係作りによる心理的安定を図る。

- ・的を貼る活動と玉を投げる活動の時間をはっきりと分け、よりかかわりをもつことのできるルールに変える。これにより、本児とのかかわりを豊かにし、言葉や表情等での表現を引き出すことをねらう。

- ・教師が表情豊かに喜んだり悔しがったりして、感情表現の見本を示す。

さらに、授業の結果は授業中に現れるものばかりではない。教師は学校生活全般の様子もよく観察、検討し、新たな教材の活用も含めた授業の改善を行いたい。

⑤ 考察

研修をすすめていく中で、何度も児童の実態把握に立ち戻り、試行錯誤しながら授業をつくっていった。前期の授業では、「課題に落ち着いて取り組む（心の安定を図りながら少しずつ集中できる時間を増やす）」という目標のもと1人で取り組む活動を設定したが、結果的に心理的な安定につながらなかった。そこで、後期の授業では、人とのやりとりの楽しさや気持ちを通じ合うことの嬉しさを感じることを大切にし教師との共感関係を築くことで、安定した気持ちで日常生活が送れるのではないかと考え、教師と一緒に活動できるゲームを設定した。身体を動かしながらの活動に取り組むことにより心の安定が見られ、ハイタッチや抱きしめる等のスキンシップをしっかりとることで、少しずつ教師とのかかわりや言葉のやりとりが増えてきた。

後期の授業後、「〇〇くんと一緒にする」と、ストラックアウトを一緒にしたい、という気持ちを教師に伝えることができた。本児の言葉や気持ちを受け止め、遊びや生活科の授業で形にしていくこともやりとりを深めていくきっかけになるだろう。日常生活の場面でも、自立活動の時間における指導の中で大切に取り組んだスキンシップや本児が感じた気持ちや言葉に共感することで、「またやりたい」「〇〇くんとまたあそぶ～」というような言葉が出てくるようになり、安定した気持ちで日常生活を過ごすことが増えてきている。

また、心理的な安定の評価は何を持って評価すればよいか、という議論がされた。本児の感情が素直に外に表れにくいために、そのまま目に見えることだけで評価してよいのか、という問題である。本児の場合には、授業の中では一見落ち着いているように見えても、1日を通して見たときに他の場面で返って不安定になる場合がある。つまり、この時間だけで決して評価できない。一部の場面だけを見るのではなく全体を見ることが大切であり、児童の言動のみにとらわれず、家庭での様子等あらゆる視点から児童の実態をとらえ、取組をすすめていくことが重要である。

(2) 小学部1ブロック中学年

① 自立活動学習指導案(前期)

	B	C	D	
児童の実態	好きな活動では、みんなと一緒に活動することができるが、気持ちが高揚すると自分の「(活動を)やりたい」という気持ちが優先され、「順番を守る」等の集団におけるルールが守れない。また暑いときや痒いときなど、自分のやりたいことができなかつたときに自傷・他傷行為をし、落ち着かなくなる。コミュニケーション面では、自分の要求や思いを伝えることが中心で、相手の話を聞くことは苦手である。	情緒が不安定になりやすく、泣き声など苦手な音に反応し、気持ちが大きく崩れてしまうことがある。自分で耳を塞ぐことや教師からの言葉かけで気持ちを立て直すことができる。 身体を動かすことは好きで、遊具遊びなどで一定時間身体を動かすことができる。しかし、全身の筋力(特に体幹)が弱く、授業や給食時、いすに座った状態で正しい姿勢を保つことが難しい。	不安なときや体調が悪いときに指を吸うくせがでたり、特定の友達につかみかかったりすることがある。そのときの気分によって、課題に対する集中力にムラがある。 身体を動かす活動は好きで、意欲的に取り組むことができるが、体幹機能障害があり、全身の筋力の使い方が苦手な身体で軸が定まらない。そのため、動きがぎこちなく、両足跳びでは地面から足が離れにくい。	
指導目標	・好きな活動のときに、順番を待つことができる。 ・人とのかかわりの楽しさを味わう。(人間関係の形成)	・好きな活動やダイナミックな活動を通し心身の安定を図る。 ・全身の筋力、体力を向上させる(正しい姿勢を維持できる時間が増える)。(身体の動き)	・いろいろな動きを通して、身体の使い方を知る。(身体の動き) ・好きな運動をすることで、ストレスを発散し安定した気持ちでいられる。(心理的な安定)	
活動(単元)内容の設定理由	Bは日頃から、教師とのかかわりが多く、児童同士のかかわりはあまり見られない。トランポリンはBにとって大好きな活動であるので、順番を待つことができるようになるのではと考えた。また、活動で「順番」を表すカードが理解できるように、順番に買い物をするという短いお話を、順番カードを用いて進めていく個別課題を設定した。CとDはともに全身の筋肉量が少なく、力の入れ方や使い方に課題がある。いすに座っているときや三角座り(体育座り)のときは、背骨が曲がり易く正しい姿勢を維持できない。授業中座っていることに疲れ、気持ちの面でもだらけてしまうことが見られる。運動だけでなく、日常生活を行う上でも重要になってくる体幹の筋力を養うと同時に、良い姿勢や筋力の使い方も身に付けてもらいたい。上体起こしで腹筋を鍛え、クッションでの長座位で体幹を支えられる筋力をつけたい。また、最後に彼らの好きなトランポリンなどの全身運動を行うことで、課題に迫るとともに、心理面の安定にもつながるのではないかと考えた。			
集団での授業を設定した理由	Bについては、「順番を待つ」「人とのかかわりの楽しさを味わう」という目標を達成するために、小集団が必要である。好きな活動を設定し、小集団のルールやきまりに慣れることから始め、次に人と一緒に活動する楽しさを味わってもらいたい。C、Dに関しては「筋力をつける」「身体の使い方を知る」等の目標を達成するために楽しく身体を動かす活動が必要である。そのために、トランポリンが効果的であると考えた。また、Bも好きな活動がトランポリンであることは共通している。3人でトランポリンをすることで、Bは小集団の中でルールを守って活動するねらいに迫り、C、Dについてはトランポリンを跳ぶことで筋力を鍛えたり体力をつけたりするねらいに迫ることができる。			
今までの評価	前時の評価と反省	・順番ボードを見ることで、見通しがもてた。自分の名前を連呼して自分の順をアピールしてしまう回数は1度だけだった。 ・姿勢が崩れることはあったが、離席や手を叩く回数は少なかった。	・姿勢が崩れることはあったが、離席することはほとんどなく、概ね落ち着いて活動に取り組めた。 ・上体起こしでは、1度肘をつきそうになったが、身体(お腹)に触れて意識をもたせることで、腹筋の力を使ってやり直すことができた。(5回)	・トランポリンでは、身体の軸がぶれてしまうことがあったが、左手(利き手)を支持することで体勢を立て直し、5回以上連続して跳ぶことができた。 ・トランポリンが終わった後の指吸いが少なく、表情が穏やかであったことから心理面は安定していたと考える。
	日常の中での評価	・特に変化は見られていない。	・特に変化は見られていない。	・三角座りの座り方が少しわかってきており、姿勢を維持できる時間が長くなってきている。

本時の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・順番ボードを見て、順番を待つことができる。 ・授業時間中、手を叩いたり、いすに座る姿勢が崩れたりしない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業時間中、落ち着いて活動に取り組める。 ・腹筋の力で、上体起こしをする。(5回) 	<ul style="list-style-type: none"> ・トランポリンで跳ぶときに、身体の軸をしっかり作り、両足が地面から離れるように上に跳ぶ。(5回以上) ・指吸いをせずに活動に集中する。 		
時間	活動内容 (吹き出し内に支援と留意点を示す)		評価の視点		
導入 10分	<ul style="list-style-type: none"> ○準備をする。 ○あいさつをする。 		<ul style="list-style-type: none"> ・離席がないか。 ・姿勢よく座っていたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・離席がないか。 ・姿勢よく座っていたか。 	
展開 25分	<ul style="list-style-type: none"> ○本時の学習内容を知る。(学習内容と予定を読んだり、イラストを見たりする。) ○分かれて活動をする。 B：個別学習 <ul style="list-style-type: none"> ・お話を聞いて、順番カードをミニボードに貼りながら登場順を答える。 C D：個別学習(一人ずつ交代で) <ul style="list-style-type: none"> ・裸足になる。 ・腹筋運動(上体起こし)をする。 ・待機時は、長座でクッションに座る。 ○トランポリンを跳ぶ。 <ul style="list-style-type: none"> ・裸足になり、セラピーマット(以下、マット)で待つ。 ・顔写真カードを見て、順番を理解する。 ・順番に以下の活動をする <ul style="list-style-type: none"> 手押し車をする(マットからトランポリン)。 →トランポリンを跳ぶ。 →飛び石を渡る(トランポリンからマットまで)。 ・学習順を提示したボードを見ながら振り返る。 ・「がんばった」シンボルカードを提示し、「がんばった」の言葉と一緒に使う。 		<ul style="list-style-type: none"> ・好きなハンカチで意欲をもたせる。(C) ・順番を待つことができたか。 ・全体を通して落ち着いて授業に参加できたか。(手を叩かない、いすに座る姿勢が崩れていないか。) 	<ul style="list-style-type: none"> ・肘をつかずに腹筋を使って、上体起こしできたか。 ・全体を通して、離席や寝ころびをしなかったか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・腰が引けていないか。 ・両足が地面から離れ、上に跳べたか。(5回以上) ・全体を通して、指吸いが少なかったか。
まとめ 10分	<ul style="list-style-type: none"> ○本時の学習内容を振り返り、シンボルカードで感想を聞く。 ○終わりのあいさつをする。 ○片付けをする。 		<ul style="list-style-type: none"> ・授業全体を通して、離席した場合は追わないで、戻るのを待つ。(B) 		
	B	C	D		
本時の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・参観者が多かったので、気持ちが高揚して「(次)Bくん、Bくん」という回数が増えたが、手元の順番ボードを見て順番を待つことができた。 ・お話のとき座る姿勢は崩れなかったが、トランポリンのとき一度だけ離席して自分の知っている参観者の元へ行ってしまったことがあった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・姿勢が崩れることはあったが、少しの時間待つと言葉かけで気持ちを切り替えて次の活動に取り組むことができた。 ・上体起こしでは、疲れてくると手をついてしまうことがあった。目標の5回はできなかったが、やり直すよう促すと、もう一度起き上がろうとする意欲が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・トランポリンでは、5回以上しっかりと跳ぶことができた。今回は参観者が多く気持ちが高揚していたことでがんばれたと考えられる。 ・気持ちが高揚しすぎると、集中力を欠くことが多いが、今回は集中力を保つことができ、指吸いの回数も少なかった。 		

支援の改善点	<p>今後は違う活動内容のときにも、順番ボードを活かしていけるようにしたい。</p> <p>いすに座って行う活動時間が短かったため姿勢が崩れることはなかった。今後はトランポリンを待つときに、いすを使って待つことを検討していきたい。</p>	<p>上体起こしは、前はスムーズに5回できたが今回は気持ち乗れず、できなかった。やり直して5回目にチャレンジする際に好きなタオルにタッチするよう促すと、もう一度がんばれた。今後も、気持ちの励みにできる好きなタオルなどを用意しておく。</p>	<p>今回はD自身が5回跳ぶぞという意識をしなくても、自然に5回連続して跳ぶことを目標としていた。今後は落ち着いた気持ちで「今から5回」ということを意識して跳べるように、途中で跳ぶのを少し止めたりして落ち着く間を作りながら取り組ませたい。</p>
授業全体の評価と反省	<p>5回ほど同じ内容で授業を行い、集団や活動内容に慣れ、見通しをもてるようになってきた。この授業では、授業の中に準備や片付けを含めていなかったが、準備や片づけにおいても少しずつ自主性が出てきたため、今後は授業の活動として位置づけられると考えている。トランポリンの活動は、3人それぞれの課題が含まれており心理面の安定という意味でも良い題材だと考えている。個別課題は、いくつかある活動の中から自分でやりたい活動を選択して取り組むようにしていきたい。そうすることで課題に対する自主性や気持ちの安定を図ってほしい。そのため、次の段階としてはいろいろな活動に触れる中で、心身の条件を満たす活動（好きな活動）を拓げていきたい。</p>		

② 授業評価まとめ（前期）

ア 協議の内容

○授業者の反省より

- ・「終わりのあいさつ」をしてから、「片付け」をするより、先に「片付け」を済ませてから「終わりのあいさつ」をする方が落ち着いて「片付け」ができるのではないかな。

○K J法及び他学部からの意見より

- ・「～がんばったら～できる」（条件的）よりも「～してから～しよう」（時間的）の言葉かけの方がよい。
- ・トランポリンの時間が短かった。児童の好きな活動なのでもう少しできるとよかった。
- ・Dのトランポリンの順番が3番目なので待ち時間が長いのでは。立ち上がってきていた。
- ・B自身がミニホワイトボードにトランポリンの順番を貼ったらどうか。
- ・トランポリン、残り時間が分かるような工夫があればよかった。
- ・同じ場所で個別に分かれているので、集中しにくいのではないかな。Cは気にしていた。
- ・自分から行動したり、自分で選んだり、自主的な活動があればよいのでは。

イ 改善点及び次の授業に向けて

- ・終わりのあいさつと片付けの順序を、片付け→終わりのあいさつにする。
- ・Bの個別の取組については、授業者がBは集中できていたと評価していることから、同じ場所で個別課題を継続して行う。
- ・「～がんばったら～できる」という話し方を「～したから～しよう」という時系列で話すようにする。
- ・個別の取組を個別選択制にする。いくつかの中から今日のプログラムを自分で選択する。（5つの中から2つというように）

- ・トランポリンは「お楽しみ」の活動にする。トランポリンには2人乗り、1人は跳び、もう1人は座って揺れを楽しむ等、一緒にトランポリンができる工夫をする。トランポリンを跳ぶときには優しく跳ぶ、座る方は寝転ばないというルールが必要である。
- ・順番カード等で見通しがもてるようにする。個に応じて自主的にミニホワイトボードを使用できるようにする。

③ 自立活動学習指導案（後期）

児童の実態、目標、集団の授業を設定した理由については、前期と同じであるため省略する。活動内容の設定理由については、後期に新たに取り入れた活動についてのみ述べる。

活動(単元)内容の設定理由	個別活動では活動を2つすることにした。また、自主性をもたせるために活動は3つ用意し、1つは好きな活動を自分で選ぶように設定した。3つの活動のうち上体起こしと手押し車は前回と同じで、キャッチボールを新たに加えた。キャッチボールは、相手をしっかり見てボールを投げ、相手が投げるところを見ていないと成立せず、相手を意識するには良い課題であると考え。前回、Bは個別課題の中で順番のあるお話の理解に取り組んだが、順番については理解できてきたので今回は相手を意識するようにキャッチボールを取り入れた。		
今までの評価	<p style="text-align: center;">B</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2人で乗るトランポリンのとき、順番が発表されると同時に、教師と一緒にミニボードにカードを貼った。友達が跳んでいるときに、自分の名前を言い、跳びたいと訴えることはあったが、飛び出して行ってしまったりはしなかった。 ・キャッチボールでは、互いの名前を呼び、相手(教師)へボールを投げることを繰り返し行った。相手(教師)の名前を呼ぶことを忘れてしまうこともあるが、教師の言葉かけで名前を呼び、ボールを高く飛ばすことができた。また、相手(教師)からのボールも、両手で受け取ることもできた。 	<p style="text-align: center;">C</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やりたい活動の選択は、以前1度選んでやった手押し車がしんどかったことを覚えているようで、今回はボール遊びを好んで選び、楽しみながら取り組むことができた。ただ、少しテンションが高く、集中を欠いてしまうことがあった。 ・トランポリンを跳ぶときに、友達が横に座っていても、バランスを崩すことなく跳ぶことができた。いすに座っているときは、骨盤が寝てしまい猫背になりがちだが、トランポリンのときは骨盤がしっかりと起きて、身体の軸が定まって跳ぶことができていた。 ・全体的に離席が多く、落ち着きがなかった。 	<p style="text-align: center;">D</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やりたい活動は、手押し車を選択し、意欲的に取り組むことができた。以前は膝より上を支持しないと姿勢を保てず前に進むことはできなかったが、脛を支持しても体幹に力を入れて姿勢を維持し、3歩進むことができた。 ・トランポリンは、友達と一緒に乗っても、バランスを取って跳べるようになりつつあり、1人で跳ばなくても、連続して跳べるようになってきた。そのため、友達と一緒にという楽しさと、好きな感覚刺激が得られること、また、適度な運動量を確保できることで、気持ちが高ぶり過ぎることなく、ゆとりが見られるようになってきた。
	日常生活や各教科等での評価	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスでの活動のとき、予め順番を伝えておくことで、少しずつ順番が待てるようになってきた。 ・自分のしたいことを伝えるとき、先に相手の名前を呼び、伝えられるようになってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・丸いすに座っているときの姿勢が取組開始時に比べ、少しずつ良くなってきている。 ・朝から嫌なことがあって、自立活動の前に泣き崩れていたときも、落ち着いて授業に向かうことができています。
本時の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・順番ボードを見て、待つことができる。 ・キャッチボールでは、ボールをキャッチし、相手(教師)に返すことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・好きな活動(やりたい活動)を自分で選び、落ち着いて活動に取り組める。 ・体幹の筋肉に力を入れ一定時間トランポリンを跳び続ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・やりたい活動を選択し取り組む中で、身体のいろいろな動かし方を体験する。 ・好きな感覚刺激を入れ(跳ぶ)、気持ちの安定を図る。

時間	活動内容 (吹き出し内に支援と留意点を示す)	評価の視点		
		B	C	D
導入 10分	<ul style="list-style-type: none"> 丸いすに座る。 ①始まりのあいさつをする。 ○本時の学習の順番を知る。 ②準備をする。 ③個別学習をする。 ○カードを読んだり見たりして個別学習をすることを知らる。 ○以下の3つの中から2つに取り組む。 キャッチボール 腹筋運動(上体起こし)、 手押し車 (1つは、ねらいに沿って決まっている。 もう1つは自分で選ぶ。) ・決まっている活動 B:キャッチボール C D:腹筋運動(上体起こし) ○分かれて活動をする。 ・裸足になる。 ・順番に2人が行い1人は待機する。 (1回2分) ・待機する児童は、丸いすに座る。 ④トランポリンを跳ぶ。(1回2分) ・1人が跳び、1人がトランポリンの上に座る。 ⑤片付けをする。 ⑥終わりのあいさつをする。 	<p>全授業を通じて離席、姿勢が崩れたときは、座るカードを提示する(B、C、D)</p> <p>三角マットを背中に置いて、足を三角に立て教師が固定する(C、D)</p> <p>言葉かけをし、ボールを教師に返すように促す(B)</p> <p>何回できたか分かるように1回ずつ缶をカゴから出す(C、D)</p> <p>・キャッチボールでは、ボールをキャッチし、相手(教師)に返すことができたか。</p> <p>・順番ボードを見て、順番を待つことができたか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・離席がないか。 ・姿勢よく座っていたか。 ・自分で選んだ活動に、進んで取り組むことができたか。 ・必要に応じて、片手(両手)支持する(D) ・姿勢よく跳べていたか。 ・最後まで跳び続けられたか。 ・全体を通して、離席や寝ころびをしなかったか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・腹筋運動では、お腹に力を入れられていたか。 ・キャッチボールや、手押し車では、正しい動きをすることができたか。 ・意識して5回跳べたか。 ・表情よく跳ぶことができたか。 ・全体を通して、指吸いが少なかったか。
展開 30分	<p>トランポリンに寝転ばないように、座るカードを提示する(C)</p> <p>跳びながら、教師の動きを模倣させる(C)</p> <p>タイムタイマーを提示し、残り時間を示す(C)</p>	<p>順番が分かるように、顔写真カードを使って提示する(B)</p>	<p>・必要に応じて、片手(両手)支持する(D)</p>	
まとめ 5分				
準備物	トランポリン・マット・セラピーマット・座るカード・数字カード・ホワイトボード・活動提示カード・三角マット・クッション・パーテーション・ボール・缶・カゴ・写真カード・机・丸いす・タイムタイマー			
本時の評価	B	C	D	
	<p>自分の名前を言って跳びたいと訴えることは少なく、着席をして待つことができた。また、跳ぶときには、友達を踏まないように距離をとって、意識して跳ぶことができるようになってきた。キャッチボールでは教師の名前を呼びボールを両手で投げることができた。</p>	<p>全体的に気持ちが高ぶっており、落ち着きがなかったが、個別学習で選んだキャッチボールでは、落ち着いて取り組むことができた。トランポリンを跳ぶときには体幹の筋肉に力を入れ、良い姿勢で跳ぶことができた。しかし、すぐに疲れてしまい、2分間跳び続けることはできなかった。</p>	<p>個別学習では手押し車を選択し、膝を支持してもらうことなく、最後までお尻が上がることなく、体幹の筋肉に力を入れて進むことができた。痛み上がりで朝から元気がなく、少し情緒不安定であったが、トランポリンを跳ぶことで発散でき、笑顔がたくさん見られ、その後気持ちが安定した。</p>	

支援の改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・トランポリンのとき、主指導の持つミニボードを見ることができるようになってきているので、徐々に言葉かけを減らしていく。 ・教師とのキャッチボールが、スムーズに行えている。友達と一緒にできればと考えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日常的に不安定で泣き崩れることが減ってきている。その反面、嬉しさや楽しさで気分が高ぶり、活動に身が入らないことがあるので、リラックスしつつも程よい緊張感を保てるような支援を考えていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな動きができるように、種目のレパートリーを増やしたり、支持する力加減を変えたりして、その日の様子を見ながら支援していく。どの活動でも、体幹に意識を置くことが重要になってくるので、腹筋を刺激し、意識をもちやすいようにする。
授業全体の評価と反省	<p>この集団や活動に随分見通しがもてるようになり、安心感をもって授業に向かえるようになってきている。個別の活動の中でも個々の課題に取り組めており、活動を一つ選択することで自主的に向かえることもあった。以前は日常生活において、泣き崩れたり、自傷・他傷行為があったりしたので、彼らの好きな活動（やりたい活動）をすることによって気持ちの安定を図ろうとした。その成果もあってか、大きく気持ちが不安定になる場面は減ってきたように感じる。しかし現在は、楽しい気持ちが高揚しすぎて、自分の気持ちをコントロールできていないような様子が見受けられる。楽しめていることはとても良いことだと思うが、他の活動に向かうためには、ある程度自分の気持ちをコントロールし、平常心を保てるようになってほしい。そのため、今後は、好きなトランポリンを楽しんだ後、クールダウンを図るために、部屋を暗くして横になるなど友達と一緒にリラックスする時間を設けようと考えている。落ち着いた状態で各教室に戻れるようにし、その後の活動がスムーズに行えるようにしていきたい。</p>		

④ 授業評価まとめ（後期）

ア 協議の内容

○授業者の反省より

好きな活動を選択し楽しめることは良いことではあるが、次の活動へ向かうときには、ある程度気持ちをコントロールし、平常心で向かえるようになってほしいと考える。クールダウンさせる方法を検討したい。

○KJ法で出た意見より

- ・順番の表が、3人分一緒になっていて、活動（何をするか）も含まれて3×3の表になっていて難しいように思う。一人一人別々に順番と活動を提示した方がよいのでは？
- ・個別学習時の場所の使い方に工夫が必要だと思う。待っている児童にわかりにくい。待っている児童に時間が分かるものがあってもよい。
- ・座って待つのは難しい。座って待つことをきちんと伝える必要がある。座って待つ姿勢も課題になってくる。
- ・個別学習時の待つ時間をなくし、一人でできる課題を設定しても良いのではないか。「待つ」課題はトランポリンのところだけで十分だと思う。
- ・気持ちのコントロールよりも大切なのは切り替えではないか。ゆったりした活動でクールダウンできるか分からないがやってみてもよいのでは。

イ 改善点及び次の授業に向けて

- ・個別学習での「待つ」課題をいすに座ってではなく、一人でできる課題に変えて活動しながら待てるようにする。（バランスボード等）
- ・クールダウンの方法について、以下の中からどの方法を取り入れていくか検討していく。

部屋を暗くする、ゆっくり息を吐く、トランポリンの上で3人横になる、圧刺激、
段ボール（狭くて暗くて1人になれる）の中に入る、
温かいお湯が入ったビニール袋を身体にのせる

- ・個別学習時の部屋の使い方を検討していく。例えば、個別学習のスペースを狭め、待っている児童が壁や窓向きに座れるように配慮する。

⑤ 考察

「落ち着いて座ってられない」という課題を抱える児童は多い。その原因は児童によって様々であるが、気持ちの問題だけではなく体も関係していることがある。今回は児童の実態把握から、「体（体幹の筋力）がしっかりすることで、安定して姿勢良く座ることができ、気持ちも安定して学習に取り組める」という仮説から授業実践を行った。約6ヶ月間の取組で完全に般化させるまでの成果は得られていないが、変化は確実に見られた。本来は「しんどい」はずの腹筋等の活動にも意欲的に取り組む様子が見られた。少しずつであるが、筋力がつき、体はしっかりしてきている。普段の生活の中でも、寝転んでだらけてしまったり、すぐに座りこんだりすることも減り、立ったまま、姿勢良く座ったままで活動を続けられるようになってきた。やはり「心」と「体」は、密接に繋がっていると今回の授業実践から考えさせられた。しっかりとした体をつくることは様々なことをがんばる気持ちにつながっていくのだと感じる。

今回の授業は3人の小集団という形が取られたが、授業当初から集団が必要なねらいが設定されていた児童はB 1人だった。C、Dは、目標に集団の設定が必要となるような「人間関係の形成」は無く、取組内容も個別的なものであった。しかし、Bが小集団を必要としていることや教材が共有できるという理由で小集団という体制で授業を行った。集団であったということが、目標の達成度に大きな影響は与えていないが、授業自体には影響を及ぼした。「体を鍛える」という取組は、いくら楽しい活動や良い支援を設定しても子どもたちが「がんばらなければならない」ことには変わりはない。今回は、友達の応援があり、ともにがんばることができた。大人と2人きりで活動するより友達とともに活動する方が効果的であったと言える。自立活動は個別の指導計画から始まり、個の目標を達成するために効果的な場を選んで取組をする。個々の特性によっては、「効果的な場」が集団であったり、個別の体制であったりする。その選択を間違えずにより効果的な場、環境を整えることは大切な支援の1つと言えるのではないかな。

今回の授業実践で得た成果や話し合ったことを、より多くの児童に返していけるよう、今後も効果的な授業改善を重ねながら実践を深めていきたい。

(3) 1ブロック高学年

① 自立活動学習指導案（前期）

	E	F	G	
児童の実態	友達や教師とかかわることは好きで、自分からかかわりにいくことができる。内言語は豊富であり、よく話す。発音は早口かつ不明瞭で相手に伝わりづらいことがある。何度も聞き返されると、諦めてしまう。二文字の単語は明瞭に発音できるが、三文字以上の単語になると、全体的に発音が不明瞭になる。注意散漫などところがあり、話を集中して聞くのは難しく、内容が理解できていないことが多い。	自分の思いを伝えたいという気持ちはあるが、うまく伝わるかどうか不安なため、声が小さく、相手にとって聞き取りづらい。聞き返されると、口ごもって黙ってしまう。単なる要求だけでなく、経験したことや気付いたことなども二語文で伝えられつつある。朝の会の司会や児童会での挨拶などの場面では「～です。」「～しました。」など丁寧な表現で話す。上唇が上がっていて唇を閉じた状態を保持しにくく、高口蓋で、発音は不明瞭である。語彙数は少ない。	話すことは大好きで、いろいろな人と楽しそうに話す。発音は不明瞭だが、三語文で話ができる。経験した事実や嬉しかったこと、悲しかったことなどの感情もそのときの状況を思い描きながら表情豊かに話す。一方で、自分の思いが通らないと、言葉で伝えようとはせず、大泣きすることが多い。「○○貸して」など、要求を出すことはできるが、相手の返事を待たずに取ることがある。友達付き合いにも課題があり、一方的なかかわりをする人が多い。	
指導目標	・一文字ずつゆっくり発音する。(コミュニケーション)	・教師に欲しい物の名称を言って、要求を伝えることで発語に自信をもつ。(コミュニケーション)	・適切な方法で教師に要求を伝える。(コミュニケーション)	
活動内容の設定理由	<p>コミュニケーションの課題を自然な流れの中で取り入れられるとともに、言葉のやりとりに対して関心や期待感がもてるように、マスの中にお楽しみポイント（☆のマス）を置いたすごろくゲームを行うことにした。また☆のマスに止まると、それぞれの課題に合わせたコミュニケーションを行うことで、好みのイラストシールをもらえるようにした。シールをもらうコミュニケーションの方法として、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Eは一文字ずつの音を意識できるように、箱から平仮名で書かれた言葉のカード（文字カード）を引き、それを読んで伝える。また箱の中に、上手く発音できる単語と不得意な単語を入れて、意欲を高めながら挑戦できるようにした。 ・Fは意欲的に発語できるように、好みのイラストシールを多数用意する。その中で欲しいイラストを選んで言葉で伝える。 ・Gは適切な要求のやりとりを獲得するために、好みのイラストシールを多数用意する。「○○ください。」と要求し、教師から「はい、どうぞ」とシールを手渡されるまで待つ。 			
集団での授業を設定した理由	3人がそれぞれコミュニケーションの課題をもっている。友達と競い合うゲームをする中で課題に向かう方が、より意欲的に取り組んでいけるとともに、自然な流れの中での言葉のやりとりができると考え、集団での授業を設定した。			
今までの評価	前時の評価と反省	文字カードを読もうとする意欲はあるが、長い単語になると、途中の文字を抜かして読むことがある。また、促音を読むのが苦手である。	初めての活動だったので、少し緊張はしていたものの、ルールを意識し、意欲的に取り組めた。声は小さく、絵の名称も間違えることがあったが、言葉かけをすると、はっきり言おうとがんばることができた。	「○○ください」と要求を出すことはできた。しかし、要求を出すと同時に対象物に手を伸ばしていた。言葉かけをすることで待つことはできるが、継続した指導が必要である。
	日常生活の中の評価	特に変化なし。	特に変化なし。	特に変化なし。
本時の目標	・文字カードを見ながら、一文字ずつゆっくりと発音する。	・机上に並んでいるイラストシールの中から欲しいものの名称を、聞き手に聞こえるように言い、そのイラストシールをもらう。	・机上に並んでいるイラストシールの中から欲しいものを「○○ください」と言って要求し、相手からシールを手渡してもらう。	

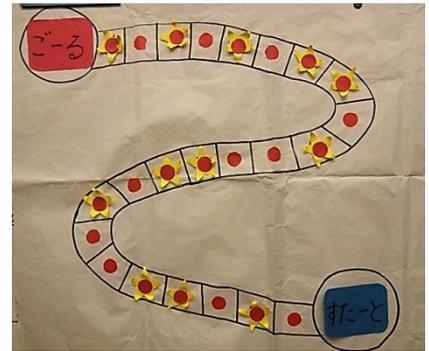
時間	活動内容 (吹き出し内に支援と留意点を示す)	評価の視点					
		E	F	G			
導入 10分	<p>○始まりのあいさつをする。</p> <p>○本時の学習内容を知る。 ・すごろく</p>						
展開 30分	<p>○すごろくのルールを確認する。 ・1人ずつサイコロを投げる。 ・☆のマスに止まるとシールをもらう。</p> <p>○じゃんけんですごろくの順番を決める。</p> <p>○すごろくをする。(1人ずつ順に) ①サイコロをふる。 ②☆のマスに止まると、教師とやりとりをしてシールをもらう。 E: 箱から文字カードを1枚引き、教師に伝える。 そのイラストシールをもらう。 FG: 欲しいイラストシールの名前を言って、教師に伝える。そのイラストシールをもらう。 ③席に戻って台紙にシールを貼る。</p>	<p>E G: 教師が見本を見せて確認する。</p> <p>F: イラストシールを見せながら、言葉でルールを確認する。</p> <p>E: 読み間違ったり、早口で言ったりした場合は、教師が正しく発音してみせる。また文字カードを一文字ずつ押さえながら読むように促す。</p> <p>・一文字ずつゆっくりと発音できたか。</p> <p>・教師に聞こえる声の大きさと欲しかったものの名称を言えたか。</p> <p>F: 発語に自信をもてるように、少し不明瞭でも、イラストシールをすぐに渡す。</p> <p>G: 教師が手渡す前に手に取った場合は、再度ルールを確認し、やり直すようにする。</p>	<p>・「○○ください」と言ってから教師に手渡されるまで待つことができたか。</p>				
	まとめ 5分	<p>○振り返る。</p> <p>○終わりのあいさつをする。</p>					
準備物	すごろく盤	さいころ	顔写真カード	シール	文字カード	箱	シール台紙
		E	F	G			
本時の評価		「ドラえもん」→「だーえもん」、「たなかせんせい」→「たーかせんせい」など文字を省略するが、文字カードを見せながら、一文字ずつ指差しすると、丁寧に読もうとした。	前回よりも大きな声で要求を出すことができた。声が小さいときもあるが、大きな声で自信をもって発語できることもあった。また、名称だけでなく、「○○ください」まで言うことができた。	初めに見本を見せることで、「○○ください」と言ってすぐに手を出して取ることはなく、きちんと手渡されるまで待つことができた。			
支援の改善点		文字カードを見せながら、一文字ずつ指差しし、意識して丁寧に読めるようにする。多少、不明瞭でも意欲的に発音できるように、言い直しはさせない。	少々声が小さく聞き取りにくくても、自信をもって発音させるために、聞き返したり、言い直しさせたりしないようにする。また、大きな声で自信をもって発語できたときは、誉める。	できたことに対して、誉める。			
授業全体の評価と反省		本時では、Fには自信をもって発語させるため、少々聞き取りにくくても言い直しなどの指導をせずに良い点だけを誉めるようにした。そのため、萎縮することなく発語できたと思う。Gは、本時の目標を達成することができたが、他の場面でもできるように指導していきたい。すごろくゲームの中でコマの磁力が弱く、はがれ落ちることがしばしばあった。また、教師からのシールの提示の仕方が煩雑になってしまったため、改善が必要である。					

② 授業評価まとめ（前期）

ア 協議の内容

○K J法で出た意見より（他学部の意見も含む）

- ・イラストシールを渡す用の机を毎回出し入れしているので、教材の位置や教室の環境設定を児童の動線も含めて考え直しても良いのではないか。
- ・じゃんけんで順番を決めているが、児童は結果の順番を理解して活動しているのか。
- ・すごろくで☆のマスに止まったかどうかを児童に質問していたが、このやりとりは必要あるのか。
- ・Gはとても上手に要求もでき、本時の目標が達成できていた。次はどうするか。



<すごろくゲーム>

○授業者の反省より

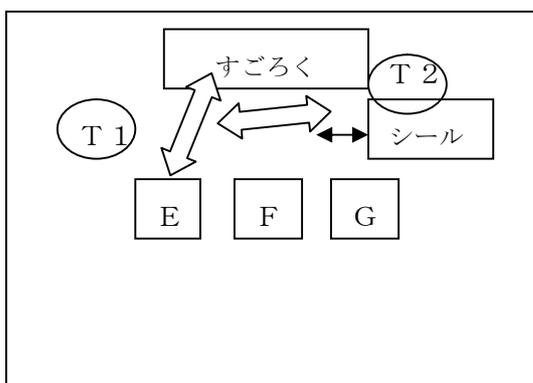
- ・教師のイラストシールの提示の仕方が毎回机を出し入れして、児童が気になるような動きをしていたので改善が必要だと感じた。

イ 改善点及び次の授業に向けて

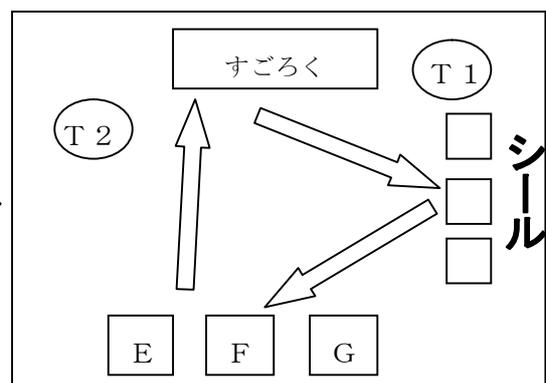
○環境設定について

- ・児童の動線が交わることなく、スムーズに活動に取り組めるようにする。
- ・すごろくをする、シールをもらう、待つ場所をはっきりと区別する。

（改善前）



（改善後）



↔ 机の移動 ↔ 児童の動き

○順番表について

- ・じゃんけんで順番を決めた後、顔写真で示して見通しをもてるようにしておく。

○指導内容について

- ・すごろくのルールについては、やり直しなど細かな指導は避け、目標にかかわるシールのやりとりを重点に考えていく。

○Gの目標について

- ・授業内ではきちんとやりとりできるようになり、普段の生活場面も教師に対しては適切な方法を意識できることも増えてきた。しかし、児童同士のかかわりの中では不適切な方法になることが多い。普段の生活場面での児童同士のかかわりにも般化していけるように、イラストで示されたやりとりのカード



<くださいカード>

(くださいカード)を提示しながら活動に取り組み、そのカードを普段の生活場面でも活用し、授業で学習している適切な方法を自分で思い出してやりとりしていけるようにと考えた。

③ 自立活動学習指導案（後期）

		E	F	G
児童の実態 (前期からの変更部分のみ記入)		「トイレに行きたい」など以前に比べて明瞭に発音することがあったが、まだまだ発音しづらい言葉が多い。また「あんぱんまん」を「あばまん」など、途中の文字を抜いて読んだり、「あんぱんぱん」など、文字を間違っ読んだりすることがある。しかし、少しずつだがゆっくり発音しようと意識する場面が増えてきた。	2学期半ばから一気に言葉数が増え、休憩時間などよく話すようになった。自分なりの言葉だが、経験したことを話そうとするようになったり、教師との日常会話のやりとりも積極的にできるようになったりしてきた。しかし授業などの設定された場面では、まだ声が小さく、発音が不明瞭である。	教師に対しては「〇〇貸して」と要求を出して、相手の返事を待てるようになってきた。しかし児童間では、返事を待たずに持って行ったり、黙って持って行ったりする。
指導目標		・文字を見ながら一文字ずつゆっくり発音する。 (コミュニケーション)	・教師に欲しい物の名称を言って、要求を伝えることで発語に自信をもつ。 (コミュニケーション)	・普段の生活場面で、適切な方法を用いて要求を伝える。 (コミュニケーション・人間関係の形成)
活動内容の設定理由		E、Fについては前期と同じ内容で取り組む。Gは児童間のやりとりになると、すぐに相手の物を取ったり、黙って持って行ったり、普段の生活場面で活かされているとは言い難い。そのため、授業内で正しいやりとりのくださいカードを見せながら、要求の練習を繰り返し取り組もうと考えた。普段の生活場面の中でも授業と同じような言葉かけとくださいカードを提示していくことで、正しい要求の方法を思い出して、やりとりできるようになってほしいと考え、くださいカードを取り入れた。		
今までの評価	前時の評価と反省	「あんぱんまん」を「あばまん」「あんぱんぱん」など読んでしまう。友達の名前や自分の姓をはっきりと発音することができる。	全体的にやや不明瞭さは残るが、ずいぶん大きな声で伝えることができた。聞き返されると萎縮して、声が小さくなるが、「〇〇ください」と丁寧に発語できた。	教師がくださいカードを見せると、そのカードを見ながら「〇〇ください」と言うことができ、「はい、どうぞ」と手渡されるまで待つことができた。
	日常生活や各教科等の中での評価	「トイレに行く」など、以前に比べて明瞭に発音できるようになってきたが、まだまだ不明瞭な発音が多く、相手に伝わりにくいことが多い。	教師に質問されると、声が小さくなり、口ごもってしまう。児童間のやりとりでは、大きな声を出して楽しく遊んでいることが多い。	教師に対しては、「〇〇貸して下さい」など、言うことができるが、児童間のやりとりでは、強引に奪ったり、黙って持って行ったりする。

本時の目標	<ul style="list-style-type: none"> 文字カードを見ながら、一文字ずつゆっくと発音する。 	<ul style="list-style-type: none"> 机の上に並んでいるイラストシールの中から欲しいものの名称を、聞き手に聞こえるようにはっきりと言い、そのイラストシールをもらう。 	<ul style="list-style-type: none"> 「はい、どうぞ」と、手渡されるまで待つことができる。 		
時間	活動内容（吹き出し内に支援と留意点を示す）	評価の視点			
導入 5分 展開 35分 まとめ 5分	<p>○始まりのあいさつをする。</p> <p>○本時の学習内容を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・すごろく <p>○じゃんけんですごろくの順番を決める。</p> <p>○すごろくをする。（1人ずつ順に）</p> <ol style="list-style-type: none"> ①サイコロをふる。 ②☆のマスに止まると、教師とやりとりをしてシールをもらう。 E：箱から文字カードを1枚引き、教師に伝える。そのイラストシールをもらう。 F G：欲しいイラストシールの名前を言って、教師に伝える。そのイラストシールをもらう。 ③席に戻って台紙にシールを貼る。 <p>○振り返る。</p> <p>○終わりのあいさつをする。</p>	E	F	G	
<p>・一文字ずつゆっくと発音できたか。</p> <p>E：読み間違ったり、早口で言ったりした場合は、教師が正しく発音してみせる。また文字カードを一文字ずつ押さえながら読むように促す。</p> <p>F：発語に自信をもてるように、少し不明瞭でも、イラストシールをすぐに渡す。</p> <p>G：教師がくださいカードを提示して、やりとりの仕方を手本に、Gが「○○ください」と言い、「はい、どうぞ」と言われてからイラストシールを受け取る。</p>				<ul style="list-style-type: none"> ・教師に聞こえる声の大きさと欲しいものの名称を言えたか。 ・「○○ください」と言ってから教師に手渡されるまで待つことができたか。 	
準備物	すごろく盤　さいころ　顔写真カード　シール　文字カード　箱　シール台紙　くださいカード				
	E	F	G		
本時の評価	「どらえもん」「たなかせんせい」「あんぱんまん」など、繰り返し取り組んできた単語は、明瞭に発音できた。「きゅうしょく」は発音が難しい。	「あおいくるま」「ファンタグレープ」など、比較的発音が難しい単語でも大きな声で明瞭に発音できるようになった。	くださいカードを確認しながら、「○○ください」と言うことができ、相手に「はい、どうぞ」と手渡されるまで待つことができた。		
支援の改善点	イラストカードを厚紙に貼り、箱の中から1枚だけを取り出しやすくする。また、普段の生活場面の中で発音が不明瞭によく使う単語を調べ、授業に取り入れる。	声が小さく、聞き取りづらいつきもあるが、自信を失わないようにするためにも、言い直しは1～2回までとする。また、上手に発音できたときは誉める。	くださいカードは、机の端に置き、教師とやりとりするときに見えるようにする。普段の生活場面においても教師や児童同士でやりとりする際にくださいカードを見せ、授業で学習したことを思い出せるようにする。		
授業全体の評価と反省	児童とやりとりする教師は、児童と目の高さを合わせて話をするようにする。EとFは、ずいぶん明瞭に発音できるようになってきたので、他の単語も増やしていきたい。Gは、授業の中では、教師に「○○ください」と要求し、「はい、どうぞ」と手渡されるまで待つことができるようになった。しかし、普段の生活場面においては、必ずしもできるとは言えず、特に友達に対しては、返事を待たずに持って行ってしまふなど、不適切なやりとりがみられる。適切なやりとりを思い出せるように授業でくださいカードを用いることを続けて行い、定着させたい。				

④ 授業評価まとめ（後期）

ア 協議の内容

○K J法で出た意見より

- ・ Eについて
 - ・ 箱の中から上手く文字カードを取り出せないでいた。
 - ・ イラストシールの名前を言わずにシールを取っていた。
 - ・ 要求相手に読み直しさせられるのが不自然ではないか。
- ・ Fについて
 - ・ 評価について、声の大きさか、明瞭さどちらで良いとするか。
- ・ Gについて
 - ・ くださいカードの提示の仕方をどうするか。

○授業者の反省より

- ・ Gは、くださいカードを見なくても言える。普段の生活場面で使えるように授業でも使っているが、提示の仕方を迷っている。

イ 改善点及び次の授業に向けて

○Eについて

- ・ 文字カードの裏にしっかりした素材のものを貼り、筒状の入れ物などに入れ、取りやすい教材にする。
- ・ イラストシールの前に教師が立ち、言われたシールを取って渡す。
- ・ イラストシールを渡す側の教師ではなく、児童側にいる教師が単語を正しく読めるように促す。

○Fについて

- ・ Fは少しずつ話すことに自信をもち、自分で発音を意識できつつあるので、発音が不明瞭なときは、Fに自信を失くさせない程度に（1～2回）言い直しを試みていく。

○Gについて

- ・ くださいカードを、視野に入るようイラストシール用の机の端に置き、正しく言えたときに「くださいカードと同じように上手に言えたね」と褒め、正しいモデルを印象付ける。また普段の生活の中でも、正しく言えたときはくださいカードを見せて褒め、正しいモデルの定着を図っていく。

○全体を通して

- ・ コミュニケーションの課題に迫るためには、普段の生活場面で活用できるよう指導していく必要がある。普段の生活場面と自立活動の時間における指導を分けて考えるのではなく、実際の活用場面と授業とをいかにつなげられるように活動内容を設定していくことが重要であると確認した。
- ・ 指導やカードの活用について、間違いを指摘するのではなく、正しくできたことを褒めた

り確認したりすることで、主体的によりよいコミュニケーションをとることができると考えた。

⑤ 考察

ア 普段の生活場面への般化について

授業の中では、正しく発音や要求ができてきたが、普段の生活場面においてはまだ定着できていない。自立活動という設定された場で落ち着いて活動し習得したことを、その時間だけで目標を達成したとは見なさず、普段の生活場面で活かし行えるようになることが大切であると再確認した。

般化につなげるためには、普段の生活場面の中で、児童が言いたい気持ちはあるが、うまく発音できず伝わりづらい言葉などを、その都度把握し、授業の中に取り入れていくことが必要であろうと考えた。また、授業で使用するくださいカードや児童への言葉かけを普段の生活場面でも担任以外の教師も統一して指導を行うことが大切であると共通理解することができた。

イ 児童の目標や指導内容について

授業の中での目標が達成できた児童について、次に目標や活動内容をどう設定していくかの話し合いを行った。その中で、新しい目標を設定しようとしたが、実際は、普段の生活場面では活かされていないという反省から、再度検討し直した。その結果、般化ということを考えて、教材などを工夫し取組を続けていく方向に至った。そこで、授業の中で続けてきた活動（すごろくゲーム）に捉われることなくそのときの実態や目標を考えた上で活動内容を設定すること、目標の評価の視点を具体的に決めておくこと、常に児童の実態を振り返り指導内容やグルーピングなどを再考することの大切さを確認できた。

ウ 発音・コミュニケーションの指導について

今回取り組んだ授業での指導方法については、3人の児童の実態を考えると、好きなシールがもらえるすごろくゲームを取り入れたことは、意欲的に取り組め効果的であった。ただ、発音という点においては、順番待ちの時間があり、個々の課題に迫れる時間が少なかったという意見もあった。児童の実態により、1つの方法として、個別にじっくりと取り組むような指導方法も効果的であると考えられる。

以上の三項目に関して議論を深め、児童の実態把握や指導方法などについて、共通理解を図ることができた。

(4) 小学部2ブロック

① 自立活動学習指導案（前期）

対 象		H		
児童の実態		<p>本児はほぼ独歩可能であるが、歩行の状態は不安定である。段差などにつまずき転倒することがあるため、膝サポーターと保護帽を着用している。また、足関節の筋緊張が強く、つま先立ちでの歩行になる傾向があるため、プラスチック短下肢装具を使用している。歩行の様子は、膝をあまり曲げずに突っ張って歩き、体が左右に揺れる。興奮したときには、さらに体が大きく左右に揺れるため、より不安定な歩行になる。25センチほどのいすからは一人で立ち、床からは何かにつかまって立ち上がることができる。</p> <p>視力は遠視、乱視、斜視のため眼鏡を使用しており、コントラストのはっきりした物の方が見えやすい。聴力は、ろう学校巡回相談の検査で、60～70dB程度であり、小さい音や声は聞こえにくい。補聴器は使用していない。</p> <p>はっきりとした表出言語はないが、クレーンで要求したり、名前を呼ばれると振り向いたりすることが多い。視線を合わせようとしても、視線が合いにくい。給食の場面で、おかわりが欲しいときに“ちょうだい”のジェスチャーが出るようになってきた。しかし、給食以外の場面では、ジェスチャーで要求を伝えることは少なく、諦めることが多い。友達や周りの様子に興味がありよく見ているが、一人遊びが多く、自分から積極的に人にかかわりにいくことがあまりない。</p>		
指導目標		<ul style="list-style-type: none"> ・障害物を越えることで、足を高く上げられるようになる。（身体の動き） ・ジェスチャーで欲しいものを要求することで、要求を実現してくれる人へ注意を向け、働きかける。（人間関係の形成） 		
活動（単元） 内容の設定理由		<p>歩行が不安定な理由として、足関節の筋緊張が強いため、つま先立ち歩行になり、下肢の筋力が弱いため、膝をほとんど曲げずに突っ張って歩くことが考えられる。下肢の筋力を強化し、膝を曲げる動きを出させるために、ペットボトルを越える活動を行う。また、ペットボトルを越えるときに軸足の踵ができるだけついた状態で踏み出せるように、足関節の筋緊張を緩めるストレッチ（ROM-Ex.）を設定した。最後に、本児が好きなバルーンを用意した。</p> <p>また、本児は一人遊びが多く、自分から積極的に人にかかわりにいくことがあまりない。しかし、給食のおかわりの場面で“ちょうだい”のジェスチャーを出して要求を人に伝えることができているので、他の場面でも使えるようになってほしいと考えた。今回の授業では、おもちゃを使って繰り返し“ちょうだい”のジェスチャーを出す活動を設定した。“ちょうだい”のジェスチャーを獲得し、自分の要求がかなえられるという経験を積み重ねることで、自分の要求を人に伝えられるようになってほしいと考えた。</p>		
今までの 評価	前時の評価と反省	<ul style="list-style-type: none"> ・ジェスチャーは、「ちょうだいをして」と言葉かけすると、左手を広げ、手のひらを上に向け“ちょうだい”を伝えることができた。 ・段差や階段を越える活動では、段差の前で動かず、介助しようと手を伸ばすと、しがみついてきて赤い段ボールの囲いを倒してコースから出ようとするなど、介助なしで越えることが難しかった。 		
	日常生活や各教科等の中での評価	<ul style="list-style-type: none"> ・休憩時間にも、教師が欲しい物を持っているときに“ちょうだい”と片手でジェスチャーをしてくれることが増えてきている。 ・教室から中庭に出るときは、ドアの枠を支えにして1人で外に出ることが増えた。 		
本時の目標		<ul style="list-style-type: none"> ・おもちゃが欲しいときに教師と一緒に“ちょうだい”のジェスチャーをすることができる。 ・2ℓのペットボトル（幅7cm、高さ10cm）にあたらないように、足を高く上げて越えることができる。 		
時 間	活 動 内 容	留意点及び支援の方法		評価の視点
導入 5分	① 児童いすに座って、始まりの挨拶をする。	・名前を呼び、視線を合わせる。		・教師と一緒に“ちょうだい”のジェスチャーができたか。
展開 35分	② 教師が持っているおもちゃを見る。	・手の届かない位置におもちゃを提示する。		
	③ “ちょうだい”のジェスチャーをする。	・ジェスチャーが出ないようであれば、「“ちょうだい”して。」と言葉をかけ、前から手を添えて“ちょうだい”のジェスチャーを一緒に行う。		
	④ おもちゃを受け取り、遊ぶ。	・教師が、“ちょうだい”のジェスチャーをする。		
	⑤ おもちゃを教師に渡す。			
	⑥ ②～⑤の活動を数回繰り返す。			
	⑦ おもちゃを持ってクッションチェアに座る。			

まとめ5分	<p>⑧ クッションチェアに座って、足関節の ROM-Ex.とストレッチをする。</p> <p>⑨ ペットボトル1つ分(約10cm)を3か所越える。(写真1)</p> <p>⑩ 階段を上って下りる。(写真1)</p> <p>⑪ 好きな活動(バルーン)で遊ぶ。</p> <p>⑫ 児童いすに座って、終わりの挨拶をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・リラックスした状態で取り組めるようにおもちゃを持たせて行う。 ・ペットボトルが見えやすいように、色を青と黄にする。 ・歩くところが分かるように赤い段ボールで囲う。 ・階段を上る意欲を高めるために階段を下りた先にバルーンを置く。 ・階段を上り下りが難しい場合は片手を介助する。 ・足元を意識できるように階段の色を変える。 ・骨盤を支えて座った状態で行う。 ・名前を呼び、視線を合わせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・20のペットボトルにあたらぬように、足を高く上げて越えることができたか。 ・足を高く上げて階段を上ることができたか。
準備物	児童いす、児童机、教師いす、教師机、おもちゃ×3、クッションチェア、ペットボトルの段差×3、階段セット、赤い段ボールの囲い、バルーン、セラピーマット4枚		
本時の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・片手での表現ではあるが自分から“ちょうだい”のジェスチャーを出すことができた。 ・1人でペットボトルを越えることができたが、その前で立ち止まることが多く、あまり意欲的に取り組めなかった。 ・階段を上るのは介助を必要としたが、最後の1段は自分で下りることができた。 		
授業者の反省	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の“ちょうだい”に対しておもちゃを渡せない、どうしたらよいか。 ・活動に対して児童の意欲が持続せず、繰り返して行うことが難しかった。 		

② 授業評価まとめ(前期)

ア 協議の内容

○授業者の反省より(KJ法の意見を含む)

「教師の“ちょうだい”に対しておもちゃを渡せなかった。」

→・教師と児童間でやりとりできるおもちゃにする。

- ・『自分が“ちょうだい”のジェスチャーをしておもちゃを受け取ること』と『相手の“ちょうだい”に対しておもちゃを渡すこと』は同じではない。

- ・教師におもちゃを渡すことを目標にしていない。

- ・おもちゃを返してもらうのではなく、次のおもちゃが欲しくなるように、教師が前で遊んで見せ、“ちょうだい”のジェスチャーが出るまで待つ。

「児童の意欲が持続せず、繰り返して行うことが難しかった。」

→・見通しの支援が少ないので、視覚支援で活動内容が分かるようにする。

- ・モチベーションを高めるため、楽しい雰囲気を作り、しっかり褒める。
- ・ペットボトルの段差を低くし、介助なしに越えられるようにする(自信をつける)。
- ・ペットボトルと床の色のコントラストをよりはっきりさせる。
- ・ペットボトルの活動がどうしても嫌なときは、別の活動を用意する。
- ・設定した活動だけでなく、日常生活に活かせるよう、階段などを活用する。

写真1: ペットボトルと階段のコース



○K J 法及び他学部の意見より

「指吸いがあるため、“ちょうだい”のジェスチャーが曖昧になる。」「児童の“ちょうだい”に対する評価が分かりにくい。」

→・両手でジェスチャーを出せるように、後方から身体的な介助をする。

- ・上手に“ちょうだい”のジェスチャーが出せたときに、褒める。

「授業者の“ちょうだい”の言葉で、次の活動に移っている。」

→・活動の終わりを伝えてから、次の活動に移る。

- ・おもちゃを籠と一緒に片付けて、活動を終わる。

イ 改善点及び次の授業に向けて

- ・両手で“ちょうだい”のジェスチャーを出せるように、後方から身体的な介助をする。

- ・次の活動に移るとき、活動の終わりを伝えてから、おもちゃなどを籠に片付ける。

- ・写真カードなどの視覚支援を用いて活動内容を伝える。

- ・課題への意欲を高めるために、次の5点を確認した。できたときにしっかりと褒める。歌やカウントなどを用いて、楽しい雰囲気作りをする。ペットボトルの段差を低くし、自分の力で越えられる高さにし、自信をつける。ペットボトルと床の色のコントラストをよりはっきりさせる。ペットボトルの活動は一つの目安にし、筋力アップを図る活動内容を設定する。

③ 自立活動学習指導案（後期）

対 象		H
児童の実態		【指導案（前期）より実態把握が深まった点のみ記載】 学校生活の中では障害物や段差をよく見て慎重に越えることができている。指吸いをしていないときは両手で“ちょうだい”のジェスチャーをすることができるが、指吸いをしているときは指を外すことが少なく片手で“ちょうだい”のジェスチャーをすることが多い。がんばったことを褒めてほしいときなどは教師の手を自分の頭に持っていき、撫でるように（褒めるように）要求する。写真カードには興味があり、よく触って見ている。
指導目標		前期と同じ
活動（単元） 内容の設定理由		本児の歩行姿勢は、上体が前傾し、膝をほとんど曲げずに歩き、踵をつけることも難しい。その理由として、全身の筋トーン（筋肉の緊張度）が低く、下肢に関しては、膝を屈伸させる筋力が弱く足関節の筋緊張が強いためであると考えた。そこで、上体の筋力をアップさせるためにバルーンを使った体操、下肢の筋力をアップさせるためにトランポリンに乗りながら輪投げと歩行練習を行う。さらに歩行時に足を高く上げられるようにペットボトルを越える活動を設定した。ペットボトル越えは本児が介助（助け）を必要としないで越えられるように高さ7cm、幅7cmの物を用意する。 “ちょうだい”のジェスチャーについては、指導案（前期）と同じ。
今までの 評価	前時の評価と反省	<ul style="list-style-type: none"> ・“ちょうだい”のジェスチャーでは、指吸いを外して両手でおもちゃのコインを取ろうとすることはあったが、自分で“ちょうだい”のジェスチャーをすることは難しかった。 ・足関節のROM-Ex.と下肢のストレッチは左下肢の抵抗が強かったが、言葉かけをしながら本児の動きに合わせて行うことで今回は最後まで取り組むことができた。 ・バルーンを使用したパラシュート反応の練習は、座位での揺れ遊びを取り入れたので、意欲的に行うことができた。 ・トランポリンでの輪投げは、後半に膝を曲げる途中に座り込もうとすることがあった。 ・ペットボトルを越える活動は、足下をよく見て一人で越えることができた。
	日常生活や各教科等の中での評価	<ul style="list-style-type: none"> ・授業中に本児の好きな教材を近くで提示すると自分から両手で“ちょうだい”のジェスチャーを出すようになってきている。 ・着替えや排泄後に、膝を曲げて足首の所まで下ろしたズボンを自分で膝上まで上げることができる。

本時の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・おもちゃが欲しいときに、教師と一緒に、両手で“ちょうだい”のジェスチャーをすることができる。 ・介助を必要とせず、900mlのペットボトル（幅約7cm・高さ約7cm）にあたらないように足を高く上げて越えることができる。 		
時間	活動内容	留意点及び支援の方法	評価の視点
導入 5分	① 児童いすに座って、始まりの挨拶をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・名前を呼び、視線を合わせる。 ・集中できるように区切られた空間で行う。 	
展開 35分	② 予定表を見て本時の活動を知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・写真カード付きの予定表を提示する。 	
	③ 教師が持っているおもちゃを見る。	<ul style="list-style-type: none"> ・手の届かない位置におもちゃを提示する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・両手で“ちょうだい”のジェスチャーができたか。
	④ “ちょうだい”のジェスチャーをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・“ちょうだい”のジェスチャーが出そうなときに教師が後方から介助し、両手で行うようにする。 	
	⑤ おもちゃのコインを受け取り遊ぶ。(写真2)		
	⑥ ③～⑤の活動を繰り返し行う。		
	⑦ おもちゃをかごに片付ける。	<ul style="list-style-type: none"> ・マカトンサインで終わりを伝え、おもちゃを片付けるように言葉かけをする。 	
	⑧ 予定表から終わったカードを取り、箱に入れ、次の活動を知る。		
	⑨ マットに仰臥位になり足関節のROM-Ex.と下肢のストレッチをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・数を数えるなど、終わりの見通しがもてるようにする。 	
	⑩ 予定表から終わったカードを取り、箱に入れ、次の活動を知る。		
	⑪ バルーンを使用した体操をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・数を数えるなど、終わりの見通しがもてるようにする。 	
	・パラシュート反応の練習	<ul style="list-style-type: none"> ・腹筋を意識できるように言葉かけをしながら腹部を刺激する。 	
	⑫ 予定表から終わったカードを取り、箱に入れ、次の活動を知る。		
	⑬ トランポリンに立位で乗り、教師と一緒に輪投げをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・座り込もうとしたときは、あまり膝を曲げずに取り組める課題から行い、少しずつ課題のレベルを上げていく。 	
	⑭ 予定表から終わったカードを取り、箱に入れ、次の活動を知る。		
⑮ ペットボトルを3つ越えて散歩に行く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ペットボトルが見えやすいように、色を白とピンクにする。 ・歩くところが分かりやすいように赤い段ボールで囲う。 ・本児の行きたい所を自由に歩く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・バランスを保って立っていることができたか。 ・膝を曲げることができたか。 	
まとめ 5分	⑯ 教室に戻り、予定表から終わったカードを取り、箱に片付け、終わりの挨拶をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・全部活動が終わったことを確認する。 ・名前を呼び、視線を合わせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・900mlのペットボトルにあたらないように足を高く上げて越えることができたか。
準備物	児童いす、児童机、教師いす、おもちゃ、ペットボトル3個、赤い段ボールの囲い、バルーン(赤)、セラピーマット、バスタオル、トランポリン、予定表、箱、輪投げセット		
本時の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・“ちょうだい”のジェスチャーでは、おもちゃのコインを取ろうとして指吸いを外すことはあったが、教師の後方介助なしに両手でジェスチャーをすることは難しかった。 ・予定表は見ていたが、5番目の中庭の写真を取ろうとすることが多かった。 ・トランポリンでの輪投げは、後半になると膝を深く曲げられるようになってきた。 ・ペットボトルを越える活動は、障害物をよく見て自分からすすんで越えることができた。 ・歩行時に本児が給食室の方に行こうとしたのを制止し、教室へ戻るように言葉をかけて誘導したため興奮して不安定な歩行になった。 		

<p>授業者の反省 及び 支援の改善点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・“ちょうだい”のジェスチャーのときにおもちゃのコインに直接手が伸びることがあった。もう少し離れた距離に提示した方がよかった。 ・900mlのペットボトルを越えることがスムーズになってきているので、ペットボトルを2ℓに変え、課題のレベルを上げていく。 ・後方介助を減らす見極めはどうするべきか。 ・予定表の5番目の中庭の写真を触りたがった。写真をイラストに変えてもよいか。 ・歩行練習は児童の行きたいところを歩くようにしているが、目標を定める方がよいか。 ・長期目標として「人間関係の形成」を目標にしていたが、コミュニケーション手段の“ちょうだい”のジェスチャーに対する指導が中心となった。ジェスチャーを獲得することで、要求を実現してくれる人へ注意を向け、働きかけることができるようになると思うので、今後もコミュニケーション手段の指導を行いながら、「人間関係の形成」へとつなげていきたい。
---------------------------------	---

④ 授業評価まとめ（後期）

ア 協議の内容

○授業者の反省より（KJ法の意見を含む）

「後方介助を減らす見極めはどうするべきか。」

- 現状では、回数を増やして後方介助を続ける方がよい。
 - ・児童の様子を見ながら、活動の後半で後方介助を減らす。
 - ・後方介助が少し早いので、おもちゃを取ろうとする手か、“ちょうだい”の手かを見極めてから支援する。
 - ・授業者は“ちょうだい”など誘発させる言葉は言わずに、後方介助者が言う。
 - ・ジェスチャーをするまで待つ。

「予定表の中庭の写真を歩行の絵か写真に変えてみた方がよいか。」

- 絵、写真など試行錯誤しながら、児童の理解できるものを活用する。
 - ・色鮮やかな写真に目を向けている可能性がある。
 - ・取り組む活動の写真を枠で囲み、見通しをもちやすくする。
 - ・活動カードを順に取り、最終的にボード上に何も無い状態になることで活動の終わりを分かりやすくする。
 - ・ホワイトボードを使用する。

「今までは行き先を決めずに歩行していたが、目標を立てて歩行する方がよいか。」

- 行き先を決めて写真カードで目的の場所を示して歩く。
 - ・行き先を決めずに歩くときはタイマーを使用する。
 - ・カードの理解を促すために、日常生活の中でも場所カードを示して歩く。

イ 改善点及び次の授業に向けて

- ・現状では後方介助を続け、様子を見ながら支援を減らしていく。“ちょうだい”の言葉は後方介助者のみが言う。
- ・予定表は、ホワイトボードに変え、写真カードを使用する。取り組む活動の写真を枠で囲み、見通しをもちやすくする。活動が終わったらカードを順に外し、活動がすべて終わったときは、予定表には何も無い状態にする。

写真2：コインで遊ぶおもちゃ



- ・歩行時の目標は、行き先を決めて写真カードで示す。中庭など自由に歩くときはタイマーで終わりが分かるようにする。

⑤ 考察

今回の授業実践を通して、P（計画）→D（実行）→C（評価）→A（改善）サイクルを授業実践に活用する有用性と実態把握に立ち返る重要性を再確認した。

なぜ、実態把握に立ち返る必要があるのか。その理由として、2ブロック（肢体不自由学級）に在籍する児童の多くは表出や表現の方法が少ないことが挙げられる。つまり、教師が児童の表情や動きから気持ちを読み取り、意味づけるところから実態把握が始まるという経緯がある。そのため、教師との関係性が大きく影響し、かかわる教師によって意味づけが変わる場合もある。また、学年が変わるときには引き継ぎも行っているが、児童を取り巻く環境や教師が変わることで児童の内面的な部分の影響もあり、できていたことが一時的にできなくなることもある。さらに、教師との関係が深まったことから児童の実態把握が進んだり、実践を繰り返す中で児童が成長し、実態が変わったりすることもある。これらの点からも実態把握は難しく、複数の視点で児童の実態を捉えていくことが大切であり、実態把握に立ち返ることは、実践を行っていく上で欠かせないものであると共通理解した。

今回の実践においても、授業者以外の視点を交え授業後の評価を行い、改善点について協議することで、児童の実態をより深めることができ、次の授業に生かすことができた。その結果、児童の意欲を引き出すことができ、苦手な仰臥位での体操やペットボトルを越える活動にも取り組めるようにもなった。このように実践を繰り返し、評価、改善しながら新たな実践へと展開している。

一方、課題として次の点が挙げられた。「人間関係の形成」の指導に関しては、「コミュニケーション」の項目と相互に関連する場合が多くある。今回、目標として「身体の動き」「人間関係の形成」に取り組んだが、「人間関係の形成」についてはコミュニケーション手段の獲得の部分が中心となった。今後、「コミュニケーション」の部分も含めながら「人間関係の形成」へとつなげていきたい。

最後に、目標を達成するためには、個々の課題に継続して取り組むことが大切であり、日常生活への般化に向けて、自立活動（時間における指導）の場面に限らず、児童とかかわるすべての教師があらゆる場面で意図的にかかわっていかなければならない。その際、個々の児童に合った支援方法を共通理解することが必要であり、今後の課題の一つにも挙げられた。また、より実態把握を的確に行い、より個々のニーズに合った支援方法を選定できるように、研修や実践を通して、専門性を向上させていく必要があると考える。

《参考文献》

中尾繁樹 『みんなの「自立活動」特別支援学校編』 明治図書 2009

3. まとめ

自立活動（時間における指導）の「評価を実践に活かす」ことを目指して、2年間の研究を終えた。授業評価にKJ法を取り入れ、授業改善を行ってきた。実践を繰り返す中で、児童の実態を見つめ直し、どのような目標、どのような活動内容・支援方法が適切なのかを考え、研修グループで共通理解しながら、児童の指導に当たることができた。

今回の授業改善を振り返り、学部内で報告し合う中で、評価を実践に活かし目標を達成するために大切である点について、以下にまとめた。

（1）実態把握に立ち返ること

私たちは、授業を組み立てていくとき、まず児童の実態を把握し、目標を立て、活動内容や支援方法などを考えていく。実態把握では、「できる」「できない」の表面上の事実から「なぜ」「どうして」という原因を探っていかなければならない。原因は確実に突き止めることが難しく、そういう意味では、実態把握も仮説と言える。そのため、授業を改善しようとしたときに、授業で課題が「できた」「できない」だけでなく、児童の実態を含めた仮説に立ち返り、「指導内容・支援方法は適切だったか」「目標は合っていたか」「把握した実態は的確だったか」と評価していく作業が大切である。つまり、児童の実態把握に立ち返ることは、仮説を検証しながら実践を行っていく上で欠かせないものであると考える。

（2）個々に合った環境を設定すること

「授業の環境を整える」という言葉には、教室内の環境、物の配置等の意味のほかに、「学習形態」も含まれる。自立活動は個別の指導計画から始まり、個の目標を達成するために活動内容を設定していく。そのためには、個々に応じた「効果的な場」を設ける必要がある。「個別指導」にするか、「集団指導」にするか、その選択を間違えることなく、環境を整えることも私たち教師の役目であり、大切な支援の一つである。また、集団で指導を始めていたとしても、授業を進める中で、個別指導が必要になったときなどはグルーピングも柔軟に考えていくようにすることが、より目標達成に近づいていくことになると思う。

（3）般化を視野に入れておくこと

自立活動（時間における指導）という設定された場だけでは目標を達成したとは言えず、日常生活の場面で活かせるようになることが大切である。般化につなげるために、自立活動の時間で終わりにするのではなく、日常生活の中でも課題に継続して取り組むとともに、児童とかかわるすべての教師が意図的にかかわっていかなければならない。その際、個々の児童に合った支援方法を教師間で共通理解し、適切に取り組んでいくことが大切であると思う。

今後も、実態把握をよりの確に行い、個々のニーズに合った支援方法を幅広く選択できるよう研修を積むとともに、より効果的な授業が行えるようさらに授業改善を重ねながら実践を深めていきたい。

中学部

1. はじめに

本校中学部では、知的障害学級(以下1ブロック)と肢体不自由学級(以下2ブロック)があり、自立活動に関しては、それぞれ教育課程上に「時間における指導」の時間を設けている。平成22年度に和歌山県の特別支援教育専門性向上事業「特別支援学校研究指定」を受け、2年間の研究の取組を終えた後も、自立活動については日々、様々な議論を重ねてきた。本校の学校教育方針「障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服し、社会の一員としての自立をめざす」にあるように、自立活動が本校の教育においていかに大切な領域であるかは、教員が共通意識をもつところである。中学部においても常に授業改善を図りながら、様々な課題に対する検討を行ってきた。

平成24年度の実践から見えてきた大きな課題は、「1ブロックにおける指導形態の工夫」であり、より個々の教育的ニーズに応じた自立活動を行うためには、どのように指導体制を整えればよいのかについて、時間をかけて議論を行ってきた。本来、自立活動は、個別に指導計画を作成することが基本であるため、個別に指導されることが多い領域である。しかし、1ブロックは、教師の指導体制の課題のために、指導目標が近い生徒の集団を編成し、指導する場面が多く見られた。そのため、6区分の中で、特に「心理的な安定」、「人間関係の形成」、「環境の把握」、「コミュニケーション」の4区分の内容を扱うことが多かった。

そこで、平成25年度をスタートさせるにあたって、2ブロックの取組の良い点を知的障害学級に活かすことを考えた。2ブロックの「自立活動の時間における指導」は、学級担任を基本に生徒に応じて時間帯を変える等の調整を行い、マンツーマンの体制をつくって取り組んでいる。そのため、個々の教育的ニーズに応じた取組が実施できる環境がある。その点を踏まえて、主に学年の教師が学年の生徒を指導する1ブロックの「時間における指導」を見直し、個々の実態・課題を一番に把握している学級担任による指導を基本とし、学級単位で「時間における指導」を行うことにした。また、それを実施するために、教育課程の弾力的な運用を行い、どの生徒も同じ時間帯で自立活動を行うのではなく、個別に時間を設定することを可能にした。具体的には、○曜日の○時限目に学級の中の1人の生徒が自立活動を行い、他の生徒は異なる教科に取り組むなど、学級の中で曜日や時間帯を個々に設定しながら、生徒個々に必要な時間数を確保できるようにした。

上記のように、個々の教育的ニーズに応じた指導を目指して変更を行なった上で、自立活動の「時間における指導」について4つの事例(1ブロック学年別3事例、2ブロック1事例)を中心に研究をすすめてきた。それぞれに生徒の実態は異なり、指導目標や指導内容等も大きく異なるが、「授業づくり」「授業改善」等のポイントを明確に意識しながら、教員間で共通理解をもって検討を深めることができた。授業研修や授業評価等を通して行った授業改善が、生徒それぞれの生活上または学習上の困難さの改善にどのようにつながってきているのか、事例を通して報告する。

(1) 1ブロック1年生

① 自立活動学習指導案 (前期)

対 象		I		
生徒の実態		<p>予定を視覚的に示すと、見通しを持って課題に取り組むことができる。活動の取りかかりが早い、課題を早く終えて自分の好きなことをしたい気持ちが強いため、活動が丁寧でないことがある。自分の好きなことを止められるなど自分の思いが通らないときはパニックを起こすことがある。何も言わずに教室を出てしまうことで失敗したくない気持ちや活動への不安感を表現することがある。教師や友達とコミュニケーションを取らずに自分のやり方で活動を進めてしまうため、失敗することがある。初めてのことは不安感から避ける傾向にある。日によって、覚醒状態や体調などから課題に向かいにくいときがある。</p>		
指導目標		<p>・落ち着いて課題に取り組むことができる。(心理的な安定)</p>		
活動(単元)内容の設定理由		<p>生徒Iは不安感や失敗したくない思いから教室を出たり、自分の思いが通らないとパニックを起こしたりすることがある。このことから自立活動の26区分の中から心理的な安定の(1)情緒の安定に関することをねらいとして活動を設定した。生徒Iは活動に見通しが持てると落ち着いて取り組むことができることから、プリント課題と机上での作業学習という活動を毎時間繰り返し行うことで活動への不安感をなくし、落ち着いて活動に取り組むことができると考えた。また、自立活動の時間における指導の中では個別の課題形態で取り組むが、活動が終わっても周りの生徒の状況を見て教室内で待つという学習のルールを身につけ、自分の思いが通らなくてもパニックになることをなくしていくために教室内は6名の取り組み形態で行っている。</p>		
今までの評価	前時の評価と反省	<p>覚醒状態がよい状態ではなく、活動に前向きに取り組めなかった。時間をおくと気持ちを切り替えて、課題に取り組めたが、早く終えようとして作業が丁寧さに欠けるところがあり、イライラしている様子が見えた。</p>		
	日常生活や各教科等での評価	<p>教師からの言葉がけや一緒に行動しないと自分のルールで行動し、失敗することがある。初めてのことや見通しの持てない事は不安感から避ける傾向にある。自分の活動が終わると好きなことをしたい気持ちが強く、授業中にも自分の好きなことをしようとするところがある。周りを見て、みんなを待つという学習のルールを指導中である。</p>		
本時の目標		<p>・落ち着いて活動に取り組む。</p>		
時 間	活 動 内 容	留意点及び支援の方法		評価の視点
5分	<p>あいさつ 本時の説明 ・課題の説明を聞く。 ① プリント課題 ② ひも通し・袋入れ(選択) ③ ナットとめ・クリップとめ(選択) *作業を選択して、することを工程表に○印をつける。</p>	<p>・プリントの記入方法を説明する。 ・名前を書くように促す。 ・集中して取り組めるように比較的内容の簡単なプリントを用意する。 ・②③はどちらかを選ばせる。 ・選んだ活動を自分から伝えることができるようにする。</p>		<p>・しっかりと説明を聞くことができたか。</p>
10分	<p>・作業を開始する。 *できたら教師に伝え、ワークシートにチェックしてもらおう。 ・感想をワークシートに記入する。 ・感想を発表する。</p>	<p>・分からないことや、できたことを自分から伝えるように促す。 ・感想は一つ一つの活動を考えさせ、記入するように促す。</p>		<p>・落ち着いて活動できたか。</p>
20分	<p>終わりのあいさつ</p>	<p>・早く課題が終わった場合には、教室内で好きな活動を選び、終わりまで待つように促す。</p>		<p>・活動の振り返りができたか。</p>

準備物	工程表 (プリント)、学習プリント、ひも、紙皿 (穴をあけたもの)、ねじとめ板、ナット、クリップ、クリップ用厚紙、おはじき、チャック付き小袋、
本時の評価	①プリント課題→②机上の作業学習 (選択) →③机上の作業学習 (選択) という授業の流れが定着しつつあり、見通しを持って課題に取り組んでいる。課題の選択では新しい課題 (おはじきの袋入れ) を選択し、どうすれば効率よくできるかを考えながら集中して課題に取り組んでいた。その後クリップ止めの課題を選択したのは、活動を早く終わらせて好きな活動をしたい気持ちの表れだったように思われる。活動を早く終わっても教室を出ずに教室内で好きな活動をしながらみんなを待つという学習のルールは身につけてきている。課題の評価やワークシートのチェックのときに他の生徒を待つ場面が多く、イライラしている様子がうかがえた。
支援の改善点	・好きなことを早くしたい気持ちの表れで簡単な課題を選択してしまいがちなので、課題の量や難易度を調整する。 ・授業の環境設定として現在は6名体制で行っている、学習のルールは身につくつつあるが、教師とのコミュニケーションが少なくなったり、イライラしている様子も見られるため、授業の環境設定をより生徒 I に適切な形にする



おはじき入れの課題



クリップ止めの課題



ナット止めの課題



ひもとおしの課題

② 授業評価まとめ (前期)

協議の内容	<p>ア、より丁寧な実態把握をすることが大切ではないか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なぜ落ち着くことができないのかを、実態から捉え直す必要があるのではないか。 ・指導目標である「落ち着いて」とは具体的にどのようなことを指すのか。 ・学校生活の中で、落ち着いた行動が取れない原因のひとつに、失敗に対する不安があるのではないか。 ・一連の流れを、順序良く行うこと、始まりの時間から終了の時間までを意識して取り組めること、手指の巧緻性を高めること等を確認する。
-------	--

	<p>イ、見通しを持つための環境整理も含めて、授業の構造化をはかっているかどうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動の区切り等を明確にするため、教室内の動線の工夫する必要があるのではないか。 ・聴覚過敏などところがあり、6名という体制では少し不安定な様子が見られる。 ・これまでは個別の指導形態が多く、周りを見て学習する経験が乏しかった。小集団ですることが、見通しを高めることにつながるのではないか。 ・授業の流れは定着しつつあり、見通しを持って課題に取り組んでいるのではないか。 ・活動の切り替えに「できました」、「次の課題をください」などの言葉でのコミュニケーションをとっているかどうか。 <p>ウ、生活のリズムに関する取り組みを始めた部分に入れたらどうか。 (生活を改善していくために、寝る時間や起きる時間など生活を意識できるようなプリントなど)</p>
改善点及び次の授業に向けて	<p>ア、より丁寧な実態把握を行い、今の実態に合わせた授業内容を精選する。</p> <p>イ、より見通しのもてる構造化された授業づくりを行い、学習の姿勢を高める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・動線を明確にし、次の課題への切り替えを分かりやすくする。 (活動の区切りとして、取組の済んだ課題を自ら提出する場を設ける) ・聴覚過敏等を考慮して、静かに取り組める環境と、周りの生徒がモデリングとなるような学習環境を整える。(少人数化を図る) ・繰り返しのある課題を継続して行う。 ・学習課題に対する不安が感じられるときにどうすればよいのかを、教師がモデルとなって支援し、生徒が「難しい」、「分かりません」、「手伝ってください」等の言葉を伝えることで、課題が解決できることを理解させるようにする。 <p>ウ、自立活動の時間における指導や日常生活の中で、生活のリズムに関する取り組みをする。</p>

③ 自立活動学習指導案（後期）

対 象	I
生徒の実態	<p>周りを見て、みんなの行動に合わせてようとする場面が見られるようになった。行きたい場所やしたい活動を言葉で教師に伝えるようになった。教室を出してしまっても、理由を聞くと「難しかったから」「わからなかったから」と自分の困った気持ちを端的に伝えるようになった。苦手なことや初めてのことは自分から進んではしないが、促されると取り組もうとしている。</p>
指導目標	<ul style="list-style-type: none"> ・落ち着いて丁寧に活動や作業が行える。(心理的な安定) ・困ったときに助けを求められることができる。(心理的な安定)
活動(単元)内容の設定理由	<p>プリント課題をして2種類の机上の作業課題をするという授業の流れは大きく変えずに、課題の選択ではなく課題バッグに入った課題を全て終わればよいという形にした。課題バッグの中には苦手な課題もあり、生徒Iが困る場面も想定している。困ったときにパニックになるのではなく、「手伝ってください」と教師に伝えることができるように本授業を設定した。授業体制は生徒Iが周りを意識しながらも、じっくりと課題に向き合えて教師ともコミュニケーションを取りやすいように3名の少人数集団にした。</p>
今までの評価	<p>前時の評価と反省</p> <p>苦手な課題(ナット止め)も集中して取り組んでいた。課題の量がやや少なかったため早く終わることができた。課題に取り組む中で手助けの必要な場面を作り、「手伝って」という言葉を引き出せるようにしたい。</p>
	<p>日常生活や各教科等の中での評価</p> <p>給食の配膳などクラスの中の自分の役割を意識して取り組むようになった。十分に早く活動を終わったときでも周りを見るように教師が言葉がけをすると待つことができるようになってきている。課題が難しい時に「わからない」と伝えるようになってきている。</p>

本時の目標	・課題の中で手助けが必要な場面で「手伝って」と言う。		
時間	活動内容	留意点及び支援の方法	評価の視点
5分	あいさつ 本時の説明 ・課題の説明を聞く。 *作業を開始する。 ・できたら教師に伝える。	・プリントの記入方法・作業の方法を説明する。 ・分からないことや、できたことを自分から伝えるように促す。	・しっかりと説明を聞くことができたか。
10分	① プリント (かけ算、書写) ② ひも通し ③ ナットとめ	・集中して取り組めるように比較的内容の簡単なプリントを用意する。 ・ひも通しは、波縫いになるようにして取り組むように促す。 ・ナット止めは、ナットをしっかりとしめてつけるように促す。 ・全部組み立て終わった後、チェックをしてもらって、分解、かたづけるように促す。 ・感想は一つ一つの活動を考えさせ、記入するように促す。 1、名前を書くように促す 2、活動を自分で振り返り記入するように促す。	・落ち着いて活動できたか ・丁寧に作業に取り組むことができたか。 ・手助けが必要な場面で教師に「手伝って」ということができたか。
20分	*選択した作業を記入して、感想を書く。(ワークシートに記入) 感想記入後、自立活動のファイルにワークシートを閉じる。 感想を発表する。 終わりのあいさつ	・感想を言葉で伝えるように促す。	・活動の振り返りができたか。 ・言葉で伝えるができたか。
準備物	工程表(プリント)、プリント課題、ひも通しのひも、さら、ナット、ナット止めの木板、ワークシート用ファイル		
本時の評価	授業の見通しを持ち、自分で課題の順番を選択することで落ち着いて課題に取り組むことができてきた。体調は良くなかったが、授業が始まるとプリント課題に集中して取り組んでいた。自分で得意な課題(ひも通し)と苦手な課題(ナット止め)の取り組む順番を考えて取り組んでいた。ナット止めの課題での手助けが必要な場面ではパニックになることなく「手伝って」と教師に言葉で伝えることができていた。周りの生徒の様子を見られるようになり、他の生徒が課題を終えるまで教室内でラジオを聞いて待つことができていた。		
支援の改善点	苦手な課題の手助けが必要な場面では言葉で教師に伝えることができるようになってきたため、手助けが必要な場面を他にも想定し、パニックにならずに言葉で伝えて、手助けを求められる場面を増やしていく。		

④ 授業評価まとめ(後期)

協議の内容	<p>ア、周りの生徒への意識が見られるが、生徒と一緒に同じ学習内容を行うことで、情緒の安定が高められているのかどうか。(学習形態について)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・周りを意識しながらできるようになってきているのではないか。 ・学習意欲を高めるといふ、よい影響を与えているのではないか。 ・場面によっては、友だちが気になり、集中しにくい部分もあった。活動によってはパーテーションなどで区切ってもよいのではないか。 <p>イ、学習環境を整え、同じ課題を繰り返し取り組むことで、学習への姿勢が高められているのではないか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時間的に、長い時間を集中できるようになってきた。 ・自ら主体的に動くための構造化を、さらに取り入れてはどうか。 ・生徒が困り感を感じたときに、教師に対して「手伝ってください」と丁寧に伝えること
-------	--

	<p>ができていた。活動への安心につながっているのではないか。</p> <p>ウ、課題への教師の評価が簡潔すぎないか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・がんばっていることの評価をしっかりとすることで、達成感が味わえて、難しい課題への意欲になるのではないか。 ・ワークシートの活用の検討。
改善点及び次の授業に向けて	<p>ア、生徒の変化に合わせて、具体的な指導目標を設定し、最も適した指導形態を工夫する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長い時間、課題へ集中することができるようになってきた。「落ち着いて取り組む」という指導目標を、生徒の実態からより具体的に設定する。その上で、最も適した指導形態を模索する（個別指導や小集団指導など）。 <p>イ、課題の量や内容の難易度に変化を持たせ、手助けが必要な場面を設定する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常生活場面への般化できるように、不安を解決する手段を身につけるために、授業の中で「手伝ってください」と伝える機会を増やし、定着を図る。 <p>ウ、丁寧な評価で、課題の達成感を持てるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・次の課題への意欲になるように視覚的な評価や言葉がけをする。

⑤考察

生徒 I は、中学部入学当初は、集団でのルールが守れず、無言で教室を出て行ったり、注意されると情緒が不安定になったりする場面が多くみられた。また、視覚や聴覚が敏感で、周りの状況により課題に集中しにくい面がみられた。そのため自立活動では、落ち着いて課題に取り組むこと（心理的な安定）を目指して授業を行ってきた。

自立活動の時間における指導では、できるだけ理解しやすい授業展開を心掛けたが、最初は、課題に対する見通しが持てず不安定になることが多かった。しかし授業改善を行いながら、見通しが持てる授業づくりのための構造化を図ったり、情緒不安定にならないための人とのコミュニケーション方法の獲得を支援したりするなかで、落ち着いて課題に向かうことができるようになってきた。また、自分で課題を選択・決定することで、課題ができたことに対する達成感も感じられるようになってきた。また、周りの様子を見て行動する場面も多くなってきた。

日常生活の場面では、行事やクラスでの取り組み等、多様な集団で一緒に活動する場面を設定した。初めての活動や戸惑う様子の時は、活動を視覚的に提示する（文字や絵で黒板に書く）や端的な言葉で説明を行うなどの工夫を行った。友達の活動に合わせて活動する場面が増えてきたり、周りの様子を見て分からない事を聞く場面も見られたりするようになってきた。授業中でも休憩したい時に「～～行ってきます」など言葉で伝えられるようになってきた。前期の始めは、何も言わずに自分の好きな行動をして注意されることも多かったが、授業等の取組をすすめるなかで「～がわからないから教えて」「手伝ってください」「〇〇したい」等の言葉で教師に意思を伝えることが増えてきた。必要に応じた教師の支援を受けることで課題等を解決でき、心理的に安定した中で活動を進められることも増えてきている。

授業研究を通して、生徒の心理的な安定をはかるために、2つの大切なことを確認することができた。1つ目は、授業の構造化を図り、より見通しをもって自ら取り組む場を設定するこ

とである。教材を個別の棚へ整理して置くことや、パーテーションで区切る工夫等、今後も具体的にさらなる改善を図っていききたい。2つ目は、生徒が不安と感ずることを取り除くために、信頼できる教師に対して、具体的に助けをもとめる方法を身につけることである。このことで、課題を解決することができ、不安を減らすことができた。今後も生徒の実態の変化に合わせて、指導目標や指導内容の設定を行い、教材の提示方法や言葉がけ等の支援の工夫や、具体的に丁寧な評価の言葉がけを行っていききたいと考える。

中学部段階では、主体的に取り組むことや仲間と協力する力を育てることも重要な目標である。話し合い活動や、自ら企画・運営するなどの取組内容もあり、今後も様々な学習集団の中で、主体的な取組を増やしていききたいと考える。生徒Iは、自立活動の時間における指導や教育活動全体を通じた教育活動の取組を通して、学習の構えを段々と高めていくことができている。この力を高めながら、様々な学習集団で力を発揮できるように、今後も自立活動の時間における指導を日々の生活に般化させながら、取組をすすめていききたいと考える。

(2) 1ブロック 2年生

① 自立活動学習指導案（前期）

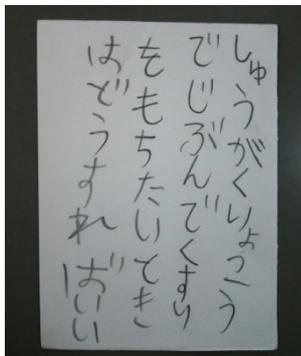
対 象	J
生徒の実態	<p>本生徒は広汎性発達障害のある中学部の生徒である。日常生活場面においてこだわりが強く、自分の思いや行動を状況に合わせ、修正することが難しい。また、場の雰囲気を理解することが難しく、授業中、正答であるものの不適切な場面で発言したり、親しみを込めて友だちにかかわろうとするが、そのかかわり方が相手に不快感を与えたりすることがある。WISC-IVの結果より、聴覚刺激の複雑な処理は難しいが、そこに視覚的な支援が加わると理解につながるということが示唆された。また、言語表出については、その場に応じた適切な表現に難しい面が窺えた。処理速度については、時間がかかるものの正確に課題に取り組むことができていた。検査場面でのような一対一の場面では自分の思いを語るができ、課題解決方法を考えることができた。</p>
指導目標	<p>困った時の対処方法を考える。(人間関係の形成)</p>
活動(単元)内容の設定理由	<p>本生徒のこだわり行動が少人数の集団の中にあってもトラブルを生み出す面があるため、まず、担任教師との信頼関係を構築しつつ、日常生活でトラブルを起こしやすい場面での対処の仕方一つずつ一緒に考えまとめる。そしてそれを日常生活で般化していくことによって他者とのコミュニケーションを円滑なものにすべく本単元を設定した。指導にあたっては、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. トラブルを起こしやすい状況を上の句にし、その対処方法として下の句を考えるという「ニコニコカルタ」作りをする。 2. 教師が上の句を読み、次に本生徒が対処方法として下の句を探すというカルタ取りをする(「ニコニコカルタ」を通して対処方法の定着を図る)。 3. 日常生活において、カルタに書かれたようなトラブルを起こしやすい場面に遭遇した時、「ニコニコカルタ」を思い出させ、対処方法を思い出させることによって、自己コントロールを図る。＝般化 <p>教師との一対一場面での、本生徒の言語理解能力には優れたものがあり、トラブルを起こしやすい状況と対処方法を一対一で理解を促し、それを積み重ねることによって、類似した場面で対処方法を般化させることができると考える。また、本人の思い</p>

	<p>や考えがあつての行動があり、それらを配慮した指導も必要である。さらに、障害の特性上、コミュニケーションにおけるトラブルを引き起こすようなこだわりを無くすことは難しい。お互いを尊重するための他者との相互理解を図る指導も必要になってくると考える。</p>		
今までの評価	前時の評価と反省	<p>過去にあったトラブル時の対処方法をカルタにしようという意欲が見られた。トラブルを思い出し、その時に学んだ適切な方法を思い出すことができる。</p>	
	日常生活や各教科等の中での評価	<p>実際のトラブル場面で、自分の対処方法が通らない時、大声を出して通そうとしたり、周囲にいる友だちに八つ当たりしようとしたりする。いろんなことが気になり出し、情緒不安定気味になる。</p>	
本時の目標		<p>「ニコニコカルタ」作りを通して、課題となった事柄とそれに対する適切な対処方法を考えることができる。</p>	
時間	活動内容	留意点及び支援の方法	評価の視点
0分	<ul style="list-style-type: none"> ・はじまりの挨拶をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ニコニコカルタを作ることを意識付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・取り組む意欲があるか。
5分	<ul style="list-style-type: none"> ・前回まで作ったニコニコカルタをやってみる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・カルタに書いたルールを確認するように促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ルールを思い出せるか。
15分	<ul style="list-style-type: none"> ・宿泊学習時に楽しかった事や頑張った事を思い出す。 ・宿泊学習時にトラブルになった事柄を思い出す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ホワイトボードに書いて、確認する。 ・ホワイトボードに書いて、具体的に問題解決場면을提示する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・行動を振り返ることができるか。 ・行動を修正する必要性を理解できるか。
<p>宿泊学習時の薬の保管方法について</p> <p>教師に預けるか自分で保管するか</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・最近解決した、いろんなトラブル場면을提示し、自分なりの思いを言う。(1例) ・その対処法を思い出す。(1例) ・対処方法を言ってみる。 ・対処方法をカルタにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・トラブル時に考えた対処方法を、ホワイトボードを使って会話をしながら思い出すように促す。 ・対処方法が出てこない時には、いろんな対処法を提示し、選択するように促す。 ・まとめることで、記憶できるように促す。 ・トラブルの内容を上の句にその対処方法を下の句に書くように促す。 ・印象づけるようにトラブルをイメージできるようなイラストを描くように促す。 ・対処方法を記憶するように促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・対処法を考えようとすることができるか、または、選ぶことができるか。 ・理解し納得できるか。 ・納得し、意欲的にカルタ作りに取り組むことができるか。
30分	<ul style="list-style-type: none"> ・今日作ったカルタを含んだニコニコカルタに取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・印象づけるようにトラブルをイメージできるようなイラストを描くように促す。 ・対処方法を記憶するように促す。 ・対処方法を定着できるように、楽しんでゲームをするような雰囲気を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・対処方法をリハーサルできるか。
40分	<ul style="list-style-type: none"> ・終わりの挨拶をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分なりの対処法を考えたことを評価する。 	
準備物	<p>ホワイトボード、マーカー、白紙、筆記用具、カルタ用の紙、色鉛筆</p>		

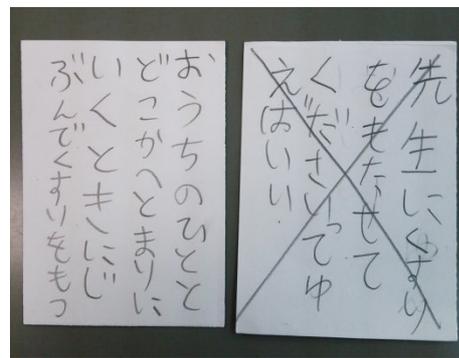
本時の評価	校外宿泊学習で生まれた課題であったことを覚えていて、課題解決に向けて本生徒は逃げ腰になった面もあったが、教師とのやり取りの中で学校内での解決方法について考えることができた。「家庭では（保護者とともに）自分で薬を持つ」ということを譲歩することで、下の句である「(学校では) 自分で薬を保管する」カードに自ら×をつけることができた。
支援の改善点	校外宿泊学習の現場で話し合ったのは、担任教師以外の教師とであった。現段階では担任教師との関係で生まれた課題の方が本生徒には現実感が持てたと思う。次回は担任教師とのやりとりの中で、出てきた課題について取り上げ、その中で困った部分について取り上げていく。そして、様々な対処方法とその結果を考え、その中から適切な対処方法を選択することが必要であると思われる。

ニコニコカルタ

【上の句】



【下の句】



② 授業評価まとめ（前期）

協議の内容	<p>ア 宿泊学習時の薬の管理については、教師に預けることを最終的に了承できたが、両者の思いが並行する場面が長かった。（家庭からの旅行では薬の管理は自分が行いたい。）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師の言葉がけが多く、待ち時間が少なかった。 ・宿泊学習での薬の管理方法について取るべき行動は分かっているながらも納得できないのではないか。 ・宿泊学習での薬の管理について、自分が持てないことの原因（他の生徒が誤って飲んだ場合など）をまじえて伝える必要があるのではないか。 ・様々なルールについて、自分の都合で変更できるものではないことを理解することが必要ではないか。 <p>イ 鉛筆で机を叩き、話題をそらすなどカルタ作りから逃げる様子が窺えた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・答えが明確な教材が必要ではないか。 ・評価がわかりにくいのではないか。 ・選択する答により結果が明らかになるような YES・NO クイズ方式の教材を活用することもよいのではないか。 ・うまく対処できたこともカルタの内容に取り入れてみてはどうか。 <p>ウ 集中力に欠ける様子が伺えた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究授業で人の出入りがあり、気になるのではないか。 ・教室のスペースが広すぎたのではないか。
-------	---

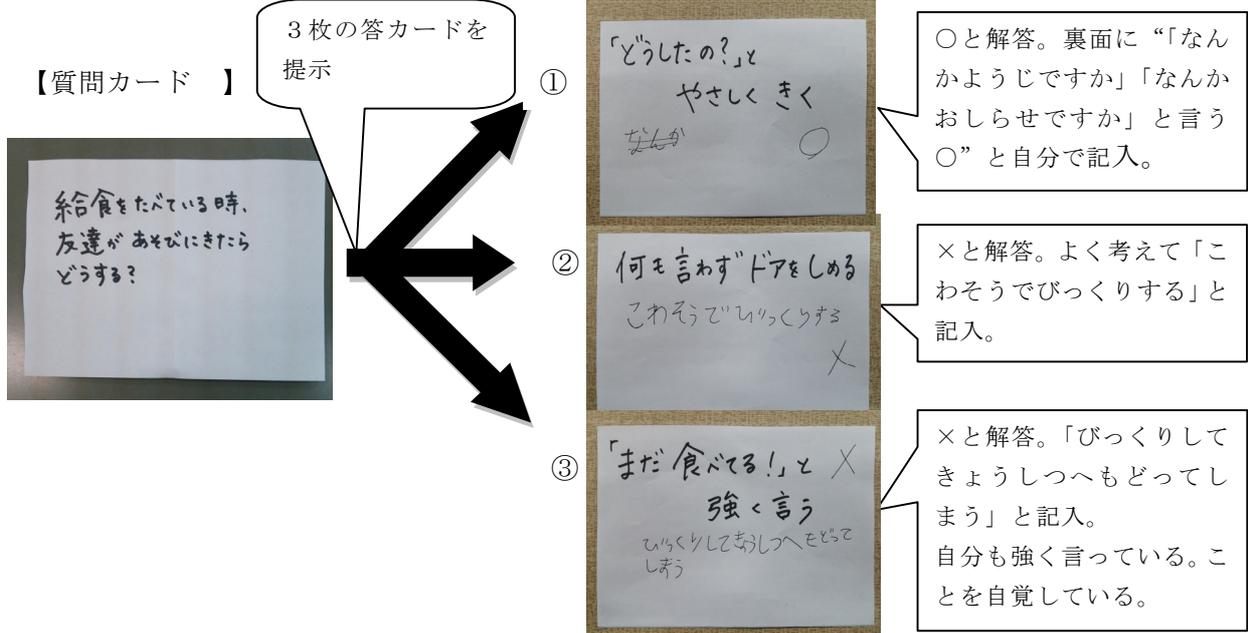
改善点及び次の授業に向けて	<p>ア 個別の指導を引き続き行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師の問いかけに対して答をせかさず待つ。 ・本生徒の気持ちを大切にし、一つ一つの生徒の発言を受け止める。 ・ルールを変更できないのには理由があり、なぜそのようなルールが必要なのかを本生徒に理解できるように説明する。 <p>イ 教材ニコニコカルタの使い方の変更、題材の工夫をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ニコニコカルタの上の句を教師が用意し、下の句をいくつかの解答の中から選択させる。 ・下の句を書く活動も取り入れる。 ・YES・NOクイズなどゲーム的な要素を取り入れ、正しい選択ができたかどうかの評価をわかりやすくする。 ・一週間の振り返りの時間とし、良かった行動も取り入れる。 <p>ウ 集中できる環境設定、話しやすい環境設定を整える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教室を区切り、視覚的に刺激の少ない壁の方を向く。 ・L字型に2つの机を配置し、教師は対面には座らないようにする。 ・手元に用意したホワイトボードを活用し、文字による視覚的な支援を行う。 ・リアルタイムビデオの映像をモニターに映し出し廊下で公開することで、参観教師の出入りを少なくする。
---------------	---

③ 自立活動学習指導案（後期）

対 象	J
生徒の実態	<p>前回の授業評価の結果を含め、指導にあたっては、発達に応じた視覚的な支援により課題の理解度が深まった。さらに、担任教師とでは、一対一の場面で自分の思いを語ることができ、日常経験した課題についての簡単な対処方法を考えようとする態度が窺えるようになった。</p> <p>自立活動の時間における指導の授業を楽しみにしている面も窺えるようになった。学習を積む中で対人関係上のトラブル時には、自分からホワイトボードとマーカーを持ってきて自分の思いを書き、担任教師に伝えられるようになった。口頭でよりも書き言葉によれば、自分の考えを整理し、自分の間違っていたことを客観的に見つめられるようになり、気持ちも落ち着いて考えられるようになったと思われる。しかし、こちらが一つ譲らないと自分の思いを譲歩することが難しい面がある。</p>
指導目標	困った時の対処方法を考える。（人間関係の形成）
活動（単元）内容の設定理由	<p>継続的な指導により、自分の対処方法を強く通そうとする態度は軽減してきたが、本生徒のこのようなこだわり行動が少人数の集団の中にあってもトラブルを生み出すことは否めない。</p> <p>前回の授業では、過去にあったトラブルを思い出すことはでき、適切な対処方法をわかっているものの、なかなか課題に向き合うことができなかった。そこで、それを解消するべく、対処方法を自己選択でき、自己選択した結果を自分で確かめられるような題材を設定した。つまり、様々な場面で様々な対処方法があり、自己選択したものを含め、あらゆる選択が、どのような結果をもたらすのか、選択と結果をフィードバックさせることで、適切な対処方法を選択する必要性が理解できると考えるからである。</p>
今ま	<p>前時の評価と反省</p> <p>過去にあったトラブルを思い出すことはでき、適切な対処方法をわかっているものの、なかなか向き合うことができなかった。</p>

での評価	日常生活や各教科等の中での評価	トラブル時に担任教師と一対一で話し合いをし、対処方法について考えることを積み重ねていく中で、自分からホワイトボードを取って自分の思いを書いて説明しようとしたり、「話を聞いてよ！」との訴えが窺えたりするようになった。		
本時の目標	困った時の解決方法を自己選択し、適切な方法を導き出すことができる。			
時間	活動内容	留意点及び支援の方法		評価の視点
0分	・はじまりの挨拶をする。	・自立活動に取り組むことを意識付ける。		・取り組む意欲があるか。
5分	・自分の行動を修正しないとイケない葛藤場面で、大声を出したくなる時はどんな時か考える。	・授業中や友だちと遊んでいる時等、例として場面を伝える。		・行動を振り返ることができるか。
10分	・大声を出した時、どんな状況になるのか、いくつかのカード（YES・NOカード）の中から選ぶ。	・大声を出したらどんな結果になるのかいくつか提示する。 ・その中から選ばれたカードがその先どうなるのか提示する。		・適切なカードを選ぶことができるか。 ・理解し納得できるか。
20分	・選んだカード以外の場面の時はどうなるのか考える。 ・好きな友達のとなりに座れない時はどんな態度をとるのか考える。 ・自分が考えた内容から、そうすることでどんな状況になるのかホワイトボードに書く。	・選択した方法が適切であるかどうかを考えるように促す。 ・自分で選んだカード以外の場面の時もどうなるのか考えるように伝える。 ・発言があるまで考える時間を与える。 ・ホワイトボードを渡し、自分の思いを書くように伝える。 ・トラブル時に考えた対処方法を、ホワイトボードを使って会話をしながら思い出すように促す。 ・対処方法を意識するように促す。		・内容を理解し、考えられているか。 ・自分の思いを書くことができているか。
35分	・課題となったことを上の句に、その対処方法を下の句にした、「ニコニコカルタ」を作る。	・適切な対処方法を考えたことを評価する。		・納得し、意欲的に作れるかどうか。
40分	・終わりの挨拶をする。			
準備物	ホワイトボード、ホワイトボード用マーカー、カード、白紙、筆記用具			
本時の評価	ゆっくりと考える時間があつたので、落ち着いて取り組むことができている。いくつかの答カードの中から適切な答を選ぶことができ、それ以外の答カードに対して相手がどう思うかというところまで考えることができた。			
支援の改善点	考える時間があることで適切な対処方法を導き出すことができるが、日常生活の中で適切な対処方法を考え、行動に移すことがまだ難しい。対処方法は分かっているが、わざとふざけることがあり、般化させることができないこともある。今後も、本人が困ったり適切な対処方法を考えることが難しいと感じたりする場面があつた時は、個別に話し合う場を設け、自ら対処方法を考えられるように指導していく必要がある。また、指導者が一歩譲歩して、適切な対処方法について納得できるように促すことが必要であると思われる。			

YES・NOカード



④ 授業評価まとめ（後期）

協議の内容	<p>ア 授業の終盤で、集中して課題に取り組むことが難しい場面があったのではないかな。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の導入で、「今日はいくつ話をしよう」とゴールがわかりやすいように予定を提示してもよかったのではないかな。 ・自立活動の観点から、本人のペースで取り組めるような配慮が必要ではないかな。 <p>イ 今まで作成したカードを日常生活で、どのように活用していくのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題が起こった時、作成したカードを有効活用できるようにできないかな。 ・今後、問題が起こった時にキーワードを言えば、「ハッ」と気づいてもらえるようになってほしい。 ・授業で作成したカードをまとめられるようなワークシートが必要ではないかな。 <p>ウ 今後の自立活動の時間の指導について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本人はいけないうことだとわかっているが、状況に応じた行動を取ることが難しいことが多いので、引き続き、自立活動の時間における指導が必要ではないかな。 ・ロールプレイを行い、経験を積むことが大切ではないかな。 <p>エ 自立活動の時間における指導とその他の学校生活で、どのような取組をして連携を図るのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今回の取組をどのように般化に繋げていくのか。 ・実態からトークンなどは有効的な支援方法だと考えられる。
改善点及び	<p>ア 授業の展開について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・より意欲的に活動に取り組めることができるように、一緒にどんな課題のカルタ作りをするのか、カルタをいくつ作成するかを授業開始時に本生徒と話し合うようにする。 <p>イ 作成したカードの活用方法について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今まで一緒に考えた対処方法をまとめるため、ワークシートを作成する。

次の授業に向けて	ウ 自立活動の時間における指導について
	<ul style="list-style-type: none"> ・自立活動の時間における指導では、1対1の指導も取り入れながら、必要に応じて1対2、1対3などの複数で考える取組をする。 ・机上だけで、課題への対処方法を考えるだけでなく、理解を深めるため、短編的なロールプレイを取り入れる。
	エ 般化について
	<ul style="list-style-type: none"> ・本生徒が一日の出来事の振り返りができるように、終わりの会で、その日の頑張りや困った行動を伝えるようにする。 ・筆談でのやり取りを好むため、教師と交換日記を実施する。交換日記から、本生徒の思いを聞き取ったり、課題への対処方法を一緒に考えたりするようにする。 ・問題解決場面や様々な場面で頑張りを評価できる時、言葉だけで評価するのではなく、形に残るような評価方法をする。

⑤ 考察

本生徒の学級は、6人からなる。1学期当初は、本生徒を含めた生徒同士がお互いに言い合ったり、その喧騒で他の生徒が二次的で情緒的な問題を呈したりするなど、クラスメイトとの調整に困難な状態が続いた。2人の新しい担任教師に慣れず、教師も個別の指導計画や前担任教師からの情報を得られたものの、他の生徒との関係の中で指導することが困難であった。

このような指導の困難さから、自立活動の時間における指導について、本生徒への指導のあり方の検討を図る中で、学年6名の教師の間で、本生徒への理解と指導のあり方について共通理解を図ることができた。指導の結果、教師に心を開き自分からホワイトボードとマーカーを手に取り、自分の思いを伝えるようになってきた。しかし、まだ自分の思いと適切な対処方法との折り合いをつけることは難しいが、こちらが一步譲ると別の対処方法を受け入れられるようになってきた。そして、一度納得すると適切な対処方法を心がけることができるようになった。今後の本生徒に対する自立活動の時間における指導については、授業評価を踏まえ、今後も授業改善を引き続き図っていきたいと思う。特に、認知特性(文字による視覚支援の必要性)、指導方法(トークン等を利用した応用行動分析的手法の活用)、般化(教師間の連携・ロールプレイ)、自尊感情(本生徒が物事をどのように理解しているかを傾聴すること)等の視点に目を向けるべきである。

また、教育課程上、多くの時間を占める、課題別学習の担当教師と学級双方の学習場面での本生徒の様子、指導が困難な状況、支援のあり方について情報交換し、指導上の連携を図ることによって、本生徒に対する指導の一貫性を図ることができ、般化に向けた効果的な指導に結びついたと思われる。具体的には①口頭だけでなく、書字を使って本生徒の考えを引き出していくこと②生徒間の人間関係や集中しやすさを配慮した座席設定をすること③視覚処理が強いことから、図や文字で提示すること④表情から聞き漏らしているなど思われた時に注意喚起をすること⑤本生徒が物事をどのように理解しているかを傾聴すること等、支援のあり方が確立され、本生徒に関わる教師が一丸となってアプローチできるようになった。このことは本生徒

のみならず、中学部全体で生徒を育てていこうという姿勢に繋がったと言える。

一方、個別の指導計画はあるものの、本生徒には広汎性発達障害に特有な対人関係上の困難があるため、対人関係を構築することに非常に時間を要す。更に、指導の系統性を図ることが特に重要になってくるため、生徒や担任教師を含めた、クラスの構成メンバー等の人的環境の配慮が必要である。一定の人的環境の中で情緒の安定を図った後、少しずつ環境を変え、社会性を広げていくことが肝要である。さらに、本生徒について家庭との共通理解を深め、今後も連携して、取組を進めていく必要があると考える。

最後に、自立活動の時間における指導は、個別指導の形態で行われることが多いが故に、教師が生徒の「学習上又は生活上の困難」をよりの確に把握できる場、生徒の障害理解の場、支援のあり方を考えられる場であり、ここでの指導のあり方を教育活動全体に広げていくことができる。そして、生徒自身も教師と共に自らの障害と向き合う場であると言えよう。

(3) 中学部3年生

①自立活動学習指導案（前期）

対象	K
生徒の実態	<p>新学年より情緒不安定でイライラし、突然物にあたりたり人に頭をぶつけたりすることが増えてきた。自分の思いが相手に伝わらなかったり、やりたい事ができなかったり、活動に見通しがもてないこと、さらには、にぎやかなところや人が多いところ、大きな音量に対して不快感を抱くことなど、さまざまな要因があると考えられる。</p> <p>生活面では、習慣化された事は自分の意思で動くことができるが、指示待ちのことが多い。また、言葉かけや周囲の状況を見て次の活動に移ることができる。時間を持て余すと唇や指の皮をむいたり、ハンガーやペンを手に取って回したり、といった行動が見られる。学習面では、形や色のマッチングができている。</p> <p>人のかかわりにおいては、本来、スキンシップは好きで、相手の手を取りに来ることもある。また、嫌なことには「いや」と自分の気持ちをはっきり伝えることができる。しかし、ストレスの原因など伝えることができない。</p> <p>情緒面では、気持ちが高ぶっているときなど、急にその場から繰り返し飛び上がることがある。強い不安を抱くとパニックになり、自傷・他傷行為がでたり、泣き崩れたりする場面がある。</p>
指導目標	<p>①心身ともにリラックスさせる方法を獲得し、情緒の安定を図る。(心理的な安定)</p> <p>②好きな活動を自己選択し日常的に行うことができる。(心理的な安定)</p> <p>③ストレスを感じることを、カードを選択したり言葉で伝えられる。(心理的な安定)</p>

活動(単元)内容の設定理由	<p>情緒不安定でイライラする理由としては、さまざまな要因がかかっていると考えられる。そこで、これらの要因を整理して支援することで不安を少しでも解消できればと思い、次のような活動内容を考えた。</p> <p>環境の面で、にぎやかなところや人が多いところ、大きな音量に対して不快感を抱くことなどから、静かな環境を設定した。</p> <p>また、不安な時に繰り返し飛び上がる行動から、縦に揺れる刺激を感覚機能が欲しているのではないかと考え、粗大な身体活動を通して感覚機能を満たす活動を設定した。</p> <p>次に好きな活動を自己選択・自己決定できるように、興味があると思われる活動の写真カードを用意した。指示待ちが多い中、日常的に好きな活動を自己選択し、快適な時間を過ごせるようになってほしいと願う。これは、将来の余暇活動にも繋がってくると考えられる。</p> <p>ストレスを感じることを人に伝えることができるようになるためには、信頼関係を結ぶ必要があり、さまざまな活動を通して、信頼関係を構築できればと考え、写真カードの中に人とかかわる内容もとりあげた。その活動の中で、自分の気持ちを伝え、伝わることの楽しさや心地よさに気づいてほしい。</p>		
今までの評価	前時の評価と反省	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽は、嫌がる様子がなく、聴いて少し表情がほぐれているように見えた。 ・バルーンでの活動は、座って揺れることは楽しいようであるが、バルーン上でキャッチボールをするとイライラしてしまい、怒ってボールを遠くへ飛ばしてしまうことがあった。→次回、ボールの受け渡しのペースを変えたり、投げずに手渡す方法など考え、それでもイライラする場合は止める。 ・リラックス体操では、教師の見本をある程度模倣することができ身体を伸ばすことができた。しかし、ゆっくり体を伸ばすことや深呼吸を意識することはまだ難しい。 	
評価	日常生活や各教科等の中での評価	<p>頻繁にイライラすることがあり、情緒が不安定になる。</p> <p>自分の思いを表現する方法が分からず、物にあたったり、攻撃的になったりする。時間を持て余すと、唇や指の皮をむいたり、ペンを手に取って回したり、といった行動が見られる。習慣的なことも考えられるが、静かな自立活動室が好きで、昼休憩によく「自立活動室」と言って自ら行く。絵本の読み語りは、好きな様子である。</p>	
本時の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・バルーンを使い縦に揺れたり、ストレッチをしたりすることで感覚機能を満たし、情緒の安定を図ることができる。 ・活動を自己選択することによって、情緒の安定を図る。 		
時間	活動内容	留意点及び支援の方法	評価の視点
0分活動①	<p>○はじまりのあいさつをする。</p> <p>○本時の活動予定を選択し決める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・時間割表を見せて行う。 ・バルーンの活動は、感覚機能を満たすため、あらかじめ設定していることを本人と確認する。 ・自己選択できるように写真カードを用意する。 	○活動内容を自己選択できたか。
5分活動②	<p>・声に出して活動をいっしょに確認する。</p> <p>○バルーン(小・中)を使い、体を動かす。</p> <p>・バルーンに座り縦揺れを行う。</p> <p>・バルーンに乗りながら、教師とボールの受け渡しをする。</p> <p>・バルーン(大)を使い教師と一緒に活動する。</p> <p>・うつ伏せ・仰向け・座位(上下→横→回転)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・安全に行えるように環境を整える。 ・すぐに終わってしまうことがあるので、砂時計を使って最短で3分は行えるようにする。 ・あわてずに生徒のペースに合わせて行う。 ・楽しみながら、体を動かせるようにする。 	○表情から感覚機能が満たされ、情緒の安定に至ったか判断する。 ○教師に体をゆだねることができたか。

<p>活動③</p> <p>25分</p> <p>活動④</p> <p>45分</p>	<p>○深呼吸を行う。</p> <p>・手の伸展を行いながら、深呼吸を行う。</p> <p>選択による活動を行う (●印)</p> <p>●呼吸器訓練器具を用いて、息を吐く練習を行う。5分</p> <p>●音楽を聴く。5分</p> <p>・ゆったりとした音楽を適度な音量で聴くことで、心地よさを感じられるようになる。</p> <p>●マッサージを受ける。10分</p> <p>●ブランコに乗る。10分(雨天中止)</p> <p>●自転車に乗る。10分(雨天中止)</p> <p>●絵本の読み語り。5分</p> <p>●「どっち」ゲームをする。5分</p> <p>●ロデオに乗る。10分</p> <p>○終わりのあいさつ</p>	<p>・ゆっくりと手を伸ばすことで深く息を吸うことを意識できるようにする。</p> <p>・活動レベルを落とし、次の活動を落ち着いてできるために行う。</p> <p>活動によっては、時間の区切りは、砂時計で行う。</p> <p>・板やボールを選べるようにする。</p> <p>・息を「吐く」が分かるようにイラスト等で視覚支援する。</p> <p>・ゆったりとした時間を過ごせるように静かな環境で行う。</p> <p>・マットで寝転ぶ事ができるようにする。</p> <p>・教師とのやりとりの中でマッサージの仕方を伝えられるようにする。</p> <p>・押ししてほしいなど、コミュニケーションをとりながら行う。</p> <p>・自分でこげるように声をかける。</p> <p>・好みの本を用意する。</p> <p>・楽しい雰囲気で行う。</p> <p>・初めての場面もあるので、選んだ時は、誉めて不安の少ないように先に見本を見せる。</p> <p>・選ぶ確立を高めるために好きな水色を写真の周りに貼る。</p>	<p>○落ち着くことができたか。</p> <p>●息を吐くことでボールを進められたか。</p> <p>●リラックスできているか。</p> <p>●要求を伝えることができたか。</p> <p>●要求を伝えることができたか。</p> <p>●体を動かしたことで、変化は見られたか。</p> <p>●本に注目し、関心がもてたか。</p> <p>●選択することができたか。</p> <p>●楽しむことができたか。</p>
<p>準備物</p>	<p>ホワイトボード、写真カード、バルーン(小・中・大)、ビーチボール、砂時計、呼吸訓練器具、CDデッキ、CD、マット、絵本、ミニチュアボール</p>		
<p>本時の評価</p>	<p>○バルーン活動</p> <p>・バルーン(中)を用いて縦に揺れる刺激は笑顔が出たことから、情緒の安定につながったと考える。</p> <p>・バルーン(中)に乗りながらのボールの受け渡しは、縦に揺れる刺激を中断させることになって、好んでいない様子であった。</p> <p>・バルーン(大)の活動では、力が抜けて教師に体をゆだねることができた。</p> <p>○頭のマッサージは気持ち良かったようで、かなり働きかけとして受け入れられていた。終了前に砂時計をいきなり投げた。マッサージを続ける中で、表情が良くなってきていることから、続けてほしい気持ちがあったと推測できる。</p> <p>○絵本の読み語りでは、本をよく見て関心が持っていた。</p>		
<p>支援の改善点</p>	<p>心理的な安定を優先してねらうので、一つの活動を充分行い、終わったら次にどうするか尋ねる方が良い。「もっと」や「続ける」という言葉での伝達ができれば、と考える。もう一度好きな活動の選択ができるように次の活動を選択する場面で選択した活動のカードを省かずに戻す。</p>		

活動① 本時の予定



活動② バルーンを使用した活動
(一人で活動)



活動② バルーンを使用した活動
(教師と活動)



活動③ 深呼吸



活動④ 自己選択するための写真カード



- バルーン (大) での粗大活動。(教師と活動)
- バルーン (小・中) での粗大活動。(一人で活動)
- 絵本の読み語り。
- ブランコに乗る。
- 自転車に乗る。
- マッサージを受ける。
- 深呼吸の練習をする。
- ロデオに乗る。
- 「どっち」ゲームをする。

② 授業評価まとめ（前期）

協議の内容	<p>ア カードを選択する時に確認せず、カードを取る様子が窺えた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・好きな活動を何度も入れ、自己選択したものを本人が教師にアピールできるようにしても良いのではないか。 <p>イ マッサージ終了直後、砂時計を投げて割ってしまった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・投げたことをその時に指導しても良かったのではないか。 ・心理的な安定をねらう授業なのであえて指導しない方が良いのではないか。 ・もっとマッサージをしてほしいという気持ちの表れであったのではないか。 ・相手に「もっと」という言葉で意思を伝えられるようにしてはどうか。 ・タイムタイマーを使用してみるのはいかがでしょうか。 <p>ウ バルーンは床が滑りやすく危険なのではないか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マットを敷いたり、霧吹きを床に吹いたりしてはどうか。 <p>エ バルーンに乗った時、一瞬表情が硬かった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・慣れるまでは、安心できるように頭部を支えてはどうか。 ・身体接触が苦手なので腹部を支えられていたことが表情の硬さに繋がったのではないか。 ・身体接触を最小限に抑えてはどうか。 ・仰向けになった時、蛍光灯がまぶしかったのではないか。 <p>オ 教室への人の出入りが気になり、リラックスできないようであった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・心理的な安定がねらいの授業なので、余分な刺激は排除した方がよいのではないか。
改善点及び次の授業に向けて	<p>ア 活動内容の選択方法について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何でも好きな活動を選択できるようにする。 <p>イ 活動の区切りについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マッサージを続けて欲しい様子が窺えた時は、「もっと」という言葉を引き出せるように言葉がけをし、意思を確認する。 ・タイムタイマーを使用する。 <p>ウ バルーンの下に滑り止めのマットを敷く。</p> <p>エ バルーン時の支援、および環境設定について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・内側の腕と腰のみを支える。 ・よりリラックスできるように本人に照明を消すかどうか確認する。 <p>オ リアルタイムビデオを使用してモニターに映すことで、教室への参観教師の出入りをなくす。</p>

③ 自立活動学習指導案（後期）

対象	K
生徒の実態	<p>イライラしていて、学校に到着後バスから降車を拒み窓ガラスに頭を打ちつける場面で、「マッサージ」と言って、教師を受け入れることができた。</p> <p>授業中、情緒が不安定になり、泣いてしまう場面があった。なぜ泣いてしまったのかは、尋ねても答えることはできず、理由の推測も難しかった。落ち着くため、別室に行くと教師の手を取り頭皮に持っていき「マッサージ」と伝えることができた。深呼吸も交えて15分ぐらいマッサージすると落ち着きを取り戻し、教室に戻り授業の続きを行うことができた。</p>
指導目標	<p>①心身ともにリラックスさせる方法を獲得し、情緒の安定を図る。（心理的な安定）</p> <p>②好きな活動を自己選択し日常的に行うことができる。（心理的な安定）</p> <p>③ストレスを感じることを、カードを選択したり言葉で伝えられる。（心理的な安定）</p>

<p>活動（単元） 内容の設定理由</p>	<p>※不安な時に繰り返し飛び上がる行動から、縦に揺れる刺激を感覚機能が欲している（本生徒の神経発達に今、必要な動き）のではないかと考え、粗大な身体活動を通して感覚機能を満たす活動の設定をした。また、活動の中で自分の気持ちを伝え、伝わる楽しさ心地よさに気づき、表現する手段の強化と安定を図りたいと考える。</p> <p>※生徒の実態から不安と感覚機能を満たすことにつながりについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本生徒は一人遊びが多く興味・関心の幅が狭く、人からの働きかけに反応が少ない。また、感情のコントロールが難しい時がある。 ・前庭覚、触角、固有覚の刺激を快く受け入れている。（好き、喜ぶ） <p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> ・皮膚や筋肉へのリズムカルな刺激で脳の覚醒レベルを活性化させたい。その後に、ゆったりとした運動を行うことによって、徐々に覚醒レベルを下げて沈静化させることで感覚機能が満ち、不安の解消になると考える。 ・このような刺激を含む活動に担任がかかわり、こちらの働きかけと本生徒の快く感じる気持ちが合うことで、刺激を介して人とのかかわりも促進されると考える。 		
<p>今までの評価</p>	<p>前時の評価と反省</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が活動や準備・片づけなどの時に動きが止まり、どのようにすればよいか見通しがもてていなかった。主体的に活動できるように目印やカードの提示があればよかった。 ・バルーンに乗ってのキャッチボールは、好んでやろうとしていなかったのも、無理に活動として行う必要はなかった。その後、生徒が終わりを告げるまでじっくり取り組んだことで、満足して落ち着いた様子が見られた。 ・教師といっしょに行うバルーンでは、三種類の活動の写真カードから順番を選ぶことができた。 	
<p>日常生活や各教科等の中での評価</p>	<p>登校後、毎朝最低3分という時間を決めて中型バルーンに座り縦揺れを行う活動を取り入れたところ、イライラすることが少し減っているように感じる。</p>		
<p>本時の目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・バルーンを使い、縦に揺れる刺激やストレッチをすることで感覚機能を満たし、情緒の安定を図ることができる。 ・教師を信頼して、体を預けることができる。 ・続けてほしい時に、「もっと」や「続ける」という言葉が言えるようになる。 		
<p>時間</p>	<p>活動内容</p>	<p>留意点及び支援の方法</p>	<p>評価の視点</p>
<p>0分</p>	<p>○はじまりのあいさつをする。</p>		
<p>活動①</p>	<p>○タイムタイマーが鳴ると授業が終わることを知る。 ○本時の活動予定を確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・黒板の時間割表を見せて行う。 ・実際に鳴らしてみ、授業の終わりを確認できるようにする。 ・バルーンの活動は、感覚機能を満たすため、あらかじめ設定していることを本人と確認する。 	
<p>5分</p>	<p>活動②</p>		
<p>活動②</p>	<p>○バルーンを使い、体を動かす。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中型バルーンに座り縦揺れを行う。 ・大型バルーンを使い教師といっしょに活動する。 <p>①電気とカーテンを好みの状態にする。 ②うつ伏せ・仰向け・座位から好きな順番を選択する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・安全に行うことができるように、座り方や姿勢について声をかける。 ・どうしたいか確認する。 ・写真カードから選択できるようにする。 	<p>○感覚機能が満たされ、表情がゆるんでいるか。</p> <p>○活動順番を自己決定できたか。</p>

<p>活動③</p> <p>25分 活動④</p> <p>45分</p>	<p>③選択した順に行う。 (上下→横→回転)</p> <p>○深呼吸を行う。 ・手の伸展を行いながら、深呼吸を行う。</p> <p>選択による活動を行う (●印)</p> <p>●バルーンを使い、体を動かす。 ●呼吸器訓練器具を用いて、息を吐く練習を行う。</p> <p>●マッサージを受ける。 ・音楽を聴きながら、行うか選択する。</p> <p>●ブランコに乗る。 (雨天中止) ●自転車に乗る。 (雨天中止)</p> <p>●絵本の読み語り。</p> <p>○終わりのあいさつ</p>	<p>・安全に安心して活動できるように環境を整えたり、声かけをしたりする。 ・ゆっくりと手を伸ばすことで深く息を吸うことを意識できるようにする。 【中型バルーン→大型バルーン→深呼吸まで、活動レベルを徐々に落としていき、次の活動に落ち着いて取り組めるようにする】</p> <p>選択した活動は時間の設定を行わず、本人の意思を確認し、授業終了までできるようにする。</p> <p>・選んだ時は「もう一回」という言葉を引き出すようにする。 ・板やボールを選べるようにする。 ・息を「吐く」が分かるようにイラスト等で視覚支援する。 ・ゆったりとした時間を過ごせるように静かな環境で行う。 ・マットで寝転ぶ事ができるようにする。 ・教師とのやりとりの中で「もっと」やマッサージの仕方などを伝えられるようにする。 ・押してほしいなど、コミュニケーションをとりながら行う。 ・自分でこぐように声をかける。</p> <p>・好みの本を用意する。</p> <p>・この時間の評価を伝える。</p>	<p>○教師に体をゆだねることができたか。 ○落ち着くことができたか。</p> <p>●自分の要求を伝えられたか。 ●息を吐くことでボールを進められたか。 ●リラックスできているか。 ●「もっと」等の自分の要求を伝えることができたか。</p> <p>●要求を伝えることができたか。 ●体を動かしたことで、表情に変化は見られたか。 ●本に注目し、関心がもてたか。</p>
<p>準備物</p>	<p>タイムタイマー、ホワイトボードの台、絵本、バルーン(小・中・大)、呼吸訓練器具、ホワイトボード、写真カード、CDデッキ、CD、マット、</p>		
<p>本時の評価</p>	<p>○バルーン活動</p> <p>・バルーン(中)を用いて、縦に揺れるバルーンの刺激を自ら好んで行い、笑顔も見られた。</p> <p>・バルーン(大)を用いての教師とのストレッチでは、徐々に力を抜くことができきて、前回より早く教師に体をゆだねてバルーンに全身を乗せることができた。また、うつ伏せの時には自ら足で踏み切り、バルーンに勢いをつけて楽しんでいた。</p> <p>・覚醒レベルを活性化させた後に、徐々に覚醒レベルを下げて沈静化させることで表情が柔らかくなり、情緒の安定が図られた。</p> <p>●好きな活動を自己選択する場面では、全てのカードを確認しなかったが、好きな自転車とマッサージと絵本のカードを選ぶことができた。</p> <p>●自転車では、ペダルを漕いで体を動かし、風を感じて気持ち良さそうな表情をしていた。</p> <p>●座って行う頭皮のマッサージは気持ち良さそうであったが、仰向けのマッサージは途中で立ち上がり終わったので、リラックスしきれていなかったように感じる。</p>		

	●絵本を出してきたのを見ると笑顔になり、期待感を持っていた。読み語りでは、ページをめくって楽しむことができた。
支援の改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・バルーンでの言葉かけの場面で、直後の行動に対しての言葉かけのみであった。 改善→①直前②現在③直後のどの場面でどのように声をかけるのが効果的であるのか考えて実行する。 <ul style="list-style-type: none"> ・カード選択の場面で全て目を通さずに選んでしまっていた。 →すべてのカードを裏むけて置き、全部めくってから選ぶように計画的に進める。 <ul style="list-style-type: none"> ・頭皮のマッサージは気持ち良かったようなので、マッサージを途中でやめて、目標の「もっと」や「続ける」という言葉を引き出し、伝達する機会を設ければ良かった。本時の目標を達成することを常に念頭に入れておくべきである。

④ 授業評価まとめ（後期）

協議の内容	<p>ア 教師とのやりとりの後、使っていた机をどこへ持っていったらよいか迷っていた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・机を片付ける場所が分かりにくいのではないか。 <p>イ 身体に触れられた時は少し表情が固くなった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・安全のために手を添えることは大切だが、必要以上に身体に触れない方がよいのではないか。 <p>ウ マッサージの時にリラックスしきれていなかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・顔に何かをかけてあげてもよいのではないか。 <p>エ バルーンやマッサージをもっと続けたい様子が窺えた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・続けるかどうかを本人に確認し、意思を発信できるようにしてもよいのではないか。 ・視線を合わせて聞いた方がよいのではないか。 <p>オ カードを選択する時に確認せず、カードを取る様子が窺えた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・じっくりカードを見るような工夫をした方がよいのではないか。 ・カードの使用に慣れるため、日常的に選択できるようにしてはどうか。 <p>カ 教材・教具について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教材としてトランポリンはどうか。 ・バルーンの空気圧を見てから取り組ませた方がよいのではないか。 <p>キ 教師の言葉かけについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・有効な言葉かけやタイミングを考えた方がよいのではないか。
改善点及び次の授業に向けて	<p>ア 本人が机を片付けやすいように位置を明確に示す。</p> <p>イ バルーンの時にはリラックスしやすいように手を添える場所を腰だけにする。</p> <p>ウ マッサージの時にリラックスのためにアイマスクをする。</p> <p>エ バルーンやマッサージの途中で視線を合わせ、本生徒の意思を聞き「もっと」や「続ける」という言葉を引き出していく。</p> <p>オ カードの提示方法、使用方法について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・すべてのカードを裏向けて置き、全部返してから選ぶようにする。 ・カードを日常的に使用し、カードの使用に慣れるようにする。 <p>カ 教材・教具について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・トランポリンを教材の一つに取り入れて、好きな活動かどうか試してみる。 ・取り組む前にバルーンの空気圧を確認する。 <p>キ 活動の直前、現在、直後の場面で言葉をかける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・直前（見通し）「今から〇〇するよ」 現在（状況）「今〇〇だね」 直後（評価）「〇〇できたね」等。

⑤ 考察

Kに対する自立活動の時間における指導の中で、表情が明るくなり笑顔が増え、また、バルーンの時には体の緊張がとれリラックスしてる様子がみられた。さらに、バルーンや自転車時には「もっと！」「続ける！」というふうに気持ちを伝えることができるようになった。日常の中での変化としては、バルーンを毎朝行うようにしたところ安定してすごせることが多くなり、行えない日には授業中不安定になることがあった。以前は、音を嫌っていたが、好きな音楽（ α 波）ができ、自分から「CDかけて！」と要求したり、バスの中からもなかなか降りられない時に、バスの中で担任に「マッサージして！」と伝え、マッサージしてもらおうこと降りることができた。また、「ペンかしてください！」「(毎日行っていた自立活動室に、今日は)行かへん！」など、ことばで伝えることができるようになった。情緒的な安定から、チャレンジする気持ちも育ったようで、初めてのことに落ち着いて取り組む様子も見られた。

Kのねらいである「自己選択」「自己決定」「自分の思いを言葉で伝える」ということを達成できた要因としては、バルーンやマットに仰向けになる時に、眩しくないように蛍光灯を消す、カーテンを閉める等、生徒の細かな表情の変化に注目して、丁寧な環境設定ができたことが考えられる。また、日常におけるKの変化は、感覚機能を充たすことをねらいとしたバルーンを日常的にも取り入れ、不安定になった時にバルーンでの縦揺れを行えるようにしたことや、自分の要求や気持ちを伝えて受け入れられる快の体験を通して、安心の中で教師との関係を深めることができた。更に自分の気持ちを伝えることができ、新しいことへのチャレンジが可能になったのだと考える。自立活動のみならず、他の授業や日常生活等様々な場面でKの気持ちに寄り添い、汲み取ろうと努力する教師の姿勢がKの情緒の安定につながったと考える。この教師の姿勢は、他の生徒に接する時にも大切な事であると学年で確認した。

今後のKの課題としては、自分の気持ちを更にしっかり伝えられるようになること（例えば、嫌なときに何が嫌なのかを言葉やカードを使って伝えるようになること）や、情緒が安定することによって、様々な学習に参加でき、興味の幅を広げたり人との関係を広げることであると考える。

今回の事例研修では、一人の生徒の自立活動についてじっくりと話し合いを行い、実態把握から指導目標、指導内容の設定、その指導・支援の在り方について、教員間で共通に意識を高めて進めることができ、生徒の変化からも成果が見られるものであった。この取り組みから、丁寧な実態把握の必要性、個に応じた指導目標や指導内容の設定と評価を通しての改善、また、生徒によって必要な指導時間の確保と指導形態の工夫、般化するための教員間の共通理解等、大切にしなければならないことを再認識することができた。これらのポイントを教員間で意識しながら、日々の取り組みの中で改善をはかっていきたい。

(4) 中学部 2 ブロック
① 自立活動学習指導案(前期)

対象	L		
生徒の実態	物語や絵本の読み聞かせが好きで、自分から絵本のページをめくることができる。担任教師や友達に対して、発声や喃語で話しかけるような様子がある。呼名や質問に対して、左手を挙げたり、「はい」に似た発声で応えたりすることができるが、場面に応じて的確な返事は難しい時もある。給食前後や休憩時間には、上機嫌で大声を出したり、盛んに動いたりする。嬉しい時は相手の顔を見て笑顔を見せ、声を上げて大笑いすることがある。大きな音や賑やかな場所が苦手で、我慢できない時は大声で泣き手足をバタつかせて拒否しようとすることもある。		
指導目標	・カードを選択し、自分の気持ちを伝える。(コミュニケーション)		
活動内容の設定理由	呼名や質問に対して、左手を挙げたり、「はい」に似た発声で応えたりすることができるが、場面に応じて的確な返事や意思表示が難しいことがある。その点が難しい要因として、視覚的要因、聴覚的要因、コミュニケーション力の弱さなどいくつかの理由が考えられる。視覚的要因や聴覚的要因等は環境の設定で改善を図ることとし、本授業ではコミュニケーション力を付けるための活動に焦点をあてて内容を設定した。日常生活の中で必要なコミュニケーション力を付けるためには、各場面での自分の気持ちや意思を相手に伝える経験を重ねることが大切であると考え、写真カードで好きな活動を選ぶ活動を設定した。学校活動において自分の気持ちを伝える身近な人を覚える目的から示された教師の顔写真を選ぶ活動を設定した。本生徒の好きな活動を選ぶ活動を段階的に行っていくことで、コミュニケーション力が向上し実際の場面での的確な意思表示ができるようになっていけばと思っている。		
今までの評価	前時の評価と反省	<ul style="list-style-type: none"> ・ 始まりの挨拶では、小さく「はい」と声を出すことができた。見学者が多いため少し緊張している様子だった。本時の説明では、タブレットPCの画面に触らないが意欲的に左手を動かす様子が見られた。 ・ タブレットPCを使つての教師の顔写真選びでは、画面をよく見て左右の手を動かす様子が見られたが、確実に顔写真を触ることができなかった。タブレットを使つての好きな活動選びは、①タブレットPCのゲーム②タブレットPCのゲーム③絵本を選びたい様子が見られた。不確かな左手の動きがあり、教師が左手の肘をサポートした。タブレットのゲームは左右の手が動いていた。 ・ 絵本の読み聞かせは、左手を使い教師と一緒にページをめくることができた。 	
	日常生活や各教科等での評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 朝の会では、呼名にタイミング良く左手を挙げることもあったが、自分の名前が呼ばれる時以外でも左手を挙げる場面が多く見られた。 ・ 課題別学習の授業では、タブレットPCのルーレット操作は、意欲的に上肢を動かす様子が見られた。 	
本時の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2枚の写真カードの中から呼ばれた教師の写真を左手で示すことができる。 ・ 2枚の写真カードの中から好きな活動を左手で選び、体験することができる。 		
時間	活動内容	留意点及び支援の方法	評価の視点
0分	○ 始まりの挨拶をする。	始まりを意識できるように言葉かけする。	間違えずに写真を選ぶことができたか。
1分	○ 本時の説明を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ タブレットPCを見やすく、手の届く位置に設置する。 ・ タブレットPCの写真で説明しながら、活動の流れを伝える。 	
4分	○ 2枚の顔写真の中から教師の写真を選ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> ・ タブレットPCを見やすく、手の届く位置に設置する。 ・ 教師の写真位置を確認させる。 	

<p>10分</p> <p>○2枚の写真カードの中から好きな活動を選び体験する。</p> <p>・選ぶ前に各活動の体験をする。</p> <p>①絵本（好きだと思われる物）と保冷剤（苦手だと思われる物）</p> <p>②絵本（好きだと思われる物）と団扇（苦手だと思われる物）</p> <p>③タブレットPCのゲーム（好きだと思われる物）とバルーン（苦手だと思われる物）</p> <p>18分</p> <p>20分</p>	<p>○2枚の写真カードの中から好きな活動を選び体験する。</p> <p>・選ぶ前に各活動の体験をする。</p> <p>①絵本（好きだと思われる物）と保冷剤（苦手だと思われる物）</p> <p>②絵本（好きだと思われる物）と団扇（苦手だと思われる物）</p> <p>③タブレットPCのゲーム（好きだと思われる物）とバルーン（苦手だと思われる物）</p> <p>○本時のまとめをする。</p> <p>○終わりの挨拶をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・姿勢に注意する。 ・写真カードを見やすく、手の届く位置で示す。 ・視覚的、聴覚的に働きかける。 ・状況に応じて左手の肘を軽く支えて、2枚の写真カードの間に肘がくるようにする。 ・選んだ活動を体験できることを伝える。 ・絵本「ねずみくんのチョコッキ」を読み聞かせる。 ・保冷剤は、生徒に直接触れないよう配慮する。 ・団扇の風は、適度に風が当たるように扇ぐ。 ・バルーンは、マットを敷いて姿勢等注意する。 ・バルーンを選んだ場合は、座位保持椅子から降ろし、介助する。 ・タブレットPCのゲームはタッチカードゲームを準備しておく。 ・頑張っていたことを評価する。 ・終わりを意識できるように言葉かけをする。 	<p>好きな活動を選ぶことができたか。</p> <p>写真カードの意味を理解し、選択できたか。</p>
<p>準備物</p>	<p>タブレットPC、保冷剤、団扇、バルーン、絵本、マット、写真カード</p>		
<p>本時の評価</p>	<p>始まりの挨拶は、笑顔で挨拶ができた。少し緊張していることもあり、発声はなかった。本時の説明では、左手を動かして教師と一緒に画面を触った。タブレットPCを使っの教師の顔写真選び1回目（左側）、2回目（左側）は、少し不確かながらも左手でタイミング良く呼ばれた教師の画面を触ることができた。3回目（右側）は、じっくり考えて左手で呼ばれた教師の画面を触ることができた。写真カードを使っの好きな活動選は、①保冷剤（右側）②絵本（左側）③バランスボール（右側）を選んだ。写真カードをよく見て左手を動かして選べた。保冷剤の冷たさやバランスボールの揺れは、びっくりしているようだった。絵本の読み聞かせは、左手を使い教師と一緒にページをめくることができた。終わりの挨拶が済むと、緊張が和らいで笑顔が見られた。</p>		
<p>支援の改善点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・活動内容の説明をもう少し詳しく説明する必要がある。（特に、2番目の好きなもの選びの部分。） ・タブレットPCの音が少し小さいため、生徒が分かりにくい様子が見られたので、音を聞き取りやすい大きさにする必要がある。 ・画面をよく見て写真を選ぶことができるように言葉かけが必要である。（生徒が画面を触ることに集中していたので） ・好きなもの選は、選ぶ前にもう一度、一緒に確認が必要である。 ・好きなもの選は、選んだものをもう少しじっくり楽しめるように、時間配分を考える必要がある。 ・発声が少なかったため、発声を促す言葉かけ、間が必要である。 		

② 授業評価（前期）

協議の内容	<p>ア タブレットPCで選択時、2枚の写真のどちらを選ぼうとしたのか分かりにくかった。 【タブレットでの写真提示について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タブレットでのカード表示は、2枚の写真の間隔が狭く、正確に選んでいるかの判断がしにくいように思える。写真カードの方がカードの間隔を調整しながら行えるのでよいのではないか。 <p>イ カードを見比べる時に本生徒にとっては大きめに感じた。 【提示するカードの大きさについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大きさは適切か。（提示する2枚のカードの間隔や生徒の左手の可動域を考慮して） <p>ウ 好きと思われるカードを選び、カードの意味を理解するためには同じ組み合わせのカードを繰り返し行った方がよいのでは。 【カード選びの活動回数】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・好きなカード選びに活用するカードは、同じ組み合わせで何回行うべきか。 ・課題の数は何組が適切か。 <p>エ 【予定カードについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・予定カードの提示位置は適切か。 <p>オ 眼鏡は学習時着用するようにしているが、裸眼では写真カードはよくみえているのか。 【眼鏡について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・眼鏡は着用すべきか。 <p>カ 【先生の顔写真選びについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カードの意味を理解させることが重要なので、先生の顔写真を選んだ後の結果が必要。
改善点及び次の授業に向けて	<p>ア【タブレットでのカード提示について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・確実にカードを選べるようになるまで写真カードで取り組んでいく。 <p>イ【提示するカードの大きさについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・適切なカードの大きさを探っていく。 <p>ウ【カード選びの活動回数】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・同じ組み合わせのカードで、繰り返し3回取り組んでいく。 ・課題は2組にする。カードの意味が理解できてくれば課題を増やす。それらを繰り返すことでカードの理解につなげていく。 <p>エ【予定カードについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・常に確認できる方法や位置で行う。 <p>オ【眼鏡について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カードをしっかりと見るためには、眼鏡を装着して学習する。 <p>カ【先生の顔写真選びについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・顔写真を、担当教師とその他の教師にして、担当教師のカードを選ぶことで一緒に勉強ができるという取組にする。



【好きな活動選びの提示用カード】

左：タブレットPCでのタッチゲーム

右：保冷剤

③ 自立活動学習指導案（後期）

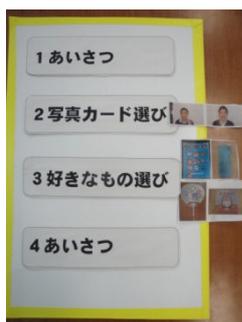
対象		L	
生徒の実態		<p>担当教師や友達に対して、発声や喃語で話しかけるような様子があり、1学期後半からは話しかける教師や友達が増えてきているように思われる。保健体育の授業を除いて眼鏡、体幹装具、補聴器を装用している。（補聴器は、2学期より装用している）授業の始まりや終わりに対して見通しを持っており、授業の終わりの挨拶が済むと安堵の表情を見せたり、上機嫌で大声を出したりすることが多く見られる。揺さぶりや大きな音、賑やかな場所が苦手で、1学期前半は手足をバタつかせて拒否しようとしたり、大声で泣いたりすることもあったが、1学期後半からは教師と一緒に気持ちを立て直し活動に向かえる場面が多くなってきているように思われる。</p>	
指導目標		<ul style="list-style-type: none"> ・カードを選択し、自分の気持ちを伝える（コミュニケーション） 	
活動内容の設定理由		<p>前期に比べて、呼名や質問に対して、左手を挙げたり、「はい」に似た発声でタイミング良く応えたりすることができるようになってきているが、確実なものとはなっていないように思われる。前回の授業でも、好きな活動や教師の顔写真を左手で選んでいるものの不確かな部分が見られ、もう少し継続して取り組む必要があるように思われた。本授業でも、2枚の写真カードの中から好きな活動を選ぶ課題と一緒に取り組みをする教師を選ぶ活動を繰り返し学習することで、生徒の内容理解の定着やコミュニケーション手段の獲得につながればと思っている。</p>	
今までの評価	前時の評価と反省	<p>授業の始まる前は、笑顔も見られていたが始まりの挨拶をすると少し緊張した表情になった。上肢も動かなかった。本時の説明は、教師と一緒に予定カードを触った。担当教師の写真カード選びは、2枚の写真をよく見ている様子だった。左手を動かして、担当教師の写真を左手で触ることができた。正解音（ピンポンの音）には少しびっくりしている表情だった。写真カードを活用しての好きな活動選びは、第1課題は①タブレットPCのゲーム②タブレットPCのゲーム③保冷剤の冷たさを選んだ。写真をよく見て左手を動かしていたが、前回と違いしっかりと触ることが少なかった。第2課題は①団扇の風②団扇の風③団扇の風を選んだ。第2課題も写真をよく見て左手を動かしていたが、2枚の写真の真ん中を触ることが多かった。本生徒に確認してみると、不思議そうな表情で「はい」と返事があった。</p>	
	日常生活や各教科等での評価	<p>朝の会では、教師からの呼名にタイミング良く左手を挙げ、「はい」と発声したりできることが徐々に増えてきている。終わりの会の1日の頑張りを発表する場面では、2枚の絵カードの中から左手を使って、自分の発表したい絵カードを正確に選べるようになってきている。音楽の授業では、自分が演奏したい楽器の音を聴き、意欲的に左手を挙げる場面が見られるようになってきた。休憩時間では、仲の良い友達に話しかけられると喃語や発声で応える様子が多く見られるようになってきた。排尿、排便の有無について教師が確認すると間違えずに「はい」と発声で応えられることが多くなってきた。</p>	
本時の目標		<ul style="list-style-type: none"> ・2枚の写真カードの中から呼ばれた教師の写真を左手で示すことができる。 ・2枚の写真カードの中から好きな活動を左手で選び体験することができる。 ・写真カードの意味を理解することができる。 	
時間	活動内容	留意点及び支援の方法	評価の視点
0分	○始まりの挨拶をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・眼鏡を装用して授業を受けるように説明する。 ・始まりを意識できるように言葉かけする。 ・予定カードで説明しながら、活動の流れを伝える。 ・教師の顔写真の位置を確認させる。 ・姿勢に注意する。 	
1分	○本時の説明を聞く。		

4分	○2枚の顔写真の中から担当教師の写真を選ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> ・間違えることなく選べるまで繰り返す。 ・状況に応じて左手の肘を軽く支えて、2枚の写真カードの間に肘がくるようにする。 ・選んだ教師と一緒に取り組むことを意識付ける。 ・正解の時は、ピンポンの音を鳴らす。 ・写真カードは見やすく、手の届く位置で示す。 	間違えずに写真を選ぶことができたか。
8分	<p>○2枚の写真カードの中から好きな活動を選び体験する。</p> <p>・選ぶ前に各活動の体験をする。</p> <p>①タブレットPCのゲーム(好きだと思われる物)と保冷剤(苦手だと思われる物)</p> <p>②絵本(好きだと思われる物)と団扇(苦手だと思われる物)</p> <p>○本時のまとめをする。</p> <p>○終わりの挨拶をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・視覚的、聴覚的に働きかける。 ・姿勢に注意する。 ・選んだ活動を体験できることを伝える。 ・同じカード選びを3回繰り返し設定する。 ・状況に応じて左手の肘を軽く支えて、2枚の写真カードの間に肘がくるようにする。 ・保冷剤は、生徒の体に直接触れないよう配慮する。 ・タブレットPCはタッチカードゲームを準備しておく。 ・団扇の風は、適度に風が当たるように扇ぐ。 ・絵本「あつたまろ」を読み聞かせする。 ・頑張ったことを評価する。 ・終わりを意識できるように言葉かけをする。 	<p>好きな活動を選ぶことができたか。</p> <p>写真カードの意味を理解し、選択できたか。</p>
18分 20分			
準備物	タブレットPC、保冷剤、団扇、絵本、写真カード、予定カード、台、効果音機		
本時の評価	<p>授業の始まる前に、眼鏡を装用するが左手で外そうとする。説明すると最後まで外さずに授業を受けることができた。始まりの挨拶は、前回よりも穏やかな表情で挨拶できた。本時の説明は、ホワイトボードや予定表をよく見ていた。担当教師の写真カード選びは、写真を見て思わず笑顔になるが、左手がなかなか動かない。左手の肘を少し介助することで左手が動き、担当教師の写真に触ることができた。正解音(ピンポンの音)は、少しびっくりしている表情だった。写真カードを活用しての好きな活動選び①(ゲーム(左)・保冷剤(右))は、1回目なかなか左手が動かないので、少し左手の肘を介助する。左手が動き、人差し指でゲームのカードに触れた。2回目は左手を動かして、しっかりとゲームの写真カードを掴むことができた。3回目は左手を動かして、保冷剤の写真カードを選ぶ。好きな活動選び②(団扇(左)・絵本(右))は、1回目、左手を右側まで動かして絵本の写真カードを掴むことができた。2回目は、左手の動きがはっきりしないので言葉かけすると、左手で団扇の写真カードに触ることができた。3回目、2、3度左手を上げるが写真カードに触るまではいかず、左手の肘を少し介助すると絵本の写真カードに触ることができた。前回同様、終わりの挨拶が済み、眼鏡を外すとにっこりと笑顔が見られた。</p>		

支援の改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が緊張し、発声も少なかったので、発声を促す言葉かけ、間が必要である。→カードを選んだ時などに生徒と確認する。 ・一緒に授業をする教師の意識付けについて、正解音（ピンポンの音）はどうだったのか？→別の効果音も検討する。 ・2枚の写真カードを提示するときの写真カードの間隔が近すぎていたため、生徒が選びにくかった。→もう少し間隔を開けて提示する。 ・横並びの写真カードを選ぶのが難しい場合や左手が動きにくい時の支援が必要である。→2枚の写真カードを縦に並べてみるなどいろいろ試してみる。 ・写真カードの大きさがもう少し小さくてもよいように思われる。 ・ゲームを選んだ後、ゲームを体験する部分の終わりがわかりにくいので終わりを明確にする必要がある。→ゲームを始める前に説明する。
--------	--

④ 授業評価まとめ（後期）

協議の内容	<p>ア カードを選ぶ時、自分の意思通りに触っているか判断しにくい様子が見られた。 【カードの提示位置について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カードを提示する際、好きと思われるカードを常に左に置くといったように固定した場所で提示するのではなく、ランダムに変えていった方がよいのではないか。 ・左右に並べての提示より上下に並べる提示のほうが選びやすいのではないか。 <p>【カードの大きさについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前期より小さくなっているが、もう少し小さいほうが選びやすいのではないか。 ・大きさを統一してはどうか。（普段の生活や授業で使うことも視野に入れて） <p>イ 3回目のカードを選ぶ活動で表情が曇り、左手が意欲的に動かなくなった。 【カード選びの活動回数について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カード選びの活動は2回でもいいのではないか。 <p>ウ 嫌いなものと思われるカードを何回も選んでいた。 【カードの種類について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現在使用しているもの以外に、好きだと思われるもの、嫌いなと思われるものについて探っていてもよいのではないか。 <p>エ 【予定カードについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動順に数字をつけてはどうか。 ・各教科でも、授業の内容提示時は、「はじまりのあいさつ」「おわりのあいさつ」を入れているので同じように提示した方がわかりやすいのではないか。（般化に向けて）
改善点及び次の授業に向けて	<p>ア【カードの提示位置について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・好きだと思われるカードの位置を固定せず、左右の提示位置を変えて取り組んでいく。 ・左右、上下の提示を試しながら選びやすい方法を探っていく。 ・生徒が見やすく手で触りやすいようにカードの間隔を変えながら取り組んでいく。 <p>【カードの大きさについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・選びやすい大きさを探りつつ取り組んでいく。 ・朝の会、終わりの会に使用しているサイズのカードを使って取り組み、適切なサイズを模索する。 <p>イ【カード選びの活動回数について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2回又は3回、生徒の集中力の状況に応じて取り組んでいく。 <p>ウ【カードの種類について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・好きなもの、嫌いなものについて、今と違う物にも取り組んでいく。 <p>エ【予定カードについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動順に数字をつける。 ・「はじまりのあいさつ」「おわりのあいさつ」を提示する。



改善した予定カード



好きな活動選びの提示用カード

⑤ 考察

中学部2ブロックでは、コミュニケーションにおいて言葉かけに表情や声を出す、視線を向ける、手を動かす、手を挙げる等の方法で「はい」「いいえ」を伝え、意思表示する生徒が大半である。その方法では意思を読み取ることが難しく、判断しにくい場合も多い。本生徒の実態から、自分の気持ちを伝える手段獲得の第一段階として、二者選択で一緒に学習する教師の顔写真や好きな活動のカードを左手で触って選ぶという取組を設定した。カードを選ぶことでその活動ができることを理解すれば、的確にカードを選ぶ意欲にもつながり、自分の意思を正しく伝えることができると考え、今回の授業実践を行った。授業内容は繰り返し取り組むことで理解の定着を図った。

授業改善を重ねることで、教材や環境が整理され、カードを見て選ぶ場面での集中力が高まってきている様子が見られた。特定のカードには強い意思をもってカードをしっかりと握んで選ぶことができつつあり、意思表示がはっきり現れる場面も増えてきた。また、好きな活動を的確に選んだ時は、笑顔でその活動に取り組んでいた。しかし、不随意に手が動き判断がしにくい場合や体調や意欲によって手の動きが分かりにくい時もあった。

この取組で生徒が見通しをもち落ち着いて取り組めるようになっていたり、カード選びへの集中力や意欲が高まってきたりしたことから、繰り返し取り組む事の必要性が確認できた。また、教材や学習環境の設定と本生徒が意思を正しく伝えるための適切なコミュニケーション手段との関係性が見えてきた。個別でじっくり取り組んだことも効果的であったと思われる。まだ不十分ではあるがカードを的確に選べる確率は上がってきている。

学習全般において、朝の会では呼名されると左手を挙げて返事をしたり、終わりの会では一日の中でがんばった教科のカードを選び、一日の頑張りを伝えられたりできるようになってきている。

自立活動の時間における指導では、今後も本生徒が落ち着いて取り組める環境を整え、カードの適切な大きさや提示位置・方法を探る等、教材についての研究を行いながらコミュニケーション手段の活用が向上するよう段階的に改善し、繰り返し取り組んでいきたい。また、これらの取組を軸に教育活動全般の様々な場面に拡げて行きたい。そのためには本生徒にかかわる教員全員が共通理解し、同じように繰り返し取り組んでいくことが必要である。

3. おわりに

中学部の「自立活動の時間における指導」の授業研究については、1ブロックについては各学年に分かれて3つの事例、2ブロックについては1つの事例を取り上げ、合わせて4つの事例をもとに授業改善の取り組みを行った。生徒の姿から、課題となる行動等の背景について、「なぜ」の視点を大切に仮説を立て、様々な仮説をもとに意見交換しながら検討を進めることができた。そのように取り組む事で、生徒の実態把握についても多面的に行うことができ、より具体的な指導目標、指導内容、支援方法等について、教員間で共通理解を深めて指導にあたることができた。

1ブロック1年生では、不安感や緊張を感じた時にパニックを起こしたり、教室を出ようとする事で困り感を表していた生徒の実態から「心理的な安定」を目標にした。見通しを持つことで落ち着いて課題に取り組めるようにするために、同じ課題を繰り返し行い、集中して取り組める机上の作業課題を行った。できたことの達成感を感じることで落ち着いて授業に取り組めるようになった。また、問題解決の手段として教師に助けを求められるようになり、困った気持ちを伝えて分かってもらったことや教師に手伝ってもらいながら課題を達成できたことで心理的にも安定するようになった。生徒に応じて学習集団をクラスから小集団または個別指導にするなど、落ち着いて課題に取り組める環境設定を行った。

1ブロック2年生では教師間で生徒理解と指導について共通理解を図り、カルタ作りを通して「人間関係の形成」を目標に課題となった場面とそれに対する適切な対処方法を考えた。個別指導で教師とともに対処方法を考える授業形態で取り組んだ。自分の思いと適切な対処方法との折り合いをつける課題では生徒の思いを受け止めて、教師が一步譲ると別の対処方法を考えることができるようになり、対処方法に納得すると適切な行動を心がけるようになってきた。障害による認知特性や物事をどうとらえているかを教師が理解しながら授業を改善することで、生徒が抱える対人関係の課題に迫り、その課題を解決するための対処方法を考えることができるようになってきている。

1ブロック3年生では「心理的な安定」を目標に、リラックスできる方法を自己選択し自己決定する授業を行った。心理的な緊張が強く、緊張が高まるとジャンプして身体的な緊張を緩めている場面が見られたので、学年の教師間での生徒理解とともに、抽出自立活動担当（心理的な安定・環境の把握）とも連携して授業改善を行った。バルーンやマッサージなどリラックスできる方法を自己選択する授業を通して心理的に安定できる場面が増えたことや日常生活の中でも自分からリラックスしたい意思を伝えて、教師に受け止めてもらったことで、より情緒が安定する場面がみられるようになった。

2ブロックでは挙手や返事などで教師に意思を伝えようとする生徒の実態から「コミュニケーション」を目標に、カードの自己選択による意思伝達の授業を行った。生徒の見え方や身体的な特性を考えながら環境設定や教材を改善し、同じ課題を繰り返し行うことで課題に対する理解を深め、活動の見通しを持ち、落ち着いて取り組むことができた。好きな活動と苦手な活動の二者選択で、強い意志を持ってカードを選択する場面が見られ、コミュニケーションのための意思伝達手段を獲得していく様子が見られた。

中学部全体で、1ブロック各学年、2ブロックのそれぞれの授業についての話し合い、意見交換することを通して、中学部全体で以下の点について確認できた。

(1) 実態把握

授業作りにおいて、生徒の実態把握が重要である。実態把握を的確に行うことで、生徒の教育的ニーズを達成するための目標を立て、授業を行うことができる。今回の授業研究では、実態把握を行うためのツールとして、本校独自の実態把握チェックシートを活用した。自立活動の6区分26項目のすべての視点から生徒の実態を確認することができた。1ブロック各学年・2ブロックで生徒一人一人の実態を確認し、教師間で共通認識をもつこともできた。授業を行っていく中で生徒の実態は変化していくが、再度実態把握を行い、今の実態に合った目標を立てて授業改善を行うことが大切である。自立活動に関する個別の指導計画（様式2）の実態の内容と目標との整合性を確認することによって、生徒にとって一番必要な教育的ニーズを見いだすことができた。

(2) 授業改善方法（PDCA サイクル）

今回の授業研究では、(Plan) 生徒の実態把握から指導目標を立て取り組む内容・方法を考え、(Do) 実践をし、(Check) 授業評価を行い、(Action) 授業評価によって改善した授業を行った。1ブロック各学年、2ブロックの四つの教師集団で前期、後期の2回、改善内容を協議しながら生徒の実態に応じた授業作りに取り組んだ。授業評価は、ビデオ視聴しながら良い点（ピンク）、改善が必要な点（ブルー）を色分けして付箋に記入し、KJ法を用いて行った。8つのカテゴリー（教師の発問、教師の指導・支援、子どもの発音・つぶやき、子どもの表情、子どもの行動、環境設定、教材・教具、その他）に分け付箋を貼り、改善点の付箋（ブルー）が多いカテゴリー中心に協議した。カテゴリーどうしの関連性が視覚的に分かりやすく、協議の視点をしぼりながら話し合うことができた。また、自分の貼った付箋について説明することで、一人一人の意見が反映され、改善策を共通認識できた。後期の授業では、教材の工夫、言葉かけの仕方やタイミング、環境設定等の改善点が見られ、生徒の授業における集中力や意欲の向上がみられた。日常生活の中では授業に落ち着いて取り組めたり、自分の気持ちを伝えようとしたりするような変化が見られた。PDCA サイクルで授業改善を行っていくことで、生徒の教育的ニーズにより迫ることができた。

(3) 指導形態、指導体制、指導時間の工夫

全ての生徒に対して必要な「自立活動の時間における指導」の時間を確保し、効果的な指導を行うには、どのような指導形態で、どのような指導体制で、どのような時間で行うかを柔軟に考えることが必要である。

指導形態については、生徒の実態を把握している担任教師による個別指導を基本とすることに

よって、より個々の教育的ニーズに迫った指導が可能になり、より効果的な指導を行うことができた。また、個別指導を基本としながらも、個々の目標を明確にしたうえで、ロールプレイや集団討議など必要に応じて集団指導を取り入れていくことも視野に入れて考えていきたい。

指導時間の工夫については、例えば、生活リズムの乱れが課題となっている生徒には、登校後すぐの時間で個別に抽出し指導を行うことや、自立活動の時間における指導の時間と課題別学習の中で個別課題に取り組む時間との時間割の入れ替えを行い、担任一人が一人の生徒にマンツーマンで自立活動の時間における指導をしている裏で、他の生徒はもう一人の担任の指導のもとに課題別学習の個別課題に取り組むことにするなど、柔軟な指導時間の工夫などが考えられる。これらの指導形態、指導時間の工夫により、教師の指導体制を整えることができると思われる。

(4) 教員間の共通認識

今回、授業研究した生徒については、自立活動の時間における指導の研究を通して学年での話し合いを重ね、教員間で共通認識を持ち指導を実施した。自立活動の時間における指導と並行して、教師全員が共通認識を持って、教育活動全般において生徒にかかわることで、般化にむけてより効果的な指導を実施することができた。

今年度の研究を終えて、中学部全体として上記4点をはじめ、授業づくりの視点で様々なことを教員間で共通認識を深めることができた。よりよい授業づくりのために今後も課題を明確にしながらか改善していきたいと考える。

高等部

1. はじめに

本校には知的障害学級（以下1ブロック）、肢体不自由学級（以下2ブロック）がある。高等部では、1ブロックの重複学級を教育課程Ⅱ、普通学級を教育課程Ⅲ、2ブロックを教育課程Ⅰとし、学級、学年集団を基礎に置きながらも、各教科においては縦割りの学習集団を形成して日々の実践に取り組んでいる。

各教育課程（ⅠⅡⅢ）の日課表における「自立活動の時間における指導」については、以下のようになっている。

	月	火	水	木	金
1	自立活動（教Ⅰ）	自立活動（教Ⅰ）	自立活動（教Ⅰ）	自立活動（教Ⅰ）	自立活動（教Ⅰ）
2					
3					
4		自立活動（教Ⅱ）		自立活動（教Ⅱ）	
5	自立活動（教Ⅰ）		自立活動（教Ⅰ）		
6	自立活動（教Ⅰ）	自立活動（教Ⅲ）			
7					

「自立活動の時間における指導」について、教育課程Ⅰでは「健康の保持」「身体の動き」をねらいにおいた朝の1限と、他の区分に迫る時間として（月）の5、6限を、教育課程Ⅱは（火）（木）の4限、教育課程Ⅲは（火）の6限に設定している。また、個別での指導がより効果的なケースに対応するため、教育課程Ⅱでは（火）から（金）の1限目の課題別学習、教育課程Ⅲでは（火）7限の課題別学習との柔軟な入れ替えにより、同じ時間帯、教室での個別対応の自立活動と生徒自身で学習を進める課題別学習の並行を実践している。

高等部においても、障害の重度・重複化、発達障害を含む多様な障害に対応し、生徒一人一人に応じた指導・支援を充実させるために、本校独自の自立活動の個別の指導計画や自立活動学習指導案を作成し、日々の授業実践に役立てている。今回の報告は、その授業実践の中で、各ブロック・各学年（4集団）でテーマを掲げ、各々で研究を進めてきたものをまとめている。

1年生は地域の中学校から入学してきた、適応上の問題がある生徒の「感情のコントロール・感情の自己認知」すなわち「心理的な安定」に着目している。2年生は「自閉症の生徒の場面に適した言葉の使用」2ブロックは「発音が不明瞭な生徒の言葉の代替手段の活用」について研究をまとめている。どちらも「コミュニケーション」の手段としての言葉に注目したところは共通している。3年生は「人間関係の形成」をねらいにおいているが、特に卒業を控え、社会人として働き、暮らしていく生活を間近に控えていることを意識し、今まで培ってきた能力を発揮して、小集団活動の中で場に応じた適切な行動がとれているかに注目している。

2. 授業研究

(1) 高等部1ブロック1年

① 自立活動学習指導案（前期）

対 象		M	
生徒の実態		教師や友達に気遣う言葉をかけることや状況を考えて行動することができるが、担任や友達の気持ちを独占したり、友達の言動に気持ちが左右されやすい。気持ちが不安定になると怒ったり泣いたりして、授業にも参加できなくなる。また、様々な想いを自分では整理できず、不適切な行動として現れる。	
指導目標		感情をコントロールできる。（心理的な安定）	
活動（単元）内容の設定理由		感情のコントロールの指導には、「感情語の理解」、「感情の自己認知」、「感情への対処法」といった段階がある。「感情語の理解」を深めつつ、今回は「感情の自己認知」に取り組む。感情は出来事によって強さの度合いが違うことを理解し、強さの度合いに応じた対処法を考える学習へとつなげたい。卒業後を見据えて、いろいろな気持ちを抱えながらも自分で気持ちを切り替え、そのときにすべきことをきちんとできる人になって欲しいと考え、単元を設定した。	
今までの評価	前時の評価と反省	『ハッピー』や『イライラ』を感じる出来事、そのときに言いたくなることやしたくなる行動を振り返り、ワークシートに書いた。『ハッピー』も『イライラ』も出来事を4つずつ書いていた。どちらの感情に関しても共感を求めるように話すことができた。 本生徒の課題となっている学校を欠席することや授業に参加できなくなるという行動について振り返りたかったが、理由となる、そのときの発言や友達に言われてつらかった言葉等を引き出すことができなかった。	
	日常生活や各教科等の中での評価	感情マップ作りでは、自分が出した感情語だけでなく、他生徒が発表した感情語についても「楽しいはハッピーに似ている。」と言ってカードを近くに置き、仲間分けできた。 イライラしたときに言いたくなる言葉を話し合っている中で、怒りの度合いを表す言葉（おこー激おこームカ着火ファイヤー…）があることを教えてくれ、後日ネットで詳しく調べてきた。そのメモを見ながら、「今は〇〇やわ」と言いながら、何についてイライラしているのか、担任に話すことができた。 しかし、日常生活で怒ったときには壁をなぐってしまうことがあり、感情をコントロールすることがまだ難しい。	
本時の目標		感情は出来事によって、強さの度合いが違うことを理解できる。	
時 間	活 動 内 容	留意点及び支援の方法	評価の視点
導入5分	①本時の目標を知る。		
展開15分	②感情の温度計を使って、感情の強さの度合いを数値や言葉で表す。 ③〇〇のハッピーは、レベル何？ ・レベルを考える。→ワークシートをする。 ④〇〇のイライラは、レベル何？ ・レベルを考える→ワークシートをする。	・感情の温度計をミニボードに貼り、感情の強さの度合いと数の関係を説明する。数ではイメージしにくい場合を考え、言葉のガイドも付ける。 ・『ハッピー』や『イライラ』の場面は、本生徒の体験を取り上げる。 ・ミニボードを使って、出来事ごとにレベルを確認する。 ・ワークシートは、今回取り組む項目をマーカーで囲んでおく。	・『ハッピー』な出来事について感情の強さの度合いを数値で表せる。 ・『イライラ』を感じる出来事について感情の強さの度合いを数値で表せる。 ・レベル1～10のそれぞれでどんな行動をしたくなるか言える。
まとめ5分	⑤本時を振り返る。 ・レベルによって、どんな行動をしたくなるか考える。 ⑥次時へ見通しをもつ。	・次回、『イライラ』の対処法を考えることを伝える。	
準備物	ワークシート、感情の温度計、ミニボード、出来事カード		

本時の評価	<p>参観者やビデオ撮影がプレッシャーとなっていたが、授業が始まると課題に集中し、真剣に取り組むことができた。</p> <p>感情の温度計にも興味を持ち、自分で操作していた。度合いを表す1～10の数に、“ぜんぜん・ちよっと・まあまあ・けっこう・かなり”という言葉に対応させるとき、“まあまあ”を真ん中に置くことでそれを基準にして数値に応じた言葉を並べることができた。</p> <p>『ハッピー』でも『イライラ』でも感情の強さに違いがあることを理解し、強さの度合いを数値で表すことができた。『イライラ』の出来事は、前時で本生徒が取り上げたことを4つと日常生活において本生徒がよく怒っているが、取り上げなかったことを2つ用意した。項目数は6つと多かったが、一つ一つ真摯に向き合い考えることができた。『イライラ』の出来事で、「けんか」という項目を見せると、「けんかにもいろいろあるからなあ」と発言があったので、相手を設定するように提案すると、最近、仲が良くない友達の名前をあげ『イライラ』の度合いを答えることができた。しかし、『イライラ』の解消法は、すべて「壁を殴ること」と答えていた。</p> <p>本時の目標は、本生徒にとって新しい学びというより、普段話し合ってきたことを整理し、授業として段階的に学ぶというものであった。</p>
支援の改善点	<p>『イライラ』のときにしたくなる行動に、「壁を殴る」、「くやし泣き」と書いており、実際の日常生活においても怒っているときには、拳にあざができるほど壁を殴ったり、授業に参加できなくなったりする等の行動がみられる。担任が話を聞くことで、気持ちが安定して切り換えられるが、自分で気持ちを立て直すことが難しく、『イライラ』したときは、自分を傷つける以外に解決方法がないと言っている。</p> <p>また、本生徒が持つ「しんどさ」として、常に自分に好意的に接してくれる相手がいないと気持ちを安定させられないところがある。感情の学習では、“不安”や“心配”という言葉が出てきていないが、この部分からくる『イライラ』が多いと考えられる。そこで、今後は、『イライラ』に関してどこからくるのか？強さの度合いが違うのはなぜか？根底にある本生徒の“不安”にせまるとともに、「感情への対処法」に取り組んでいきたい。</p>

② 授業評価まとめ（前期）

ア 協議内容

○授業者の反省より

- ・『ハッピー』でも『イライラ』でも感情の強さに違いがあることを理解し、強さの度合いを数値で表すことができたが、『イライラ』の解消法は、すべて「壁をなぐること」と答えていた。根底にある本生徒の“不安”にせまるとともに、「感情への対処法」に取り組んでいきたい。

○K J法及び他学部からの意見より

- ・温度計の目盛りを操作することで気持ちのレベルが視覚的にわかりやすく、ワークシートに記入することにより客観的に感情を見つめることができた。
- ・ハッピーとイライラの温度計の色を変える。
- ・教師との人間関係は良好であり、良い雰囲気の中で進められていたため、生徒の自発的な発言が多く見られた。
- ・もっと話をしたい様子が見られたので、この授業のように担任と2人で過ごす時間が大切であると考えられる。
- ・教師は生徒に同調する立場と教師として生徒の行動を指導する立場の両面をとる必要がある。
- ・机をはさんで教師と正面で向き合っていたが、恥ずかしいため顔を上げにくい場合もあるので90° くらいの位置に座った方がよいと考えられる。

- ・「壁を殴る」という行為をどう捉えるのか（教師に対する自己アピールか、ストレス解消になっているのか、嫌な気持ちになっているのか）。

イ 改善点及び次の授業に向けて

- キーワードとして「自己理解」があげられ、そのための具体的な取り組みとして以下のような方法が出された。
- ・自分を傷つける以外の対処法（例えば、イライラした気持ちをその相手に伝える等）を教師と一緒にとることができたら、次に同じことが起こったときに前回よりも少し落ち着いて対応できると考えられるので、教師と一緒に対処法を試してみる。
- ・生徒自身が良い解決方法を見つけるために、教師が具体的に悩んでいる場面を想定し、質問（相談）を生徒に行い、答えさせる。（生徒がカウンセラーとなり自分自身を客観的に捉えるチャンスを与える）
- ・同じような悩みがある同性の友達と関わる機会を増やす。
- ・生徒に自分自身の言動を振り返る機会を与えるとともに、友達が本生徒の言動をどのように捉えているのかということや将来の自分の様子を考えさせる。
- ・生徒にとって具体的な“不安”の場面を文章で表したり、教師が生徒にとっての“不安”を見つけたりして具体的に手立てを考える。
- ・何か出来事があったからイライラする場合もあるが、体調面等や原因がわからずイライラしたり不安定になったりすることも知る必要があるのでは。
- ・感情のコントロールに対する他者の対応策を知り、考えたり学んだりする。

③ 自立活動学習指導案（後期）

対 象	M
生徒の実態	<p>担任やクラスメイトといるときには、冗談を言ったり、自分から話しかけたりできる。しかし、大きな集団に参加することや慣れない相手と話すことが苦手で、自分の気持ちを言えずにイライラしたり、不安になったりする。気持ちが不安定になり授業に参加できなくなることはなくなったが、対人関係において不安が強く、安心できる相手や環境づくりが必要である。</p> <p>イライラの度合いが大きくなると言葉で伝えるのではなく、物にあたることや自分の身を傷つける行動としてあらわれる。担任が気持ちに沿いながら聞き取ると、イライラの原因について話すことができるが、自分で気持ちをコントロールして対処することは難しい。</p>
指導目標	感情をコントロールできる。（心理的な安定）
活動（単元）内容 の設定理由	<p>「感情の自己認知」に関する指導の結果、イライラする感情は、強さの度合いに違いがあることを理解できた。イライラする感情は体調、対人関係、不安等、様々な要因から生じるということがわかり、自分はどんなことにイライラするのか客観的にみることができた。そのため、今回は「感情への対処法」に取り組む。イライラするときの対処法を自分で考えることや他の人の対処法を知ること、適切な行動を選択し、自分で対処できるようになって欲しいと考え、この単元を設定した。現段階では集団で授業を行うよりも、本生徒にじっくりとかかわった方がよいと考え、個別指導を行った。</p>

今までの評価	前時の評価と反省	身近な教師や同世代の人達のイライラの原因がたくさんあることを知り、共感することができていた。特にイライラの原因について“不安”があるということも理解できていた。自分はどんなことにイライラするのか他の人と比べながら客観的にみることができたが、対処法については、「物にあたるしかない」という回答であった。		
	日常生活や各教科等の中で の評価	イライラしているときに、強さの度合いを聞くと、「激おこブンブンまる」や「超新星…」と、違いを自分なりの言葉で表現して伝えられようになった。担任にイライラしている原因を話すことで、気持ちを落ち着かせることができる。		
本時の目標		イライラする感情に対して、適切な対処法を理解する。		
時間	活動内容	留意点及び支援の方法		評価の視点
導入5分	①前回を振り返る。 本時の目標を知る。	・新たにイライラしたことを話し始めたら、出来事カードに加える。		<ul style="list-style-type: none"> ・イライラしたときにしてしまう行動を振り返ることができる。 ・上記の行動以外でイライラの対処法を言える。 ・「Good」と「Bad」に適切に仕分けすることができる。 ・「Bad」になる理由を理解できる。 ・「Bad」な行動が他者からどうみられるか理解できる。
展開20分	②イライラしたときにしてしまう行動をカードに書く。	・出た意見は全てカードに書く。		
	③対処法を考える	・ワークシートを提示する。		
	④②で出た意見を「Good」と「Bad」に仕分けする。 ・Goodな対処法の見出しを考える。表情イラストを描く。 ・Badな対処法の見出しを考える。表情イラストを描く。	<ul style="list-style-type: none"> ・気持ちが乗りやすいように「Good」や「Bad」を表す本生徒らしい言葉を考えさせる。 ・「Good」と「Bad」は、どういう視点で分けるか具体的に伝える。 		
まとめ5分	⑤②で考えた対処法と前回紹介した対処法を仕分けする。	<ul style="list-style-type: none"> ・本生徒の考えた対処法だけではバリエーションが少ないことが予想されるので、身近な先生達が行っている対処法9個も加える。 ・なぜやってはいけないのかも短い言葉でわかりやすく伝える。 		
	⑥本時を振り返る。			
準備物	ワークシート、出来事カード、ミニボード、解決法を書くカード			
本時の評価	<p>“気持ちの学習”をすることに関して、見通しを持っており、落ち着いて取り組むことができていた。イライラしたときにしてしまう行動を「悔しくて泣く」、「壁を殴る」、「物を放る」と振り返ることができていた。対処法を問うと「歌を歌う」、「絵を描く」、「飼い犬と遊ぶ」と自分の生活の中から答えることができた。対処法を「Good」と「Bad」に分ける視点も理解でき、自分の考えた対処法と教師がしている対処法について理由を言いながら適切に分けることができた。しかし、「物を放る」ことに関しては、「Good」に入れていた。教師に「物を放る」ことは「Bad」であると言われることについて理解はしているが、これをしないと気が済まないという意見であった。授業者がイラストを描いて、「物を放る」という行動をとることで、周りの人がどう感じるか説明したが、周りがどう思っても関係ない、自分の対処法であると自分の主張を変えなかった。教師とのやりとりで「物を放る」はダメなことだと教師が「Bad」に仕分けすると、これからの自分の対処法として「じゃ、スポーツすることと飼い犬と遊ぶことにする」と「Good」の中から選んだ。</p>			

支援の改善点	<p>自立活動の時間において、感情のコントロールの指導を「感情語の理解」「感情の自己認知」「感情への対処法」と段階的に取り組むことで、自分の気持ちや行動について客観的に考えることができた。教材やワークシートを使うことを介してやりとりが深まった。</p> <p>入学して新たな人間関係を築くのに、時間がかかり、不安も大きかったが、安心できる人や場が増えることで、落ち着いて学校生活を過ごせるようになってきた。</p> <p>今回の授業は、担任と一対一で取り組む学習であり、自分の気持ちを言えたり、担任の意見を受け入れることができたりしたが、卒業後を見据えて、自分で感情をコントロールできるようになって欲しい。</p> <p>今後は、自分の気持ちを適切な行動で伝えたり、相手の気持ちや行動を受け止めて気持ちを切り換えたりできるようになることや人間関係を築く上でしんどいときや困ったときの対処法等を指導していきたい。主体的に取り組める学習環境づくりや「見てわかる」、「何度も振り返ることができる」教材づくりを大切にしながら、計画的に指導していきたい。</p>
--------	--

④ 授業評価まとめ（後期）

ア 協議内容

○授業者の反省より

- ・最終的にはストレス解消法として「G o o d」の対処法を選択したが、実際の生活場面への般化は、まだ難しいので引き続き指導が必要である。
- ・本生徒にとっては、「G o o d」の対処法であっても、他人から見たときに「B a d」の対処法になる場合があることを理解する必要がある。

○K J法の意見より

- ・教師と生徒の関係が近くなっていた。
- ・イライラすることが悪いことではなく、そのときにどのようにしたら良いかを丁寧に確認できていた。
- ・周囲の人の気持ちや思いを考えさせるためにイラストを使ったのでわかりやすかった。
- ・生徒の思いを受け止めながらも教師の思い（譲れないところ）を伝えることができていた。
- ・「G o o d」と「B a d」に分類したり、カードの提示をわかりやすくしたりすることで理解しやすく今後も確認しやすい。
- ・良くない対処法について、自分なりに考え、言語化することができていた。
- ・生徒が「G o o d」と「B a d」の見出しや表情のイラストを自分自身で描くことで主体的に授業にのぞむことができていた。
- ・身近な先生の解消法を紹介することで気持ちが楽になったり、第三者的（客観的）に考えたり、楽しんだりしながら取り組めていたので、自分の好きなことや落ち着くことを行うことで気持ちが切り替わるということを説明に入れてはどうか。

イ 改善点及び次の授業に向けて

- ・「先生はわかっているつもり」、「先生は聞いてくれるだけ」という発言があったので、さらにじっくりと話を聞く時間が必要である。
- ・現段階では「物を放る」、「壁を殴る」といった行動はやってはいけないということを、

納得するのが難しいため、少しずつストレスを吐き出していくと楽であるという気持ちを持てるようにした方が良いのでは。

- ・結局は自分の視点や見方、枠組みなどを変えて自分で解決していかなければならないので、見方や視点の多様性に触れる経験や活動を増やす。
- ・たくさんの対処法が挙げられたので、今後一つずつ試して見てはどうか。
- ・「痛みを受けて欲しくない」、「イライラしていたら心配」というように「本当に心配してくれる人の存在」と「その人の気持ち」に気づくような活動や経験が必要である。
- ・公共の場やみんなと過ごす場面等での過ごし方のスキルを高める。
- ・「壁を殴る」と「絵を描く」ことではイライラを解消できる（スッキリする）程度がちがうと思うので確認してはどうか。
- ・「壁を殴る」＝「痛みが解決に向かう」のはなぜかを考える。
- ・今後の授業展開としては引き続きキーパーソン（教員）と行うという展開と友達の意見を聞きながら集団で行う展開が考えられる。

⑤ 考察

地域の中学校から特別支援学校に入学した生徒は二次障害が生じていたり、不適応状態になったりしていることが多い。適応上の問題としては、ひきこもり、身体的訴え、不安等の内向的な行動に表れる生徒や暴力、暴言、万引き等の外向的な行動に表れる生徒がいる。本生徒に関しては、「授業に参加できなくなる」という行動や「不安が高い」等の内向的な面に対する課題や「壁を殴る」という自傷行為や「物を放る」という問題行動があった。

そこで、「感情をコントロールできる」ことを指導目標にし、「感情語の理解」、「感情の自己認知」、「感情への対処法」へと理解を深めていった。本生徒に関しては大きく変化も見られ、気持ちが不安定になり、集団に参加できなくなることはなくなった。イライラの原因はいろいろあるということは理解できたが、その原因の一つである“不安”への対処は、まだ難しい。イライラしたときの対処法として「物を放る」、「壁を殴る」という問題行動に関してもかなり減ったが、継続した指導は必要であると考えられる。

授業評価では大切な点として、「自己理解」、「実態把握」、「視覚支援」、「教師との人間関係と個別指導」等が挙げられた。本生徒のような適応上の問題がある生徒の指導に関しては、自己を客観的に見るのが難しいため、多くの教員が「自己理解」の指導が必要であると考えていた。「実態把握」に関しては、研修を深める中で担任のみではなく多くの教員から話を聞き、多角的に捉えることができた。また、実態はすぐに変ってしまうこともあるため、繰り返し実態把握を行う必要があることも確認された。「視覚支援」については生徒が理解しやすくなるだけでなく、授業者も整理して考えられるため有効であった。「個別指導」に関しては、通常、問題行動が起こった場合のみに行われることが多いため、生徒には「個別指導＝叱られる」というイメージが付きがちである。しかし、自立活動の「時間の指導」があることで系統

的に計画的に個別指導できる時間が設定できた。本生徒が「気持ちの勉強はしないの」と発言する等、担任との自立活動の授業を楽しみにしている様子も見られた。引き続き個別指導が必要であるという意見も多く、適応上の問題がある生徒にとって教師との人間関係と個別指導は大切である。また、今回は設定できなかったが、今後は友達との集団活動の中で「自己理解」を進めてはどうかという提案も多くあった。繰り返し、変化する実態把握に努め、個別指導と集団指導を効果的に使っていくことが大切である。

(2) 高等部1ブロック2年生

① 自立活動学習指導案（前期）

対象	N
生徒の実態	<p>本生徒は何事にも意欲的で、まじめに取り組もうとする。クラスの仕事や発表などにも積極的に、「手洗いや液がなくなった」「まだそろっていない友達がいる」等、周囲の状況についても少しずつ気を配ることができるようになってきている。また、友達が注意されているのを見てその行動をしなくなる等、他者の言動から適切な行動を身に付ける「観察学習」もできている。</p> <p>自閉を伴う広汎性発達障害と診断を受けていることもあり、対人関係においての課題が大きい。友達からのかかわりは、ある程度受け入れることができるが、自分からかかわろうとすることは少ない。簡単な会話はするが、じっくりとやりとりしたり遊んだりするところまでの深まりまではみられない。また、友達とかかわりたいという思いがあるときも、直接相手に話しかけるのではなく、教師等のそばにいる大人を介することがほとんどである。</p> <p>かかわりの深い教師には積極的に話しかけるが、決まったパターンのもので一方的なものが多い。会話の内容も、自分が確信を持っていないことや予定の変更についての確認等がほとんどで、繰り返し話すことで情緒の安定を図っているところがあり、会話を発展させることは難しい。また、教師からの問いかけに対しては、質問の意図が理解できず、教師の質問を繰り返したり観点がずれたり、適切な返答にならないことがある。特に課題となるのは、「客体と主体を取り違えて表現する」「問いかけとは異なる自分が気になることを発言する」「場面に適さない声の大きさで話す」などである。</p> <p>また、「好き」「楽しい」「嫌」といった感情は言葉とつながり表現できるが、自分からの発言の中で気持ちを表現する言葉はほとんど出てこない。自分の意思是っかり持っていて、相手に伝えたいという思いはあるものの、なかなか上手く表現できず、的確に伝えられていない。複雑な感情の理解は難しいところもあり、気持ちを表現する語彙数もまだまだ少ないのが現状である。</p>
指導目標	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の要求や気持ちを適切に伝えられるようになる。 ・問いかけに応じた返答ができるようになる。(人間関係の形成、コミュニケーション)
活動(単元)内容の設定理由	<p>自分からの発言では、「もらってくる。」「呼んでくる。」などと、正しい表現で伝えることができる。しかし、「Nくん、～してくれる?」と他者から依頼されたことについては、「分かった!～してくれる!」と、客体と主体を取り違えた表現をする場面が多く見られる。会話の内容は理解できているが、問いかけに応じた返答ができていないのが現状である。</p> <p>社会に出ると、多くの人とかかわり、更に人間関係が広がることとなる。家庭や学校では、周囲が本生徒の意図を汲み取ることができるが、初めてかかわる人にはなかなか伝わりにくい。問いかけに応じた返答ができるようになることは、本生徒が円滑な人間関係を築いてくのに大切な力となると考えられる。</p> <p>本生徒は一度「こんなときはこうすべきである」とパターンで理解できると、確実に行動に移すことができる。そのことから、言葉のやりとりをパターン化し、繰り返し練習することにより適切な表現が身につくであろうと考えられる。また、生活の中で起こりうる様々な場面を設定し、実際そのやりとりをやってみることで、日常生活の中でも使えるようになると考え、本単元を設定した。</p> <p>本生徒は周りに影響されやすく、自分が正しいと思っていることでも自信が持てていないと、他の意見に流されてしまうところがある。また、たくさんの人の中では発問や発言が自分に向けられているものにとらえにくく、相手の話を集中して聞くことが難しいところもある。相手の話をしっかりと聞き、落ち着いて考え、自分自身で答えを導くことができるよう、教師と1対1の静かな環境下で取り組むことにした。</p>
今までの評	<p>教師と自分との関係において、「頼んでいる人」(主体)については即座に理解できるが、その逆の立場(客体)については、一つ一つ確認をしながら考えないと捉えにくかった。繰り返し取り組むことにより定着がねえらえると考えられる。</p> <p>また、学校生活での実際の会話を例に挙げる中で、自分の言葉では上手く表現できないものの、どちらが正しくてどちらが間違っているかは理解できていた。</p>

価	日常生活 の中での 評価	学級活動や給食の時間では、自分の行動に対して「～してくれる。」と表現してしまうことがまだまだ多い。「それでいい？」と問いかけることで、「違う。～する。」と訂正できることも少しずつ増えてきた。		
本時の目標	<ul style="list-style-type: none"> 『頼んでいる人』『頼まれてする人』の立場を正しくとらえられる。 客体と主体を正しくとらえた表現と、取り違えた表現の両方を見聞きし、どちらが正しくてどちらが間違った表現をしているかを正しく判断する。 			
時間	活動内容	留意点及び支援の方法	評価の視点	
導入5分	<ul style="list-style-type: none"> はじまりの挨拶 学習のめあての確認 	<ul style="list-style-type: none"> 聞かれたことに合った答え方ができるようになる。 「相手に伝わるように話す」のが課題であることを説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> 活動の目当てを意識できる。 本時の活動のねらいが理解できる。 	
展開35分	<ul style="list-style-type: none"> 本時の活動について ○ 客体と主体を正しくとらえた表現と、取り違えた表現の両方を見聞きし、どちらが正しいか考える。 ◆ 「Nくん、終わりの会始まるから○くん呼んできてくれる？」 『分かった。呼んでくる。』 『分かった。呼んできてくれる。』 ◆ 「Nくん、水やりしてきてくれる？」 『水やり、してくる。』 『水やり、してきてくれる。』 ◆ 「Nくん、味噌汁入れてくれる？」 『味噌汁、入れてくれる。』 『味噌汁、入れる。』 ワークシートに取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校生活における具体的なやりとりを提示する。 正しい方に○、間違っていると 思う方に×のカードを貼るよう にする。 『頼む人』 …～してきてくれる？ 『頼まれてする人』 … ～する という表現について丁寧に 確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 問いかけに応じた答えについて、正しく選択できるか。 	
まとめ5分	<ul style="list-style-type: none"> 本時のまとめ おわりの挨拶 			
準備物	主体・客体に関する白板提示用教材（やりとりしている会話の吹き出し、人型、○×カード）、ワークシート			
本時の評価	<p>主体と客体についての質問に、正しく答えることができていた。本生徒のもう一つの課題である「じっくり聞き取って考える」「落ち着いて答える」ことについても、本時は達成できていたように思われる。</p> <p>しかし、「頼んでいる人」「頼まれてする人」の立場をとらえるという点については、教師から説明を受けると理解はできるものの、自ら立場をとらえてそれを他者に説明するというところまでは難しかった。また、ワークシートでの質問には正しく答えられるものの、実際にやってみると、自分の答え方についてまだ自信がなく、小声になってしまっていた。</p>			
支援の改善点	<p>日頃から本生徒の言動をしっかり観察し、本生徒に必要なソーシャルスキルを見極め、課題を設定することが大切であると改めて感じた。また、自立活動の時間における指導として重点的に学習するとともに、日常生活の中でその都度確認していくことで、理解が深まると考えられる。</p> <p>今後は本時のような「客体と主体を正しくとらえる」ことだけではなく、実生活の中で広く活かせるような課題に取り組む必要があると考える。</p>			

② 授業評価まとめ（前期）

ア 協議の内容

○授業者のねらい

- ・問いかけに応じた答え方が身についていない。
- ・やり取りを客観的に見ると、誤解される。
- ・主体と客体の関係を理解し、適切な返答ができるようになってほしい。

○K J法で出た意見より

- ・「～してきてくれる」の答えは「はい」や「いいよ」であって、「～する」とは答えないのでは。もっと指導目標「問いかけに応じた返答」に合う言葉や、本人が考えられるよ

うな言葉掛けをするほうがいいのでは。

- ・毎回パターンが同じでは、それで正解がわかってしまうのでは。
- ・言い方を学習しているのか問いかけに応じた返答なのかがわかりにくい。
- ・教師の言葉掛けが多い。繰り返しや声のニュアンス、表情、雰囲気等で答えを導き出しているように思える。
- ・問題としては答えを理解できているが、実際の場面ではできるのか。
- ・何を学ぶのかが理解できず、不安そうな表情が多かった。

イ 改善点及び次の授業に向けて

○思いを選択できるような活動を取り入れる

- ・「はい」「いいえ」のような選択肢が2つのものだけでなく、選択の余地のあるパターンの発問を考える。
- ・本人の「思い」を選択できるような活動にすることで、意思表示ができるようになる。

○般化の視点

- ・本人の生活の中でよく起こるような場面を、具体的に想定した内容で取り組む。
- ・いくつかの行動のパターンを獲得できるようにする。

○SST等で、やりとりの理解を図る

- ・相手の表情から意図を汲み取れるか。
- ・周囲の状況を読み取れるか。
- ・自分の思いとどう向き合うか。

○じっくり考える時間を取る

- ・教師の言葉掛けを減らし、発問の言葉を工夫する。
- ・教師の顔色から正解を導くのではなく本人がしっかり理解して答えられるようにする。

③ 自立活動学習指導案（後期）

生徒の実態、指導目標については、前期と同じであるため、省略する。

対象	N
活動（単元） 内容の設定 理由	<p>前回の授業の反省を受けて、感情を伴う言葉で、複数の選択肢があり、その中から自分で選んで答える活動に取り組むことにした。</p> <p>本生徒は、自分から気持ちを表現する言葉はほとんど出てこない。しかし、「こんな時はどう言えばいいか」との問いかけには、的確な表現ができています。自分の思いを相手に伝えるということは、相手との関係を深めていくのにとっても大切なことである。特に、「ありがとう」や「ごめんなさい」などの相手への感謝や謝罪の言葉は、社会生活において人間関係を円滑にするための重要なキーワードとなってくる。</p> <p>「ごめんなさい」「やめてください」「だいじょうぶ？」などは、日常生活の中で徐々に使えるようになりつつある。そこで、それらの言葉を使う場面や状況を改めて確認し、確実なものとするとともに、「ありがとう」についても同様に使えるようになればと考え、本単元を設定した。</p>
今までの 前時の 評価と 反省	<p>「ごめんなさい。」「ありがとう。」について学習した。カードを見て状況を説明する取り組みでは、教師の問いかけをヒントに、断片的にはあるが自分の言葉で説明することができた。状況に応じた言葉を考える際には、よく考えずに全く関係のない言葉を答えることがあり、考えてから答えるように伝える場面もあった。</p>

評価	日常の中での評価	実習先で必要な物を手渡してもらったり、キーホルダーを教師につけてもらったりした際など、自分からは「ありがとう」が出てこない。しかし、第三者の問いかけがあれば、どのような言葉で表現すればよいか自分自身で考えて表現することはできている。		
本時の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・状況を理解し、場面に応じた言葉は何かを考える。 ・どのような場面で「ありがとう」と言えばいいのかを理解し、実際に使えるようになる。 			
時間	活動内容	留意点及び支援の方法	評価の視点	
導入5分	<ul style="list-style-type: none"> ○はじまりの挨拶 ○学習の目当ての確認 	<ul style="list-style-type: none"> ・「場面に応じた言葉を、相手に伝える」ことが課題であると認識できるように説明する。 ・具体的な場面をイメージできるようにイラスト入りの教材を準備する。 ・吹き出しの中に入る言葉を、考えるのに、じっくり考える時間が持つことができるように働きかける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動の目当てを意識することができるか。 ・状況を把握し、自分の言葉で説明することができたか。 ・場面に応じた言葉は何か、考えて伝えることができたか。 	
展開30分	<ul style="list-style-type: none"> ○本時の活動について ◆具体的な場面において、吹き出しの中に入るセリフを考える。 ・かびんを割ってしまった。 ⇒「ごめんなさい。」 ・友達がころんだ。 ⇒「だいじょうぶ？」 ・雨の日、傘を忘れて入れてもらう。 ⇒「ありがとう。」 ◆ロールプレイに取り組む。 ①重い荷物を運ぶのを手伝ってもらう。 ②はさみを貸してもらう。 			
まとめ10分	<ul style="list-style-type: none"> ○本時のまとめ ◆吹き出しに場面に応じた言葉を書き入れて、絵カードに貼る。 ○おわりの挨拶 			
準備物	具体的な場面を示す提示用教材（3場面）、重い荷物、コンテナ、はさみ(教師の筆箱に用意)、はさみを使用する課題			
本時の評価	教師の問いかけを介しながらではあるが、イラストを見て自分の言葉でその状況について説明することができていた。また時間をかけて考えた結果として、その場面に応じた言葉「ありがとう。」「ごめんなさい。」「だいじょうぶ？」と正しく答えることができていた。			
支援の改善点	イラストだけではなく、本生徒が実感を伴ってより理解しやすいロールプレイングを増やし、その言葉を使う場面のパターンをたくさん作っていく必要がある。また、日常生活の中での具体的な場面において、その都度指導して行くことも大切にしていきたい。 今後、この場面ではこの言葉を使うという理解だけではなく、状況に合わせて自分自身で使う言葉を選び、使うことができるようになることを目標に取り組んでいく必要がある。			

④ 授業評価まとめ（後期）

ア 協議の内容

○授業者のねらい

- ・ひとつの言葉に絞ると、「その言葉を理解する日」ということで深く考えずに答えを導いてしまいがちなので、メインの「ありがとう」以外の複数の言葉についても同時に取り組んだ。
- ・本人が経験していないような場面でも、自分なりにその状況を捉え、自分の言葉で説明し、その上で状況にあった言葉として「ごめんなさい」や「大丈夫？」が使えるか確認する課題を設定した。
- ・ロールプレイを取り入れ、本人が実感を持てるようにした。

○K J法で出た意見より

- ・生徒の言葉を引き出すときの教師の言葉掛けを、もう少し工夫すべき。イラストを見て答えている感じがする。
- ・「ありがとう」の学習をした後に、はさみを貸してもらった時「ありがとう」が言えなかった。指導のいいチャンスだったと思うが。この場面を見せることで、次の学習に活かせるのでは。
- ・けがをした人に「よしよし」と言うのは間違いではない。一度肯定した上で、よりよい言葉を指導してもよかったのでは。
- ・まとめのところで、吹き出しに場面に応じた言葉を入れる時、どんな場面かを生徒に言わせるとよかったのでは。実際、本人も言おうとしていた。
- ・「ありがとう」や「ごめんなさい」は理解できているが、「だいじょうぶ？」は実感が伴わず理解が難しいのでは。
- ・教師とのやりとりだけで具体的な場面を想定して考えさせるのは難しい。ロールプレイをもっと多く取り入れたほうがよい。実際に重い荷物を持つことで、生徒から素直な言葉が出ていた。
- ・他の教師に応援を要請してロールプレイの内容を拡げることで、その言葉を使う場面も本人の人間関係も更に拡がるのでは。

イ 改善点及び次の授業に向けて

○ひとつの言葉にたくさんの場面設定を行う

- ・その言葉を使う様々な場면을複数設定することで、パターンで理解でき、実際の場面でも使えるようになる。
- ・パターンが入ることで行動に移せることが多いので、時間をかけてひとつの言葉に取り組む。

○ロールプレイを多く取り入れる

- ・身ぶり手ぶりを加えながら実際に演じてみることで、本人にとって一番実感を伴って理解が深まる活動である。

○使えるようになってほしい言葉に取り組む

- ・卒業後も含めた今後の生活の中で、使えるとコミュニケーションが円滑になったり、相手との人間関係が深まったりするような言葉を取り上げ、じっくり取り組む必要がある。

⑤ 考察

言葉に課題を抱える生徒は多い。語彙の獲得であったり発音の明瞭化であったり、言葉の意味の理解であったり、様々な視点からの言葉の発達を促す必要がある。

本生徒の日常生活においては、文法表現が上手くできないことで、的確に相手に伝わらない

ということが目立った。よって、自立活動を組み立てるに当たり、間違いを訂正し、正しい表現ができるようになることが、コミュニケーション能力の向上につながると考えた。

しかし、実際に授業研修を進めていく中で、社会生活において本人がより円滑に人間関係を築いていくためには、状況を読み取り、場面に応じた言葉を使えるようになることの方が大切であるということに気付いた。それは、パターン化されたものを覚えこむだけではなく、本人の思いが伴うことで、理解が進み、日常生活の中で定着していくと考えられる。

自閉という障害特性を考えると気持ちの理解は難しく、感情を表現する言葉を獲得し、それを使えるようになるには、とても時間がかかる。卒業を1年後に控えた高等部の今の段階で、取り組むべきかどうかについて悩むところである。

しかし、言葉は相手との人間関係を深めるために、とても大切な役割を担うものである。特に、感謝や謝罪、相手を思いやる言葉は、相手の気持ちを開き、関係を一步も二歩も進める。卒業後の社会生活をより豊かにするためにも、ぜひ使えるようになってもらいたい。気持ちの理解が難しくても、その言葉を使う様々な場面を想定し、繰り返し取り組む中で、いつか言葉と本人の実感がぴったり当てはまるときが来るのではと考える。

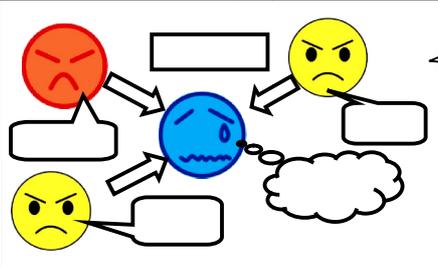
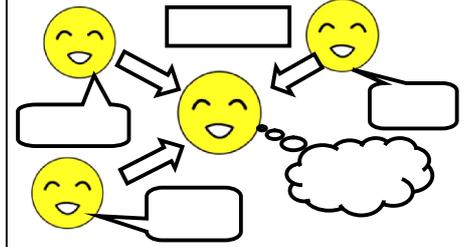
学校生活は残り少ない。社会へ出たときに使えるようになってほしい言葉を模索するだけでなく、本人の実感がより伴いやすい実生活に近い場面設定ができるよう、本人の日常生活をよく観察していこうと思う。また、ワークシートや課題としての客観的な理解だけでなく、実際の生活の中で使えるようになるためにも、学校生活すべての場面において、その都度理解を促していこうと考える。

(3) 高等部1ブロック3年生

① 自立活動学習指導案（前期）

	O	P	Q	R
生徒の実態	好きなことや自信があることについては大声で発言する。気持ちが高まると、周囲の状況がわかりにくくなり、相手の気持ちを考えずに発言してしまうことがある。場の状況がわかりにくく、話し合いの結果を記録したり黙りこんだりすることがある。	周りを気遣い、相手の様子を窺いながら発言することが多い。返答が難しい時や場の状況を把握しきれずに不安な時は、意見を尋ねられるまで沈黙でその場を乗り切ろうとすることがある。	見通しを持つことでスムーズに活動に参加できる。好きな活動では、慣れた友達に話しかけたり、積極的に参加したりすることができる。思い通りにならないことがあると、他者を非難して思いが通るまで訴えようとするなど、一方的なかかわりが多い。	状況に応じた適切な対応を客観的に考えることができるが、主張したいことがあると、相手の気持ちを意識した言動をとることが難しい。自分を否定されたと感じた時は、一方的な言い訳や相手を非難する言葉で自分を守ろうとすることがある。
指導目標	・適切なコミュニケーションについて具体的に考えることができる。 ・相手の立場や気持ち、状況に応じて適切な言葉の使い方を考えて、必要な場面で発表する。(人間関係の形成、コミュニケーション)	・自分の気持ちを考えて、自分なりの言葉で表現することができる。 ・相手の立場や気持ち、状況に応じて適切な言葉の使い方を考えることができる。(人間関係の形成、コミュニケーション)	・友達の意見を聞いて積極的にかかわろうとすることができる。 ・相手の立場や気持ち、状況に応じて適切な言葉の使い方を考えて、意見を交換することができる。(人間関係の形成、コミュニケーション)	・友達や教師と積極的に意見を交換することができる。 ・他者の意図や感情を考えて、状況に応じた適切な言葉の使い方をすることができる。(人間関係の形成、コミュニケーション)

<p>活動内容 の設定理由</p>	<p>対象生徒4名は自分の思いを適切に人に伝えることが難しい生徒たちである。思いを伝えることができずいたり、思ったことをストレートに発言して相手を傷つけてしまったり、適切な表現が難しいことで相手に誤解を与えてしまうことがある。互いに声をかけ合っているが、一方的なかかわりが目立ち、相手の気持ちを考えずに発言してしまうことが多い。加えて、状況の理解の困難さがあり、相手から聞いた話を理解しにくいことがある。その場合、話しかけるタイミングを計りにくく、相手の話を聞き返すこともあきらめてしまう様子がみられる。自分の苦手なことを認めにくい気持ちからか、わからないことなどを伝えられないままその場の雰囲気に流されてしまい、「どうでもいい」という発言をして自分の意見を求められることを避けたり、自分なりの解釈をして相手を非難する発言をしたりしているように見受けられる。今回の単元では、相手の気持ちを気遣いながら自分の思いをいかに適切に表現するかを考えられる指導をしたい。友達とやりとりをする場面で、①相手の意図(状況)を理解し②自分の思いを確認してから③相手を気遣い、自分の思いをどんな言葉で表現するかを考えさせたい。相手の意図(状況)を理解した時に、自分の思い通りにいかなかった場合は、コミュニケーションのつたなさからか相手への反発や怒りの表現で気持ちを伝えようとする事が多く、円滑な対人関係を築くためにじっくりと取り組むことが大切である。よって、相手の気持ちを考え自分の思いを適切に表現する活動内容の設定を行った。</p>						
<p>集団での 授業を 設定した 理由</p>	<p>卒業を目前にした今、社会でよりよい人間関係を築くための適切な表現方法を身につけてほしいと考えている。将来は、職場を含めて、多様な人とのかかわりの中で生活していくことになる。これらを踏まえると、集団での授業を設定する必要性があった。集団の中で他者の話を聞き、相手の意図を正しく理解して、自分の思いを適切な言葉で伝える取り組みをじっくりと行いたい。自立活動区分「人間関係の形成」では、「自他の理解を深め、対人関係を円滑にし、集団参加の基礎を培う」「自己肯定感(自尊心)を高める。お互いに共感し合う」とあり、これは自己と他者との関係の中で学ぶとある。「コミュニケーション」では、「社会的なマナー、ルールは集団の中で学ぶ」「自己中心ではなく、相手の気持ちをくみとる」とある。相手の意図を正しく知る意欲を養うという観点からも、この4名を対象で行うことが効果的だと考える。対象生徒は共通して相手の気持ちを気遣って自分の思いを伝えることが苦手である。慣れた友達とのやりとりの中でこそ、個々の課題と向き合うことができると考える。O、Q、Rはそれぞれ立場の弱い相手であるPに強い口調で話をする事が課題の一つであり、Pは不快な気持ちを伝えにくいことが課題としてあげられる。人間関係においては、QとRは仲がよく、RはQの気持ちを代弁することで積極的に話題に入るきっかけになることが多い。QはそんなRを支えにして、気持ちを落ち着かせてじっくりと考えて話すことができる。Oは場の状況がつかめず、場にそぐわない言動をとることがあるが、教師だけでなくPなど友達から注意を受けることで少しずつ適切な言動を考えられるようになってきた。お互いのことをよくわかりあって、生徒たちが発言しやすいこの集団で、個々のねらいに迫りたいと考える。</p>						
<p>前時の 評価と 反省</p>	<p>今回の取組にはやる気を出して自分なりに授業の合間をぬってやりたいことをクラスの友達や教師に聞き取って、周りの意見を調整しようとしていた。</p>	<p>自分のやりたいことの発表はできたが、友達も楽しめる企画を考えることが難しかった。</p>	<p>友達や教師からの問いかけに対しては答えられるが、自ら発言するといった積極的な姿は見られなかった。</p>	<p>取組に対しては積極的だが、友達や教師の発言を聞いて、消極的な発言を言うことが多い。</p>			
<p>日常生活 や各教科 等の中で の評価</p>	<p>どのような状況でも親しみをこめて相手に言葉がけしていることが多い。しかしながら、一方的な話に終わることが多く、話しかけてもその場を離れたたり、黙り込むこともある。</p>	<p>Pが描いたイラストを友人にからかわれた時、Pは何も言い返すことなく、表情がこわばり黙ったままだった。このときいやだった気持ちを表現できたと思う。</p>	<p>レクの準備が自分の思っている以上に手間がかかることがわかること、「手伝ってくれ」と教師に頼むことができたが、クラスメートに頼むまでには至っていない。</p>	<p>消極的な発言は人間関係を構築するのにマイナス影響がでてくることを認識し、別の表現を言い直すことができるように指導が必要である。教師に一つずつじっくりと質問されるとよく考えて答えられることが多い。</p>			
<p>単元名</p>	<p>クラスレクを考えよう～相手の気持ちを考えて、自分の思いを伝えよう～</p>						
<p>単元 目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> 相手の気持ちを考え、自分の思いを伝える。 周りの様子を見て、自分のとるべき行動(言動)をとる。 						
<p>本時の目 標</p>	<ul style="list-style-type: none"> 他の人に対し否定的な表現をせず、話し合いに参加し、自分の意見を言うことができる。 いやな言葉と感じたとき、いやであることを表現し、聞いている周りの者もどう感じたか言うことができる。 						
<p>時間</p>	<p>活動内容</p>	<p>指導上の留意 点(全体)</p>	<p>O</p>	<p>P</p>	<p>Q</p>	<p>R</p>	
<p>11:30</p>	<p>1 あいさつ 2 学級レクの振り返り</p>	<p>Q 企画のレクを実施したことを自分の印象に残っているであろうという場面を思い出す。</p>					

11:40	<p>(写真①) 神経衰弱 (写真②) 茶話会</p> <p>3 今日の取り組み説明</p>	<p>楽しかった思い出を共感する。</p>		<p>・Q企画レクを楽しむことができた発言があったか。</p>	<p>・自分が優勝したことを覚えていたか。</p>		
11:45	<p>夏季休業中の登校日にPの誕生会他みんなが楽しめる企画を考える。</p> <p>4 レク企画の考案と発表</p>	<p>考える時間を確保する。</p>	各生徒の	<p>・授業と関係のない発言をしていないか。</p>			
	<p>まず自分が楽しいと思えるものを考えると考えやすいことを強調する。</p>	<p>理由を発表できなくても書いたことについて</p>	の評価の	<p>・自分から挙手していたか。 ・理由を言うことができたか。</p>	左記に同じ	左記に同じ	左記に同じ
気持ちシート①	<p>※人を責める言葉や友達をからかうような言葉が出た場合の展開</p> 			<p>意識していたか、無意識の内に発言したか。</p>			<p>いやな言葉を発した本人は、その時何で言ったのかを考える。言ったことは事実であるが、特に理由がないこともあるので、言葉を発することは相手の気持ちを傷つけることもあることを理解</p>
気持ちシート②	<p>※言い方や表現を考えよう</p> 			<p>周りの生徒の気持ちを理解し言葉を改めることができ</p>	<p>言葉使いに気を遣ったり、場に応じた言葉を発した時</p>	<p>相手はどんな気持ちになったか?</p>	
	<p>※人を責める言葉や友達をからかうような言葉が出なかった場合</p>						<p>今日の話しあいの中で相手を嫌な気持ちにさせる言葉がなかったことを評価する。場の雰囲気や状況を常に察知してその場で対応していくことは、卒業後、社会に出た時に役立つことを伝える。</p>
11:55	5 出た意見からの絞り込みと決定まで			<p>・自分の一方的な意見ではなく、みんなが楽しめるための意見を選び言うことができた</p>	<p>・教師を介してではなく自分以外の生徒とやりとりできたか。</p>	<p>・教師に促されて自分以外の企画について聞かれたとき自分の意見を言う</p>	<p>・消極的な発言ではなく、みんなが楽しめるための意見を選び言うことが</p>
12:10	6 まとめ ・T1、T2から本日の授業にむかう						

12:15	生徒の姿（発言や行動等）を一言発表する。 7 終わりのあいさつ		か。 ・教師を介してではなく自分以外の生徒とやりとりできたか。		ことができたか。	きたか。
	O	P	Q	R		
本時の評価	司会進行を自ら務めたがどうまとめていいか混乱し、自分の気持ちを出すまでには至らなかった。	状況を理解しているか確認しないまま授業が展開してしまったので自分からの発言は少なかった。	自分の思いを伝えることができるが、場にそぐわない発言もあった。	レクを決めることには積極的にかかわったが自分の意見を言うことには控えめであった。		
支援の改善点	何を考えたらいいかを明確にすることで発言しやすくなる。	状況をわかりやすく伝えることと理解の確認が必要である。	自分の思いと違うときの発言（表現）の仕方を支援する。	じっくり考える時間をもつことで自分の意見を言うことができる。		
授業全体の評価と反省	気持ちシートを使う場面がなかったが、生徒が前向きな態度で自分の思いを表現したことは評価できる。ただし人の意見を聞いて、自分は思うか、受け入れているのかどうか話し合いのところまで至らなかったことは反省として挙げられる。					

② 授業評価まとめ（前期）

ア 授業者の反省

- ・「学級レクを考えよう」は生徒同士が話しやすい雰囲気を考え、設定した。本来ならば話し合い中に出てくる相手の気持ちを傷つける恐れのある言葉を取り上げ、「気持ちシート」を使つての指導を行う計画であった。しかし、生徒達はいつになく積極的で、人を傷つける発言はなく、責任をもって自分の役割をやり遂げようとする姿勢が見られたため、気持ちシートを使う場面がなくなってしまった。

イ 授業の内容について

○集団での授業について

- ・高等部3年生での教育課程Ⅲグループでは社会に出る一歩手前ということもあり、それぞれの個別課題はありつつも集団の中で自分の能力を発揮させることがとても大事になってくる。
- ・人のことを考えられる思いやりのある人間を育てるといふねらいで自立活動に取り組む。
→集団での活動が大事になってくる。また生徒も集団活動が難しい生徒はいない。

○今回の授業は特別活動の授業ともとれる授業になってしまったが、どうすれば自立活動の授業になるのか？

- ・丁寧な言葉使いをする練習を取り入れる。発言一つ一つを大事にし、それについて指導を繰り返す。
- ・生徒に自分の役割を分かりやすくするための支援があればよかった。

○今回の授業で残したい活動

- ・自分の気持ちを伝えにくい生徒にとって、一度、自分の考えを書くという活動は自分

の思いを整理するという点でよかった。

○高等部3年生教育課程Ⅲの自立活動について

- ・人を傷つける言葉を生徒は理解しているものの、日常生活やリラックスしている時に人を傷つける発言などをしてしまう生徒が多い。こういった現状を踏まえ、授業で自然な話し合いの中から問題点を指摘し、生徒自身で考える。という取組の方がより効果的であると考え。

ウ 改善点及び次の授業に向けて

- ・司会ならば前に席を設ける等、生徒自身が自分の役割をわかるような支援を行う。
- ・生徒のつまづきを予想した授業設定を行い、どのような場合でも対応できるようにする。
- ・集団での自然な活動を大事にしつつも、生徒の言動に注意し、幅広くフォローする。

③ 自立活動学習指導案（後期）

生徒の実態、目標、活動内容の設定理由、集団の授業を設定した理由については、前期と同じであるため省略する。

	O	P	Q	R
前時の評価と反省	具体物を扱って場の再現をすることで、発問の意図を理解することができた。答え方がわからない時は下を向いて黙りこんでしまったが、周りの意見交換を止めてもらい、考える時間をじっくりと持つことで答えることができた。謝罪すべき状況で、相手に非がある答え方をしてしまったが、友達の意見を聞いたり、模範解答を聞いて演じたりすることで適切な対応を考えることができた。	説明を聞いて簡単な状況を理解することができた。友達の意見を聞いた後に意見を問われると、聞いた意見と全く同じ答え方をすることがあった。教師と場面の展開を丁寧に確認することで、自分なりの考えを発表することができた。状況に応じた言葉や丁寧な言葉使いの課題を指摘されると、正しい答え方をしたい気持ちが高く、周りの意見を取り入れながら粘り強く答え直す様子がみられた。	周りの意見に耳を傾ける前に、正しいと思ったことを次々と発表した。相手の立場に立った自分なりの答えを出すことができた。教師が悪い例を演じた時は、厳しい口調や相手を傷つける表現に気づき、「(自分は)いつも先生に優しく言うように言われているのに。」と、教師に示唆しようとした。客観的に考えることで、相手の気持ちを配慮した表現の大切さを認識できてきた。	相手を責めるような自己防衛的発言が多い。尋ねられた答えを考えるまでに、自分が納得のいかない点を繰り返して発言し、論点をすりかえてしまった。提示された状況を過去の体験に沿って考えることで、自らの対応が正しかったことを確認したい様子がみられた。自分の主張を聞いてもらったり、周りの意見を聞いたりして考えることで、相手の気持ちを配慮した言葉使いで自分の主張を伝える答え方ができた。
日常生活や各教科での評価	思ったことをすぐに発言し、笑いでごまかしてしまうことがある。他愛もない発言で他者を傷つけてしまった時、教師に指摘されることで相手の感情を意識できるようになる。相手に謝罪をしたり、気持ちを伝えたりする場面では、ふさわしい言葉を考えられずに黙りこんでしまうことが多い。年度当初に多かった消極的な発言「別に」は、ほぼ言わなくなった。	自分たちで相談して役割を分担するなど、話し合いの経験を積んでいることが、発言をする上での自信になっている様子が見える。一番に意見を求められた時は、不安な表情を浮かべることもあるが、考えて自分なりの言葉で表現できるようになってきた。丁寧な言葉使いを心がけているが、敬語表現を使いこなすことができず相手に誤解されて受け取られることが多々ある。	活動の内容や時間に見通しを持つことで話し合いにスムーズに参加できることが増えている。友達の意見について感想を尋ねられると、意識して周りの意見を聞けるようになってきた。思いに反することがあると、言葉使いが荒くなったり態度で表現しようとしたりすることもあるが、丁寧な言葉使いで話し合いをする経験を積むことで、自分の発言を見直すことができてきた。	話の流れを理解すると積極的に意見交換しようとする。仲がいい友達との会話や、気持ちが落ち着いている時は相手を気遣った言葉使いをすることができる。自分なりの解釈で相手に否定された感じを受けた時は、一方的な言い訳を続けてしまう。一度自分の主張を聞いてもらい、教師の質問に答えながら自分の言動を振り返り自分で考えることで状況に応じた発言を見直すことができるようになってきた。

単元名	自分の「思い」を表現しよう。						
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> 相手に伝わる印象や内容は、自分の発言によってかわることを知り、良好な人間関係づくりをする大きさに気付く。 相手の気持ちを考えて自分の思いを適切な言葉で表現する。 						
本時の目標	<ul style="list-style-type: none"> 自分の「思い」と適切な「表現」整理して考えることができる。 相手に不愉快な印象を与えずに、自分の意見を言うことができる。 						
時間	活動内容	指導上の留意点 (全体)		O	P	Q	R
11:30	1 始まりのあいさつ 2 この人はどんな思いなのか考えてみよう。 ・写真から状況を読み取り、登場人物の気持ちを吹き出しに書く。	※興味・関心がある写真を提示する ※表情に注目できるように促す					
11:40	3 事例で考えよう① 帰る時に、友達から「荷物運びを手伝ってほしい。」と言われた。今日は早く帰らなければいけない日。 ※生徒の意見を表に記録し、各自の意見を振り返ることができるようにする。	※映像で事例の設定場面を伝え、状況の理解をしやすくする。 ※横軸(「友達」「自分」、縦軸(「状況」「気持ち」「表現」)の表を提示して、考える内容や順番を視覚的に理解できるようにする。		・登場人物の表情に注目しながら最後まで画面を見続けることができたか。 ・今、考えることを理解して、自分なりの意見を出せたか。	・状況の読み取りだけでなく、気持ちを考えて意見できたか。 ・事例場面の映像を見て、状況を捉えた発言をすることができたか。	・静かにしながら最後まで映像を見ることができたか。 ・指名されるまで待ち、自分の意見を発表することができたか。	・登場人物の表情に注目しながら真剣に画面を見続けることができたか。 ・他者を否定せずに、自分の意見を発表することができたか。
11:55	4 事例で考えよう② 友達から「映画を見に行く約束をしていたけど、行けなくなった」と言われた。(状況を説明せずにすぐに去る友達)自分はとさに呼び止めた。 ①この状況での自分の正直な気持ちを考える。 ②相手の気持ちを考える。 ③相手の気持ちを考慮して、自分は何と言えばいいかを考える。 ④自分の言葉を聞いた時の相手の気持ちを考える。	※意見が出るまでじっくりと待つ。 ※友達の意見を静かに聞くように促す。(気持ちを落ち着かせる言葉かけをしたり、友達の意見を聞いた感想を尋ね) ※相手を不愉快にさせない言葉を選んで、自分の思いを伝えることが大切だと気付くようにする。	各生徒の 評価 の 観点	・相手の気持ちを自分なりに考えて発表できたか。 ・模範解答を聞いて、自分の意見の違いを発表することができたか。 ・わからない時は質問することができたか。	※理解が難しいような時は、よく似た例(経験したこと)を提示して、考える。 ・相手の気持ちを理解した上で、自分の気持ちを的確に表現することができたか。	・相手の気持ちを的確に答えられたか。 ・相手の意見を聞いた上で意見交換することができたか。	※Oに対してはT2を含め積極的な言葉かけをしたり、考える時間をじっくりと設ける。
12:15	5 終わりのあいさつ						

	O	P	Q	R
本時の評価	ビデオでまだ状況が理解できない時、自分からわかりにくいことを発言できた。	O 同様、状況を理解することが難しい。丁寧に説明することで理解できた。	状況を理解して的確な答えを発言した。落ち着いた状況では集団適応できた。	自分の経験や相手を責めるような発言をしがちであった。
支援の改善点	何を考えなければならぬかが明確にすると集中できる。	視覚支援と状況に応じた言葉使いができるように支援する。	自分に意に沿わない状況のときの発言の仕方を支援する。	相手の思いに立って考えるために、個別対応が必要である。
授業全体の評価と反省	どんな状況であるかを理解することが必要であり、口頭だけで理解することが難しい生徒も多いので場面をあらかじめ撮影し、ビデオで再生し視覚支援を取り入れたことは事例生徒他生徒にとってもわかりやすかった。理解できたかどうか確認しつつ、まだ理解が不十分でわかりづらいことを教師に伝えることができたことは評価できる。			

④ 授業評価まとめ（後期）

ア 協議内容

○授業の内容について

- ・ 社会に出るにあたって集団の授業を大切に取り組んできた。
- ・ 生徒同士が話し合いができるような授業を目指した。
- ・ 状況が理解できるように再現ビデオの視覚支援を行ったが、難しい生徒もいたため、ロールプレイをしたことで全員が状況を理解することができた。

○見えてきた課題

- ・ 視覚支援だけでは、課題を理解できない生徒もいた。
- ・ 状況の理解の差から生徒同士の話し合いの時間を十分確保することができなかった。

イ 1年間授業実践してみでの反省

○次のようにスモールステップを踏み、集団での授業を構築していくことが大切であると考えた。

〈第1段階〉 個別もしくは小集団での授業設定

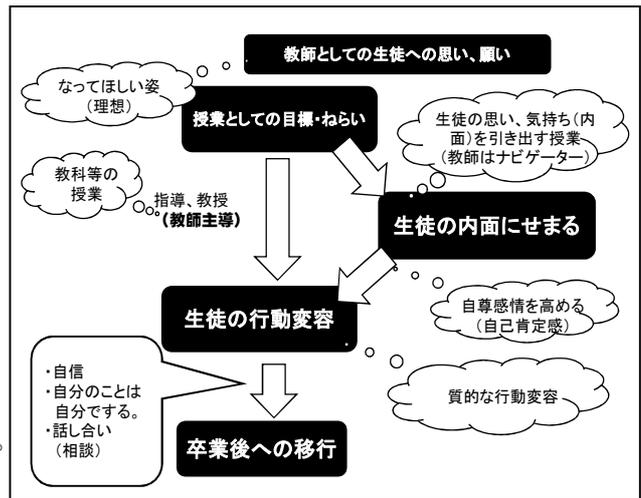
〈第2段階〉 多様な小集団での授業設定

〈第3段階〉 全員での授業設定

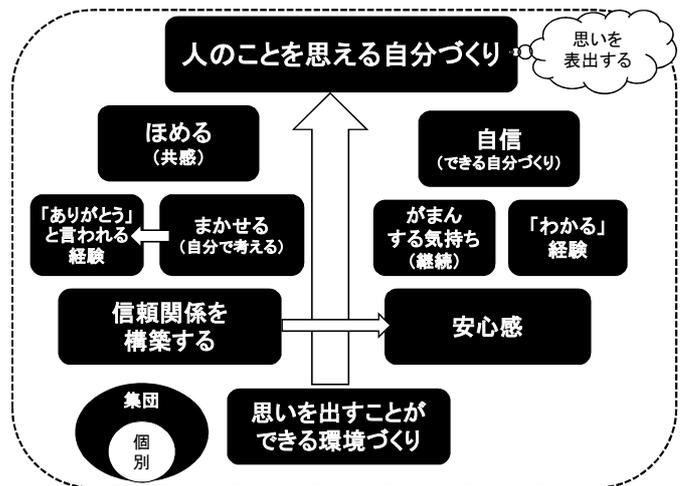
⑤ 考察

高等部3年という段階において、卒業後の働く生活を見据えた時、職場という集団の中でいかに自分の仕事（役割）に責任をもって果たすことができ、いかに自分を肯定的に捉えたり、居場所を見つけたりすることができるかが大切な視点であると考えます。卒業後長く働き続けることは大切なことであり、そのために人とのかかわり（人間関係）やコミュニケーションをうまくとっていけるかである。自分の思いを一方向的に押し付け、いやな気持ちにさせる発言は人間関係にズレが生じ、孤立していく可能性があるように考えられる。卒業後スムーズに移行していくためにも、このような視点を自立活動の授業実践を一貫して指導を行ってきた。自立活動での授業実践を行う時、教師として生徒になってほしい姿（理想）を思い描く。

さらに生徒の実態を十分把握した上で授業目標やねらいを設定する。生徒の行動変容を求めるとき、教師の思いだけでなく、生徒の内面に迫る、いわゆる生徒の思い、気持ちを引き出す授業が自立活動であると捉えた。この実践は「自尊感情（自己肯定感）を高める」ことに繋がるとも考えた。自尊感情が高まると、自分の気持ちの中で「できる自分」が芽生え、自分の思いを表現できると考えた。生徒の内面を見た時、障害による理解の難しさや自己肯定感の低さからくる「どうでもいい」「別に」といった一見やる気がないと思われる表現をすることが多いようにも思われる。これは失敗を恐れ、周りの目が気になるといった自分の思いの表現の仕方がわからないためと理解できる。



今回の授業実践では右図のように「思いを出すことができる環境づくり」を中心に設定した。何でも話しができるように担任と信頼関係を構築することがまず第一歩であり、お互いが何でも話せ、安心できる雰囲気づくりを大切にした。授業では、生徒が問われていることを理解し、発言するタイミングをはかり相手を意識した表現をすることを担任間で徹底した。



この実践で、2つのことが成果として挙げられた。一つ目は、周りの人を意識して行動するようになったことである。事例生徒からは、①口にする前に言っているかを考える（言葉使い）②自分勝手にせず、みんなの意見を聞く③人の話を聞く時、顔を見て聞くといった発言があった。二つ目は、お互いが相談する、話をするといった適応性や行動ができてきたことにより、集団としての質が高まったことである。

課題としては、生徒一人ひとりのねらいをさらに具体化した指導の必要性が明らかになった。今後は状況に応じて個別対応を行うとともに、引き続き話しあいができる集団設定も必要であると考える。

(4) 高等部2ブロック1年

① 自立活動学習指導案（前期）

対 象		S	
生徒の実態		<p>教師との関わりが多く、生徒同士のコミュニケーションをとる場面が少ない。また、自分の感情や思い、価値観以外の状況になると特定の返答で自己防衛を図り、感情が高ぶった時は冷静な会話ができなくなる。褒められる場面でも、素直に受け入れる事が難しく、その場面に適した返答ができず、会話の成立が難しい時がある。相手の言葉を理解し、行動することができるが、「相手の気持ちを思うことや自分自身を知り大切に思う心を持つ経験」が少ないと考えられる。気持ちが安定しているときは、会話の内容を理解し、人と会話することができるが、明瞭な発音ができずに相手に言葉が伝わりにくい事がある。その時の気持ちの状態により発音にも影響が出ているように考えられる。</p>	
指導目標		<ul style="list-style-type: none"> ・自分の気持ちや考えを、相手に適切な表現で伝える。 ・お互いの気持ちや考えを伝え合うことを通して、より良い人間関係を築く。(人間関係の形成、コミュニケーション) 	
活動（単元）内容の設定理由		<p>自他の尊重（自分はどのような人間か、自分自身を知り、自分の思いや考えを適切に表現すること、相手も同様）がより良い人間関係の構築に繋がると考える。またSは、発音に課題があり、相手に伝わりにくい場合があるので、コミュニケーションを円滑に行う上でそれを補うツールを利用することで、より自信をつけさせたい。</p>	
今までの評価	前時の評価と反省	<p>前時（7/1）は、自己紹介をする項目を伝え、実際に教師が自分のことをどう表現するか、見本を見せて理解しやすくした。とても集中して、学習に向かうことができていた。学習シートの項目は、①「自分の良いところ」②「今頑張っていること」③「最近、嬉しかったこと」④「今、やりたいこと」の4項目である。①については、一生懸命考えてはいるが、書くことはなく、最終「難しい」と回答した。②については、携帯を利用して伝えようとしていたが、電池切れとなりそのことをなかなか伝えることができず、鉛筆で書くようにしていた。内容を確認すると、「美術を頑張っている」であった。この日の午前中の授業が「美術」であった。Sにとっては、考えが出やすかったのかもしれない。③については、「もういいの」と言って考えることをやめた。「わからない」「今はない」のならば「いいです」と答えた。④については、全4項目の中で一番答えやすいと言った項目であったので、すぐに記入し始めた。回答は、「ゲーム」であった。Sの家庭生活の中でとても大きな割合を占めているのが、「ゲーム」「テレビ」である。しかし、現在はゲームを取り上げられていて、遊んだり、見たりすることが出来ないのである。そういう事情を考慮し、次回も学習シートをもとに、じっくりとSの気持ちに寄り添って気持ちを引き出していきたいと考えている。</p>	
	日常生活や各教科等の中での評価	<p>4月当初に比べ、日常生活や授業中、相手の意見に耳を傾ける事が出来るようになってきた。しかし、素直に「はい」という言葉がでなかったり、相手に上手く伝わらないときは、「もういい」と話すことをやめてしまったりするときもある。相手に伝えようという気持ちが強い内容であれば、積極的に50音表を自ら取り出して伝えることができています。</p>	
本時の目標		<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを適切な方法で相手に伝える。 ・相手の事を自分なりに考え、伝える。 	
時 間	活 動 内 容	留意点及び支援の方法	評価の視点
導入5分	<ul style="list-style-type: none"> ・始まりの挨拶をする。 ・前回の授業を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師自身の紹介をしながら説明し、Sとの信頼関係を深めながら、本時の課題を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・素直な気持ちでテーマを受け入れることができたか。
展開35分	<ul style="list-style-type: none"> ・本時のテーマ（課題）を確認する。 ①前回の回答が難しかった項目 ②会話する相手の事をどう思うか。 ③ 伝達方法の選択と実行（口頭、記述、50音表、タブレット型端末） ・前回の自己紹介シートの中身を振り返る。 ・すぐに回答できた項目を答える。 ・回答が難しかった項目を答える。 ・「自分の良いところ」について「相手の良いところ」を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の思ったことを素直に表現することが大切であることを知らせる。（機器や50音表等の利用） ・なかなか考えが浮かばなければ、言葉かけを行う。 ・回答しやすい項目であるので、少し内容を膨らませて、生徒の発言を引き出す。 ・回答困難の項目については、教師の回答を参考に言葉かけを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・思いや考えを相手に伝えることができたか。 ・伝達手段を選択し、実行出来たか。 ・相手のことを意識し、自分の気持ちを伝えることができたか。

まとめ5分	・本時を振り返る。 ・終わりの挨拶をする。	・時間がなければ、次回までの宿題とする。
準備物	ワークシート、伝達ツール（文字盤、携帯電話、50音表、タブレット型端末）、筆記用具、メモ用紙数枚	
本時の評価	・緊張していたが、自分の考えを出そうしていた。 ・機器（携帯電話）に意識がいきすぎて、課題に集中できなかった。	
支援の改善点	・教師側からの質問が抽象的でわかりにくかったので、質問内容を選択形式に改善する。 ・機器に興味を持ちすぎてしまうところがあるので、適切な使用場面や使用時間を考える。	

② 授業評価まとめ（前期）

ア 協議内容

○授業者の反省より

<反省点>

- ・ワークシートの各設問が抽象的でわかりにくかった。
- ・伝達機器の使用については、Sに自由に委ねるのではなく、ある程度、教師が使用を促してもよかった。

<今後に向けて>

- ・4月からの取組により、自分の思いを徐々に伝えられるようになり、思い通りにいなくても、自分で落ち着きを取り戻して次の活動ができるようになってきた。今後は教材等の改善をしつつも、①自分の気持ちや考えを相手に正しく伝える②お互いの気持ちや考えを伝え合うことを通して、より良い人間関係を築くの2点を指導目標に掲げ、授業を実践していきたい。

○K J法の意見より

<教材、教具について>

- ・教師の設問に答えられていなかった。
→Sが答えを導きだしやすいように選択カード等を用いる。

[選択カードを用いることについて]

- ・YES、NOだけでなく、いろいろな表情（絵）のカードを用いた方が良さそうである。
- ・Sの答えを導こうと教師の言葉かけが多かったのも、軽減される。
- ・伝える手段（機具）を精選する。
→鉛筆は持って、遊んだりしている様子があったので、この授業においては必要ない。
→国語力が弱いという点もあるが、50音表は気軽に使えるものであるなので、今後も使用する。
→携帯電話のメール機能でのやり取りは、①打った後にふりかえられる②予測変換などで文字の打ち間違いが軽減できる③絵文字などで表情を伝えられるなどのメリットが挙げられるので良い。

<教師の発問について>

- ・具体的な事例を提示する。
- ・本時では生徒の良いところ、悪いところを教師が一方的に話していたが、生徒自身にふりかえられるような手立てがあった方がよい。

例：「○○くんがSくんの○○のことを褒めていたよ。」等の言葉かけ

イ 改善点及び次の授業に向けて

- (1) 表情のカードなどの自分の思いを伝えやすい教材を準備する。
- (2) 思いを伝達するツールは携帯電話のメール機能と文字カードにする。
- (3) 生徒のふりかえりを大事にする。
- (4) 教師の言葉かけによる支援を少なくする。

③ 自立活動学習指導案（後期）

生徒の実態については、前期と同じであるため省略する。

対 象		S		
指導目標		<ul style="list-style-type: none"> ・相手に自分の気持ち（意見等）を確実に伝える。 ・補助的な手段として50音表を使用することで伝わることを体験する。（コミュニケーション） 		
活動（単元）内容 の設定理由		Sは、発音に課題があり、相手に伝わる場合とそうでない時があるので、コミュニケーションを円滑に行う上で、それを補うツール（50音表）を利用して、確実に相手に伝えることで、自信をつけより広がった人間関係構築の糧としたい。		
今までの の評価	前時の評価と 反省	前時では、授業に遅刻したことを題材にし、なぜ遅れたか、どうすべきであったかを話し合った。ゆっくりと振り返ることで、感情的になることもなく、素直な状態で、教師側の言葉に耳を傾け、「はい」という言葉で返答できた。		
	日常生活や各 教科等の中で の評価	1日の生活の見通しは持っているのに、なぜか次の行動に移る前に、一人考え事をしているようなボーッとした状態のことが多い。そのことで、時間だけが過ぎ、すべきことができない。できるときもあるので、できる限り、指示を最小限にしよう心がけている。また、次の行動に導けるような言葉かけも行い、少しずつ成果が出始めている。		
本時の目標		<ul style="list-style-type: none"> ・今日の登校後からの生活を振り返り、相手に伝える。 ・次の日の予定を自分で決定し、相手に伝える。 ・語彙を増やす。 ・正しい単語の言い方（読み方）を覚える。 ・50音表で、相手に意思を確実に伝える。 		
時 間	活 動 内 容	留意点及び支援の方法		評価の視点
導入5分 展開20分 まとめ5分	<ul style="list-style-type: none"> ・始まりの挨拶をする。 ・本時の説明を聞く。 <p>[活動①]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝からの学校生活を振り返る。 ・明日の予定を決定する。 <p>[活動②]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あいうえお50音表を活用し、知っている言葉を探す。 <p>・本時を振り返る。</p> <p>・終わりの挨拶をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・スケジュールボード（可動式）を利用し、質問形式で行う。 ・同上 ・まずは、自分の知識の中にある言葉を考え、発言する。出てこなくなったときに表を活用する。 <p>[表の活用方法]</p> <p>表の縦、横、斜めに文字をつなぐ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今日の振り返り、明日の予定等を自分で理解できたかを確認する。また、ひらがな1字を思い浮かべ、言葉が出たか感想を聞く。 		<ul style="list-style-type: none"> ・朝、決めた行動ができたか、明日の予定を決め、相手に確実に伝えることが出来たか。 ・5個以上の言葉が出て、相手に確実に伝えることが出来たか。 ・感想を考え、相手に確実に伝えることが出来たか。

準備物	50音表、スケジュールボード、付箋（言葉確認用）、筆記用具、メモ用紙数枚
本時の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・すべきことを生徒が理解しているので、自発的な言葉が多く出ていた。 ・50音表をスムーズに用いて、相手に伝えることが出来てきた。
支援の改善点	Sが自主的に取り組めるようになってきたので、より意思伝達の確実性を高め、伝わったときどのような気持ちになるか等、実体験を数多く積むことが出来るよう支援が必要。

④ 授業評価まとめ（後期）

ア 協議内容

○授業者の反省より

<反省点>

- ・回数を重ねることで定着し、自発的な発言が増えてきた。
- ・まず発言することが大事だと伝えきれていなかった。今後指導が必要である。

<今後に向けて>

- ・活動内容が定着してきたので、相手に伝わった時、自分はどう思うか等、実体験から感じさせ、50音表を利用した確実な伝達を目指す。

○K J法の意見より

- ・S自身の自発的なツール（50音表）の活用が出てきている。今後は、50音表の定着が必要である。
- ・友達とのやりとりを積み重ねるため、50音表の便利さを実感できるように経験を積む必要がある。

イ 改善点及び次の授業に向けて

- ・取組の見通しが持て、教師側からの言葉かけが少なくても、自発的に発言が出てきている。今後は、Sの興味あることを土台にして、より幅の広い題材を設定し、50音表使用の確実性を高めさせたい。

⑤ 考察

コミュニケーション能力の向上と人間関係の形成という目標を掲げて、7月までSの実態を見ながら授業を進めてきた。自己肯定感を養うこと、自分の気持ち・相手の気持ちを知ること、そしてコミュニケーションに有効な機器の活用といった盛りだくさんな目標であったため、授業が生徒に分かりにくいものになってしまった。反省を受け目標をしぼり、前期の「自分を見つめる」から後期の「確実な意思伝達の獲得」へ目標を変えたことにより、Sが何をすべきかがわかりやすくなり、より集中して取り組めるようになってきた。意思の伝達方法を「50音表」（資料①）の活用とし、この伝達方法の向上を目標に設定した。この表は、ひらがなを1字ずつ指さして相手に伝えるツールである。Sはどうしても伝えたい事は、自らこの表を出して伝えようとする。自発的な行動を大切にし、口頭で相手に伝えられないときには、この表を使用し、確実に伝えられるように学習を進めた。その結果、4月当初より学校生活の中で、自ら

この表を活用する機会が増加してきた。

コミュニケーションの支援については、主体的に行動するためには、スムーズに伝わるのが重要ではないかと考える。おそらくSにとって簡単な方法は口頭であるが、それは発音の問題で伝わりにくい。50音表は自分の意思を簡単に、かつ確実に伝えることができるツールであった。

また、1日を主体的に過ごし、達成感を得、自己肯定感を高めるために、スケジュールボードを使用して、自分で考え実行し、振り返りが出来るようにした。高等部の生活にも慣れ、最近ではスケジュールボードがなくても見通しを持って行動出来つつある。



人に気持ちを伝えられないのはコミュニケーションの方法だけでなく、人間関係にも大きな課題があるととらえ、教師との信頼関係を深めることで気持ちを伝えようという意欲につながると考えた。さらに、本生徒に必要なのは同世代の生徒と生活する中で気持ちをぶつけ合いながら、自己を知り、他者を理解する経験を重ねることだと思われる。対教師ではなく同世代の生徒だからこそ共感し、時には反発する中で互いを知り、人を思いやる心が育つのではないだろうか。

今も含め、卒業後もSが豊かな生活を送るための力をつけるため、「伝えること」「伝わること」の体験を積み重ねていきたい。

3. まとめ

高等部段階での自立活動は、将来の社会生活に活かせる内容に重きを置いて取り組んでいる。3年間という限られた時間の中で、より豊かな社会生活を送るために必要な力を育てていかなければならない。そのためにも、生徒の実態をしっかり把握し、卒業後の生徒像を見通した上で課題を設定し、3年間の指導計画を立てて、段階的に進めていく必要がある。

しかし、自立活動の指導内容は担任のみで組み立てることが多く、生徒の実態や将来像は担任の思いによるところが大きい。授業形態は個別指導がほとんどで、評価においても客観的な意見が得にくいのが現状である。

今回、授業研修を行うことで、複数の目で見、様々な観点から生徒を捉えることができ、立体的に生徒像を組み立てることができた。その中で、担任では見えなかった実態が見えてきた。一人ひとりが授業を評価し改善点を考えることで、授業者が気付かなかった生徒の学びや今後の課題も見えてきた。また、「大切にしたいこと」や「生徒の将来像」についても、それぞれの教師で思いが異なることもわかった。話し合いを進めていく中で、生徒の社会生活に向けて、何を一番大切に取り組むべきかを共通理解できた。担任が組み立てた授業を学年、ブロックで十分検討し、改善した上で授業を実施し、更にそれを検証するというPDCAサイクルを用いることで、指導内容に大きく

変化が見られたところもあった。例えば、2年生は文法的な言葉の指導から生徒の心の内面に迫った課題に、2ブロックでは、場面に応じたコミュニケーション能力の向上からコミュニケーションツールの獲得というように、より生徒の実態に迫った指導内容に変更することができた。

近年、高等部の生徒の実態や課題が多様化してきている。近隣の中学校から入学してくる生徒の中には、気持ちが不安定で不適応状態になっているものが多い。そのため、特に入学間もない1年生の段階では、教師との信頼関係の構築や仲間作り等、学習をする気持ちや環境を整えることから始める必要がある。生徒の気持ちに寄り添い、柔軟な指導も必要になってくる。その中でも高等部での3年間を見通して、段階的に指導を進めていくことが大切である。

また、3年生は卒業を控え、今までつけてきた力を社会で活かせるよう、確実なものにしていく段階である。般化の視点も重要となり、そのためにも、個別の取組だけでなく集団の授業を設定し、実際の生活場面で使えるかを検証する必要がある。その中で、教師との1対1の取組ではわからなかった新たな課題も見え、集団での取組と並行して個別でも指導を行う等、様々なアプローチ方法でより実践的に取り組んでいく必要がある。

自立活動で取り組んでいる内容は、今までも学校生活の中で日常的に指導が行われてきたものである。しかし、課題が見えた場面でその都度指導するだけでは、一つ一つの指導につながりが持たせられなかったり、一つの課題に対する指導を深められなかったりすることが多く、生徒の心に課題意識を芽生えさせることや、指導内容を浸透させることが難しかったように感じる。時間における指導として、教育課程の中に組み込み計画的に取り組むことで、指導内容に系統性を持たせることができ、個に迫った課題にじっくり取り組めた。今後も、社会での自立を目指し、般化の視点を持って時間における指導を行うとともに、日々変化する生徒の実態をしっかり把握し、客観的視点を持って検証し、指導内容を見直していくことが必要である。そのことが、社会に生きる能力を育成し、生徒が卒業後の生活をより豊かに送ることにつながると感じる。

愛徳分教室

1. はじめに

愛徳分教室は、愛徳医療福祉センター内にある紀北支援学校の分教室である。小学部と中学部があり、現在小学部には10名、中学部には7名の児童生徒が在籍している。また、それぞれの学部には肢体不自由普通学級と肢体不自由重複学級が設けられている。普通学級では、家庭から離れての入院生活に対するストレスや退院後に地域の小・中学校に戻ったときの生活に対する不安などを抱えている児童生徒が多く見られる。このような実態をふまえ、普通学級の自立活動においては、ストレスや退院後の不安を少しでも軽減させ、安定した気持ちで充実した生活が送れるように、児童生徒に達成感や自信をもたせることを大切に考え取り組んでいる。重複学級では、日常生活や学習において体調面や身体の動き、コミュニケーションに課題を抱えている児童生徒が多く在籍している。そのため、重複学級の自立活動においては、センターと連携を密に図りながら、自立活動の6区分の中で、特に「健康の保持」、「身体の動き」、「コミュニケーション」を重視した取組を行なっている。

今年度の研究では、テーマを【自立活動の授業づくり】と設定し、自立活動の「時間における指導」についての授業研究を行った。具体的には、中学部重複学級の授業について分教室職員全員で評価し合い、授業の改善点や課題などについて討議した。また、本校の職員からの授業評価も活かし、自立活動の授業がよりよいものとなるように研究を深めた。

2. 授業研究

愛徳分教室 中学部

(1) 自立活動学習指導案（前期）《グループ I》

	T	U	V
児童(生徒)の実態	<p>上肢を硬直させて大きな声を出す発作がある。覚醒と睡眠のリズムが確立しておらず、外部からの刺激が少ないと、特に午後の活動時は眠ってしまうことが多い。目の前に提示したものに対しては、注視、追視ができる。左手を口に入れていることが多いが、口から離して両手を握っている姿も見られる。マジックやモップの柄など持ちやすいものはしばらく握っていることができる。</p>	<p>時に気分が高まることはあるが、好きな曲（森のくまさん、がんばりマン等）が流れたりウォーカーを使っでの散歩の時は、自分の耳を触ったり声を出して嬉しさを表す。これから好きなことができるようになった時も笑顔が見られる。簡単な指示が分かり、活動への見通しがもてる。物をつかんだり投げたり、左右の手の持ち替え、カゴの中に物を入れたり操作力は高い。興味・関心のあるものはよく見ている。</p>	<p>少しの距離なら転がりながら移動ができる。前に台を置くと台を手で支えて暫くの時間の膝立ちができる。タンバリン等の楽器やビニール袋の手触り感やシャカシャカと鳴る音を好み、自分から触りにいく。口に手を入れていることもあるが手を眼前に出してひらひらと動かしていることもある。好きなおもちゃ（楽器）は落とすことなく、しっかりと握って振ることができる。</p>
指導目標	<ul style="list-style-type: none"> 覚醒して活動に取り組む。 対象物に向けて手を出す。（健康の保持）（身体の動き） 	<ul style="list-style-type: none"> 情緒を安定させて活動に取り組む。 操作力（対象物に手を伸ばす、持つ、つまむ、右手から左手への持ち替え、両手操作等）をより高める。（心理的な安定）（身体の動き） 	<ul style="list-style-type: none"> 触覚防衛反応の緩和。 対象物をよく見て手を使う。 活動を通して外へ向かって使う手（物を触る、握る、放す等）を広げる。（環境の把握）（身体の動き）

活動（単元） 内容の設定理由		<p>紀北支援学校愛徳分教室では年度途中の転入生が多い。今年度中学部では4月初めは5名の生徒でスタートしたが、現在は7名の生徒が在籍している。気管切開を行っている生徒、座位姿勢または四つ這いや寝返りで移動が少しできる生徒、ウォーカーを使って自由に動くことができる生徒、筋緊張は強いが簡単なコミュニケーションが可能な生徒等、実態の広がり大きい。そのため、自立活動の内容においても筋緊張を和らげリラックスすることを目標とする生徒、情緒の安定を目指す生徒、立位台を使っての立位により筋力をつけることを目標とする生徒、手の操作力を高めることを目指す生徒、日常生活でのコミュニケーション手段の獲得を目指す生徒等多岐にわたっている。中学部では、自立活動の時間を設定し登校後は毎朝、「健康の保持」(3) 身体各部の状態の理解と養護に関すること(病状の進行防止)並びに「身体の動き」(1) 姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること(マッサージやROMにより筋緊張を緩め、1日の活動の始まりを準備する)を中心に取り組んでいる。また朝の自立活動の時間以外にも自立活動の時間を設定し、「コミュニケーション」「手の操作」「生活動作」等の内容に取り組んでいる。例えば、今まで口によく入れていた手が外に向かってきたので、『物に向かう手に変えていく』『友達や教師と一緒におもちゃに触れて遊び、同じ空間を共有することにより、他の人の存在を意識しかかわる力を広げる』『意志を身振りや自分の「ことば」と共にコミュニケーション機器(スーパートーカー等)を使ってより正確に伝えられるようになる』等である。これらの内容を考えてみると個々の取り組む内容は違うが、「外に向かう手」「自らおもちゃに触れようとする手」「スーパートーカーを操作する手」というように『手を使う』という共通のキーワードが浮かび上がってきた。この『手を使う』活動を生徒個々に合わせて考えることが、一人一人の生活の広がりにつながっていくであろうと考え、本活動(単元)を設定した。 * 中学部重複学級全体の設定理由とする。</p>		
集団での授業を設定した理由		<p>中学部重複クラスは1年生から3年生の生徒が在籍している7名のクラスである。1つの教室で7名の生徒の活動となると、狭さや煩雑さから活動内容が制限されると考え、特別教室(図書室)を加えた2教室で自立活動を行い、生徒を2つのグループに分けることとした。グループIは、手が外に向かい始めた生徒及び物に自ら触れるが操作力が弱い生徒の集団である。グループIIは、外からのいろいろな触刺激を感じ味わうことがまだ必要な生徒と、筋緊張による不随意運動を伴いながらも操作力の向上を目指す生徒の集団である。今回、グループIの集団について授業研究を行った。(前期は3名、後期は4名の生徒のグループとなった。) 集団と言っても最初は個人個人別の課題を行っていたが、活動を進めていくうちに次のような生徒の変化が見られた。①友達の活動を見て「自分もやってみたい」という気持ちを持ち、積極的に活動に向かっていく。②友達と一緒に活動することで、友達の存在を意識する。③友達と一緒に活動することの楽しさを感じる。④クラス集団での活動を行うことで、園での集団生活に慣れていった。これらのことから、生徒個々の目標は明確にしながらも、友達と一緒に活動することの大切さを感じ、集団での授業を設定することになった。</p>		
今までの評価	前時の評価と反省	<p>キャラクターの口にボールを入れる時、指を伸ばしているためボールが握れていない。教師と一緒に腕を伸ばすことができた。</p>	<p>音楽をかけることで、落ち着いて活動に取り組めた。 ボール回しでは、両手でボールを持ってゆっくりと友達にボールを渡すことができた。</p>	<p>手のマッサージは嫌がり、静かに受け入れることはできなかった。天井から吊り下げたキャラクターに音の鳴るおもちゃをつけると、自分から触りにいこうとしていた。カラーボールをもう少し小さくして手の平全体で握れるようにする。</p>
	中での評価	<p>覚醒のリズムが安定せず、手を口に持っていくことが多い。揺れなどの大きな刺激に対しては、声を出したり表情も緩む。</p>	<p>音楽をかけると落ち着いて学習ができるので、リラックスできる環境を設定している。</p>	<p>ナイロン袋やタフロープ、タンバリンや鈴など、振ると音の鳴る素材や楽器が好きで、自分から探して触りにいく。</p>
本時の目標		<ul style="list-style-type: none"> ・ マッサージや物を触る活動時、手に力を入れたり引っ込めたりすることなく受け入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 落ち着いて活動に取り組む。 ・ 操作の時、手元や対象物を見る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 手指のマッサージを嫌がらずに受け入れる。 ・ 自ら対象物に向けて手を出す。
時間	活動内容 (吹き出し内に、支援と留意点を示す)	評価の視点		
		T	U	V
11:00	①あいさつ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 目を覚まして活動に向かっているか 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 落ち着いて課題に取り組める準備ができているか 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 落ち着いて課題に取り組める準備ができているか
<ul style="list-style-type: none"> ・ 言葉かけや体に触れて目覚めさせる (T) ・ テンションが高まって活動が難しい時は、場所を変えて気分を落ち着かせる (U) 				

11:02	②活動内容の説明	・活動内容を書いた写真カードを見ているか	・説明を聞いて、活動に対する期待感をもった表情をしているか	・活動内容を書いた写真カードを見ているか
<ul style="list-style-type: none"> ・活動内容を書いた写真カードを見せるとともに言葉かけで、内容を知らせる (T, V) ・活動内容を書いた写真カードを見せるとともに言葉かけで、活動の手順や終わりを明確にする 				
11:05	③手洗い	・手洗い時、手を引っ込めていないか	・手洗い時、気持ちよさそうな表情をしているか	・手洗い時、気持ちよさそうな表情をしているか
<ul style="list-style-type: none"> ・顔写真カードを見せて、手洗いの順番を知らせる (T, U, V) ・音楽をかけて気持ちをリラックスさせる (U) 				
11:10	④手指のマッサージ	・手を引っ込めないで、触刺激を受け入れているか	・マッサージの強弱の刺激を受け入れているか	・手を引っ込めないで、触刺激を受け入れているか
<ul style="list-style-type: none"> ・中心から末梢(手のひらから指先)に向かってのマッサージやタッピングを行う (T, U, V) ・マッサージはしっかりと手指に触れて刺激の質・量(強さ・時間)に気をつける (T, V) 				
11:15	⑤-1天井から吊り下げたキャラクターに手を出す (T) ⑤-2天井から吊るしたキャラクターを手ではねのける (U, V)	・キャラクターを注視または追視しているか ・キャラクターに向かって、手を伸ばしているか	・キャラクターを注視または追視しているか ・キャラクターに向かって、手を伸ばしているか、触れているか、掴んでいるか	・キャラクターを注視または追視できているか ・キャラクターに向かって、手を伸ばしているか、触れているか、掴んでいるか
<ul style="list-style-type: none"> ・天井から吊り下げたキャラクターは、手が出やすいように目の高さの位置に調整する (T, U, V) ・触ったことに気付く手掛かりとして、キャラクターに鈴をつけて吊るす (T) ・触ることへの関心を高めるために、キャラクターに鈴を付けて吊るす (V) 				
11:25	⑥-1教師と一緒にカラーボールをキャラクターの口に入れる (T, V) ⑥-2自分でカラーボールを持ってキャラクターの口に順番に入れていく (U)	・教師と一緒にカラーボールを持っているか ・カラーボールを放さずにキャラクターの口までもっていけるか	・キャラクターの口の位置を確認した後、カラーボールを一人で口に入れているか ・カラーボールを右手から左手に持ち替えができていないか	・カラーボールを一人で持てるか ・カラーボールを離さずにキャラクターの口にもっていけるか ・キャラクターの口の中で、カラーボールを離せるか
<ul style="list-style-type: none"> ・カラーボールをしっかりと握らせてから、キャラクターの口に向けて介助しながら手を伸ばさせる (T) ・カラーボールを入れるキャラクターの口の位置を確認させてから活動を進める (U, V) 				
11:35	⑦3人で円になってボール回し	・友だちにボールを渡す時、ボールを持っている手元を見ているか	・友だちを意識して、ボールの受け渡しができるか	・両手でボールを持てているか ・教師と一緒にボールの受け渡しができるか
<ul style="list-style-type: none"> ・掴みやすいようにソフトバレーボールを使う (T, U, V) ・ボールを回しやすいように小さな円をつくる (T, U, V) 				
11:40	⑧評価とあいさつ	<ul style="list-style-type: none"> ・一緒に活動した教師が、がんばった点を伝える (T, U, V) 		

準備物	ボール（大、小）、キャラクターダンボール、カラーボール、ソフトバレーボール、CDラジカセ		
	T	U	V
本時の評価	<p>手洗いの時、自分から手を洗面に向かって伸ばすことはなく、手を洗っていても手を引っ込める姿が見られた。手指のマッサージは嫌がらずに受け入れていた。天井から吊り下げたキャラクターに視線を合わすことはできるが、興味をもって自分から触ろうとする姿はあまり見られない。顔の近くにキャラクターが触れると顔を背けることはあったが、手はなかなか出なかった。キャラクターの口にボールを入れる時、視線を上げる。カラーボールを持ち続けることはできず、放してしまう。教師が手を添えながら一緒にカラーボールを押さえると、キャラクターの口に入れることはできた。ボール回しは教師が手を添えながら行った。</p>	<p>手洗いをすることで、活動への期待感が高まる。マッサージはあまり好きでないようで、最初は受け入れているが、途中から手を引っ込めてきた。天井から吊り下げたキャラクターに、自分から手を伸ばして払いのけ、つかむことができた。キャラクターの口にボールを入れる時、手元をあまり見ず手探りのように手を動かしてカラーボールを口の中に入れていた。しかし、繰り返しの活動で、言葉かけとともにボールを入れる場所を示すと、手元や口を注目した後、口の中にカラーボールを入れることができた。ボール回しでは、ソフトバレーボールを両手で持って、隣の友達のテーブルの上にゆっくりと載せることができた。大好きな曲をかけることで、気分が高ぶらずに活動に取り組めた。</p>	<p>手洗い時、自分から手を伸ばすことはないが嫌がらずに受け入れた。教師の手やスポンジを使つてのマッサージは、最初の頃は、嫌がって声を出したり手を引っ込めることが多く見られた。繰り返しのマッサージで受け入れられる時間が増えてきた。天井から吊り下げたキャラクターには手を伸ばすことがなかったので、キャラクターに鈴を付けると、手を伸ばして持ったり、振って音を鳴らす姿が見られるようになった。カラーボールは持つことはできるが、キャラクターの口へ自分から手を伸ばすことはなかった。教師が手を添えてカラーボールを口の中に入れる活動を行った。自分からカラーボールを離すことは難しい。ボール回しでは、落とさないようにソフトバレーボールを上方から両手で押さえることはできるが、自分から友達に渡すことはできなかった。</p>
支援の改善点	<p>注視することはできるので、興味のある楽器を吊り下げ、手を使うきっかけにしたい。</p>	<p>音楽をかけることで落ち着いて活動ができた。引き続き落ち着ける環境を設定したい。</p>	<p>手元や対象物を見ることが少ないので、言葉かけをして促していきたい。</p>
授業全体の評価と反省	<p>活動内容が多かった。そのため、1つの活動時間が少なくなり、十分な取組ができなかった。1つの活動に一人ずつ行うように設定しているため、待機させる時間ができてしまう。内容をもっと練ることで活動の共有化を工夫したい。例えば2つの活動を同時に行うことを考えたい。音楽をかけることで、Uは気持ちを高ぶらせることなく全ての活動に取り組むことができた。</p>		

(2) 授業評価まとめ（前期）

① 協議の内容

ア 教師の指導・支援について

- ・ボール回しでは、教師を介して生徒間に繋がりができ、次第に生徒同士のかかわりが生まれていた。
- ・触覚防衛のある生徒に対し、まず手のマッサージを行いその後、手の活動に焦点を当てた課題が続いたのは適切であった。
- ・課題が多すぎるのではないか。一つ一つじっくり取り組んでみてはどうか。
- ・生徒が自発的に動かす手の動き等を、もっとじっくり待ちたい。
- ・生徒が課題を視覚認知してから、手の介助等に移りたい。

イ 教材・教具

- ・活動の見通しをもたすために写真カードをもっと丁寧に提示した方が良いのではないか。
- ・ボールを入れる課題について、例えば、
生徒それぞれにとって持ちやすい形や触感の異なるボール等を用意する。
手の動きが課題の生徒もいるが、机の上に置いたボールを水平に押し出すことで、穴に入れる教材ではどうだろうか。
キャラクターの口にボールを入れる設定にすれば、モチベーションが上がるだろう。

ウ 環境設定

- ・BGMは情緒を安定させ、授業に集中させるために大変有効であった。
- ・活動を行っている友人が見える位置（例えば三角形の体勢等）で取り組んではどうか。

② 改善点及び次の授業に向けて

具体的な授業の改善について協議を行う中で「授業の中の『待ちの時間』に対する手だて」について、更に話し合いを進めた。吊り下げたキャラクターに手を伸ばす活動やキャラクターの口にカラーボールを入れる活動は一人ずつ順番に行ってきたので、生徒に『待ちの時間』ができてしまった。2つの活動を同時進行することで、『待ちの時間』が少なくなると考えた。また、待つ場所の工夫により、友達の活動を見て活動への期待感や友達に対する意識づけ、友達を応援する気持ちにつなげていきたい。自ら手を使って楽しみたいなる活動をもっと考える必要があるのではという意見より、風船を使った『一人遊びの部屋』を設定した。色鮮やかな風船をたくさん浮かばせて、興味を持ち自分から触ってみたいくなるような活動を考えていきたい。

(3) 自立活動学習指導案（後期）《グループ I》

生徒の実態、目標、活動内容の設定理由、集団の授業を設定した理由については、前期と同じであるため省略する。

		T	U	V
今までの評価	前時)の評価と反省	手のひらや手指へのマッサージは嫌がらずに受け入れていた。段ボールで作ったキャラクターの口にカラーボールを入れる活動では、カラーボールがやや大きくて、握ることはあまりできなかった。教師がボールを持たせると腕を引っ込める様子もなく、暫く触れ続けることができた。円になって行うボール回しは、教師と一緒にソフトバレーボールを持つが、自分から隣の友達にボールを渡すことはできなかった。	BGMを流しての活動で、落ち着いた表情を見せていた。友達の活動の姿を見て、期待感をもち自分の順番を待つことができた。マッサージは、ずっと受け入れることができず、手を動かしてきた。段ボールで作ったキャラクターの口にボールを持って手を滑らすように動かして入れることができた。左利きのためボールを右手に持つと左手に持ち直して、口にカラーボールを向けて入れていた。円になってのボール回しでは、ボールを両手で挟むようにして持ったソフトバレーボールを友達のテーブルの上にゆっくりと載せることができた。	天井から吊り下げたキャラクターにタンバリン等の音の鳴るおもちゃをつけると自分から触ろうとすることがあった。カラーボールを自分で持てるが、段ボールで作ったキャラクターの口には自ら手を伸ばして入れることはできず、教師が手を添えると自分でボールを離すことはできた。円になって行うボール回しでは、ソフトバレーボールに両手を出して押さえたり左手で叩いたりすることはできる。しかし自分から隣の友達にソフトバレーボールを渡すことはできない。

日常生活や各 教科等の評価 の評価	外部刺激が少ないと眠ってしまふ傾向がある。	好きな映像や音楽には注目して見ることができる。自分の苦手なことになると気持ちが不安定になり、外に出ようとする様子が見られる。	好きな楽器を持って口元に当てたり手に持って鳴らしたりすることが好きである。	
本時の目標	・マッサージや物を触る活動に手に力を入れたり、手を引っ込めることなく受け入れる。	・落ち着いて活動に取り組む。 ・操作の時、手元や対象物を見る。	・手指のマッサージを嫌がらずに受け入れる。 ・自分が対象物に向けて手を出す。	
時間	活動内容 (吹き出し内に支援と留意点を示す)	評価の視点		
		T	U	V
11:00	① あいさつ ・声かけや身体に触れて目覚めさせる(T) ・テンションが高まって、活動が難しい時は、場所を変えて気分を落ち着かせる(U)	・目を覚まして活動に向かえているか	・落ち着いて課題に取り組める準備ができているか	・落ち着いて課題に取り組める準備ができているか
11:02	② 活動内容の説明 ・活動内容を書いた写真カードを見せるとともに言葉かけで、内容を知らせる(T, V) ・活動内容を書いた写真カードを見せるとともに言葉かけで、活動の手順や終わりを明確にする。(U)	・活動内容を書いた写真カードを見ているか	・説明を聞いて、活動に対する期待感を持った表情を見せているか	・活動内容を書いた写真カードを見ているか
11:05	③ 手洗い ・顔写真カードを提示して、手洗いの順を知らせる(T, U, V) ・音楽をかけて気持ちをリラックスさせる(U)	・手洗い時、手を引っ込めていないか	・手洗い時に気持ちよさそうな表情が見られるか	・手洗い時に手を引っ込めていないか
11:15	④ 手指のマッサージ(手、スポンジパフ、手袋を使って) ・最初は教師の手でしっかりと触り、マッサージに気付かせる(T) ・スポンジパフと手袋を見せてどちらを使いたいか選ばせる(U) ・最初は、教師の手を使ってのマッサージ、次にスポンジパフや手袋と触刺激の強さを工夫する(V) ・マッサージは中心から末梢に向けて行う(T, U, V) ・マッサージの時、表情を観察し、強さを工夫する(T, U, V)	・手を引っ込めずに、触刺激を受け入れているか	・マッサージの強弱の刺激を受け入れているか	・手を引っ込めずに、触刺激を受け入れているか
11:25	⑤-1 風船の部屋で、風船に向かって手を出し、風船を触って遊ぶ ・カーテンを使って左右後ろを閉めて、集中しやすい環境を作る(T, U, V) ・風船以外に鈴を吊り、より触れたい工夫をする(T, V) ・サーキュレーターを使い風船を動かして、関心を高める(T, U, V)	・自分から風船に手を出している場面が見られるか	・積極的に風船を触っているか	・自分から風船や鈴に手を出しているか

	<p>⑤-2 教師と一緒にキャラクターの口にカラーボールを入れる (T, V) キャラクターの口の位置を確認した後、自分でカラーボールを入れる (U) *⑤-1と⑤-2の活動は同時進行</p>	<p>・カラーボールを放さずに握れているか ・カラーボールをキャラクターの口に入れる時、しっかり腕を伸ばしているか</p>	<p>・カラーボールを持つ→口の位置を確認する→口の中に腕を入れる→ボールを放す、といった一連の動作をスムーズに行えているか ・右手から左手へのカラーボールの持ち替えができているか</p>	<p>・カラーボールをしっかりと握れているか ・自分でカラーボールを放して口の中に入れることができるか</p>
<p>11:35</p>	<p>⑥ 円になってボール回し</p>	<p>・教師と一緒に両手でボールを持っているか。 ・友達にボールを渡す時、しっかり腕を伸ばしているか</p>	<p>・友達を意識してボールの受け渡しができているか</p>	<p>・両手でボールを持てているか ・教師と一緒にボールの受け渡しができているか</p>
<p>11:40</p>	<p>⑦ 評価とあいさつ</p>	<p>・一緒に活動した教師が、がんばった点を伝える (T, U, V)</p>		
<p>準備物</p>	<p>ボール (大、小)、キャラクターダンボール、スポンジパフ、手袋、CDラジカセ、風船、サーキュレーター、カーテン、布テープ</p>			
	<p>T</p>	<p>U</p>	<p>V</p>	
<p>本時の評価</p>	<p>手洗いの時、自分から手を洗面に向かって伸ばすことはなく、手を洗っていても手を引っ込める姿が見られた。キャラクターの口にボールを入れる時、視線は上げるが、カラーボールを持ち続けることはできない。風船の部屋では教師が持ったカラーボールに向かい、教師が手を添えると手を伸ばして触れていることができた。風船の部屋で、たくさんの風船がサーキュレーターの風に吹かれて連続して顔や頭に当たると、時には両手を風船に向けて伸ばしていた。</p>	<p>手洗いをする中で、活動への期待感が高まってきた。マッサージはあまり好きでないようで、手を引っ込めていた。キャラクターの口にボールを入れる時、手元はあまり見なく手を動かすことで、カラーボールを入れていたが、繰り返し活動していく中で、言葉かけをしていくと手元を見る姿も見られた。風船の部屋を期待して待つことができるようになった。部屋の中の天井から吊り下げた風船に手を伸ばして触り、声も出していた。また風船を掴んだり両手で持って感触を確かめたりしている姿も見られた。ボール回しでは、ソフトバレーボールを両手で持って、隣の友達のテーブルの上にゆっくりと載せることができた。</p>	<p>教師の手やスポンジを使ってのマッサージは手を引っ込めることなく受け入れられるようになってきた。キャラクターの口へのカラーボール入れでは、自分でカラーボールを持っていることができた。しかし自分からボールを離すことは難しい。風船の部屋に入るとサーキュレーターの風により揺れている風船より鈴の音に注目し手を伸ばして掴もうとしていた。掴んだ鈴は振って鳴らしている姿が見られた。ボール回しでは、ソフトバレーボールを両手で押さえることができた。</p>	

<p>支援の改善点</p>	<p>手を使う活動に対し、身構える様子(腕を引っ込める、手を組んで離さない)が見られる。視線を合わせることができるので、言葉をかけながら教師と視線を合わせて活動に向かう準備をさせたい。ボール回しは友達からボールを受け取ったり、渡したりする意識が少ないので、教師とのやりとりをしながら活動へ意識を向けたい。</p>	<p>気持ちを落ち着けるために用いたBGMに注意が向きすぎて、活動に集中できていない時があった。BGMがなくても活動が続けることができるように、BGMの音量を下げたりBGMを使わないで、本来の手の活動に集中できるようにしていく。対象物を目で捉え、それに向かって手を伸ばす活動では、難易度の高いもの(動く対象物、小さい対象物に手を伸ばす等)を取り入れたい。</p>	<p>物に手を伸ばすことはできるが、「人」を意識して物を渡したり、受け取ったりするのは難しい。人と直接触れ合うマッサージを増やし、教師と一緒に手を使う活動で人を意識し、かわりを楽しめるようにしたい。対象物に対して手を伸ばしたり掴んだりできる。自分のタイミングで「放す」動作はできるが、活動の中での「放す」動作(例えば、キャラクターの口に入れたカラーボールを放す)ができない。放すことで音がなり放したことが実感できる活動を取り入れたい。</p>
<p>授業全体の評価と反省</p>	<p>今回、自立活動では「手を使おう」ということを中心にした活動を設定した。手には、①身振りやジェスチャー、②物の弁別、③防衛反応の3つの機能がある。自立活動を通して、手に対する意識、自分から手を使おうとする意識を高める活動を考えた。手洗い活動は、授業の導入としての位置付け設定した。生徒Uは水が出る前に蛇口に向かって手を出す姿が見られ、授業に対する期待感を持つことができた。「手」を意識させる活動の導入としての意義はあったと考える。指のマッサージは、触覚防衛反応が見られる生徒Vに対して有効な活動と考えた。マッサージを行う時には、各生徒の表情を観察し、質(マッサージの強さ)と量(時間)そして手の中心から抹消に向けての一方向でマッサージを行うように気を付けた。T、VはUより「人」に対する関心が低いで、教師と触れあえるマッサージにより、関心を向けられるようにした。</p> <p>キャラクターの描かれた箱にカラーボールを入れる活動では、U、Wはカラーボールを自分から持ち替えてボールを放すことができた。しかし、目と手の協応動作が弱く手探りで手を伸ばすことが多いので、対象物が動いたり小さくしたり、しっかりと目で捉えないと成功しない活動を取り入れる必要があると考えた。T、Vは活動を継続し、口に向かって手を外に向ける、そして手を使う経験を積める活動を継続して取り組んでいこうと考えている。</p> <p>ボール回しは、持ちやすい大きなボール(ソフトバレーボール)を使って取り組んだ。Vは「友達を意識して人からボールを受け取る」「友達にボールを渡す」という活動はまだ難しいが、ボールに関心を向け、押さえたり叩いたりすることはできていた。Tは自分の近くにボールを持ち込むと、注視することができる。現在教師と共にボールを受け取ったり、教師と共に手を伸ばして友達にボールを送る活動に取り組んでいる。Uは友達の持つボールを取りにいたり、「はやくほしい」と思う気持ちを相手の袖を引っ張って表現できる。友達や教師の活動を見ることで、「前の順番の友達からボールを受け取り、次の順番の友達にボールを渡す」という一連の動作の見通しをもつことができる。次の課題として、活動内容を広げ日常生活動作に繋がる活動へと進めていきたいと考えている。</p>		

(4) 授業評価まとめ(後期)

① 協議の内容

ア 教師の指導・支援について

- ・生徒4人(後期から4人のグループになった)の実態から、『外に向かう手』を設定課題にしたのは妥当である。
- ・前回に引き続き行った手のマッサージは、手の活動に焦点を当てた課題に向かわせる準備段階として適切である。
- ・ボール入れでは、無理をせずボールの感触を確かめさせながら、じっくりと生徒のペースで支援していたのが良かった。
- ・ボール回しでは、個人の課題に差が出てきている。

イ 教材・教具

- ・前回の授業評価を踏まえて設定した『一人あそびの部屋』を『風船の部屋』として設定したが、『手を出す』という生徒達の課題に合っており、尚且つ待機時間を減らすことができ楽しめていた。
- ・思わず触ってみたいくなるような鮮やかな色や感触をもった『風船』を教材に選んだことは、生徒達の実態を見ると良かった。

ウ 環境設定

- ・生徒の情緒を安定させ授業に集中させるため利用していたBGMだが、BGMに気持ちが向き過ぎていた。
- ・他の生徒の活動が見える位置で待機することで、期待をもって課題に取り組んでいた。

エ 子どもの表情・行動等

- ・生徒達は教材に興味をもち、教材を見る力がついてきた。また自ら触ろうとする行動も出てきた。
- ・友達を意識しながら活動できていた。

② 改善点及び次の授業に向けて

UにとってBGMは気分の高まりを抑えるために必要であると考え自立活動時間内に用いていたが、活動を進めていくとBGMに気を取られ、本来の活動に集中できなくなった。普段の授業でもその傾向が見られていたので、授業中にBGMを流す時間を減らして授業に取り組めるように進めていった。これは自立活動の時間も同様で、結果BGMがなくても40分間の活動に落ち着いて取り組めるようになった。

グループIは4名で構成しているが（後期から新たにWが加わる。Wの実態の記入は省略）、UとWに対する新たな取組として対面ボール転がしを取り入れた。これは、①自分に向かって転がってくるボールをよく見る、②動いているボールへ積極的に手を伸ばして受け取る、③ボールを転がすという手の動きを習得する、④教師や友達とのやりとりを楽しむという4点を課題とした。

また、4名共通の指先の巧緻性を高めるために、頭上の手の届く範囲に花紙を20枚ほど吊るし取っていくという活動を取り入れた。T、Vは①顔に触れる花紙を手で払う、②色とりどりの花紙を見て手を伸ばす（教師の介助有り）の2点を課題とした。Uは、①花紙を見て掴み、取ったものを箱に入れる、②友達の活動を見て、活動の見通しを持ち自分もやってみたいという気持ちを持つことを課題とした。UとWと一緒に活動していると、Uは「友達よりたくさん花紙を取りたい」という気持ちから、Wの腕を押さえて自分が取ろうとする姿が見られた。花紙を握り掴むことはできるが、第1指と他4指を対し手で『掴む』動作を習得するため、大きめのダンボール紙を混ぜて吊らした。結果、U、Wは掴みづらいダンボール紙を避けて掴みやすい花紙を目で確認し、手を伸ばさようになった。ダンボール紙だけが残ってくると、Uは第1指を除く4指を揃えてダンボール紙に添え、母指球の辺りではさみ取ることができるように

なった。Wについては、第1指と他4指を対に摘むことができた。Vは、花紙を注視した後自ら手を伸ばし、手のひら全体で叩くようにして触り感触を楽しむ様子が見られた。確実ではないが、Vは花紙を掴む時もあり、「見る—掴む—取る—渡す」という一連の動作ができるように進めていきたいと考えている。

3. まとめ

愛徳分教室では自立活動を進めるにあたり、個々の実態把握より見い出された児童・生徒の学習や生活上の困難を把握した上、指導目標及び指導内容を設定して自立活動の指導を行ってきた。

中学部重複学級は、物に自分から手を出して触ろうとする意思が弱い生徒、自ら手を伸ばして物にかかわり始めている生徒、スーパートーカーを使ってコミュニケーションをはかっている生徒と発達段階の異なる生徒の集団である。実態把握を行う中で、今年度『手を使う』を主眼に置いた自立活動に取り組むことになった。『口の中に入れていた手を外に向かって出す』『「これなんだろう？面白そうだ。」と物に触れ、そして物を持って遊び始める』『「一緒に遊ぼう。僕が先に遊ぶ。」と物を共有して友達を意識し、友達との遊びを楽しむ』『ICT教材（デジカメ、iPad、スーパートーカー等）を使ってコミュニケーションを広げ、積極的に自分の意思を伝える』というように手を使う力が高まれば、生徒の生活空間の幅が広がっていくだろうと考えた。取組を続けた結果、物を触ることが苦手であった生徒が、ボールを両手で持てるようになったり、玉入れ競技で手元を見て玉を1つずつ握ってかごに入れたり、スプーンを自分で持って食べられる時間が増えたりと操作性の向上が見られた。操作性以外にも生徒に様々な変化が生まれてきた。物を介した活動に興味を示さなかった生徒が、友達の楽しそうな様子を見て「自分もやってみたい」と一緒に活動に参加するようになってきた。また、友達が活動している時は期待感を持ちながら順番を待つこともできるようになった。手を使ったさまざまな集団活動を続けていく中で、生徒同士が互いに影響を与え合いながら成長してきたのだと考えている。

これからも普通学級の『健康の保持』や『心理的な安定』を重視した、前向きに生きる力をつける取組、重複学級の『健康の保持』『身体の動き』『コミュニケーション』を重視した取組を継続させ他教科や日常生活においても般化していけるように工夫していきたいと考えている。

抽出指導 「抽出指導から教室へ」

1. はじめに

本校の自立活動における抽出指導(以下、抽出指導)は、「自立活動の6区分26項目のいずれかに課題を持つ児童生徒で、抽出して個別に行うという授業形態や自立活動室という環境を利用して授業を進めることが必要かつ有効と考えられる児童生徒」を対象とし、①「健康の保持および身体の動きに課題のある児童生徒が対象となるセクション」②「心理的な安定および環境の把握に課題のある児童生徒が対象となるセクション」③「人間関係の形成およびコミュニケーションに課題のある児童生徒が対象となるセクション」の3つのセクションから成る。抽出指導している児童生徒は各セクション20名ずつ、計60名いるが、それは全校児童生徒数に対して約4分の1にすぎない。今回抽出指導している子どもだけではなく、学級に何か還元できるものはないのか、学級担任が困っているところを探り、その課題に迫れないかと考え、2年間のテーマ設定研修をスタートさせた。

初年度は全児童生徒の個別の指導計画に目を通し、自立活動の指導において本校ではどのような課題やニーズがあるのかを調べ、その中で最も多かった「コミュニケーション」の指導内容について、抽出指導で行っている取組のいくつかを全職員に紹介した。本年度は初年度での研修を受け、抽出指導で行っている「コミュニケーション」の授業内容をさらに深めることを目的として授業研修を行った。課題、問題点に対して抽出指導として、どのような視点に立つのか、一人の子どもの事例を学校全体のものにすべく、研究を進めた。

2. 研修の経過 (1年目)

(1) 本校の自立活動の傾向をとらえる (個別の指導計画から)

私たちは、まず各担任がクラス子どもたちをどのように捉え、どのような自立活動を展開しているのか知るために、個別の指導計画に目を通す作業を行った。この時点では、今年度のものが出来ていなかったため、昨年度の個別の指導計画に目を通し、傾向を捉えることから始めた。

その結果、選択項目数でみると、知的障害学級(以下、1ブロック)では主に「人間関係の形成」および「コミュニケーション」を指導していることが多かった。肢体不自由学級(以下、2ブロック)については、「身体の動き」について指導していることが多かった(表1)。今年度の選択項目数についてみても、昨年度と同様な傾向があることが分かった。

(表1) 平成24年度 指導目標を達成するために必要な選定項目の集約 (1B…1ブロック、2B…2ブロック)

	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
小学部1B	28	47	78	41	46	81
中学部1B	31	48	67	19	28	59
高等部1B	31	61	90	24	16	85
小学部2B	16	8	8	17	27	10
中学部2B	10	7	9	9	12	13
高等部2B	13	12	13	12	15	15

ここまでの傾向を押さえた上で、今回数が多かった「人間関係の形成」と「コミュニケーション」を行っているセッション3の授業内容をいくつか校内で報告することで、少しでもクラスでの自立活動に還元出来たらと考えた。そこで更に「人間関係の形成」及び「コミュニケーション」の中でも、どの項目が多く選択され、授業を行っているのかを調べてみた。

「人間関係の形成」については、小学部では（１）「他者とのかかわりの基礎に関すること」（２）「他者の意図や感情の理解に関すること」の項目を選択し指導している数が多いのに対して、中学部では（１）と（２）に加えて（３）「自己の理解と行動の調整に関すること」の項目数が増えてくる。そして高等部については、（３）の項目が一番多くなっていることがわかった（表２）。

（表２）平成24年度 「人間関係の形成」の選定項目別人数

	(1)	(2)	(3)	(4)
小学部1B	42	14	11	11
中学部1B	19	20	19	9
高等部1B	25	24	32	9
小学部2B	6	1	1	0
中学部2B	6	1	1	1
高等部2B	9	1	2	1

- (1) 他者とのかかわりの基礎に関すること。
- (2) 他者の意図や感情の理解に関すること。
- (3) 自己の理解と行動の調整に関すること。
- (4) 集団への参加の基礎に関すること。

「コミュニケーション」については、小学部・中学部では（１）「コミュニケーションの基礎的能力に関すること」（２）「言語の受容と表出に関すること」の項目を選択し、自立活動を指導している数が多いのに対して、高等部においては、（５）「状況に応じたコミュニケーションに関すること」の項目を選択し、指導している数が多くなっていた（表３）。子どもの実態も様々であるが、学部が上がるにつれて、特に高等部については、近い将来生徒が社会に出るということを見据えて、選択する項目が変化しているのではないかと仮説をたてた。

（表３）平成24年度 「コミュニケーション」の選定項目別人数

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
小学部1B	18	32	11	7	13
中学部1B	14	15	9	5	16
高等部1B	12	20	15	2	36
小学部2B	8	1	1	0	0
中学部2B	7	4	0	2	0
高等部2B	7	3	1	3	1

- (1) コミュニケーションの基礎的能力に関すること。
- (2) 言語の受容と表出に関すること。
- (3) 言語の形成と活用に関すること。
- (4) コミュニケーション手段の選択と活用に関すること。
- (5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること。

抽出指導では、「コミュニケーション」については、静かな環境の中、マンツーマン指導が行える状況で、(2)「言語の受容と表出に関すること」の指導を希望する数が多い(表4)。

「人間関係の形成」「コミュニケーション」共に、集団や友達との関係性についての学習については、抽出指導ではなくてクラス等の自立活動で目標を立てて取り組んでいると思われる。

(表4) 平成24年度 抽出指導における「コミュニケーション」の選定項目別人数

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
小学部	7	10	0	0	0
中学部	1	4	2	1	0
高等部	0	4	2	3	1

※「人間関係の形成」の項目別人数

小学部1名

(3)「自己理解や行動の調整に関すること」

(2) 抽出指導で取り組んでいる「コミュニケーション」の授業の紹介(一部)

テーマ設定研修1年目のまとめとして、全校児童生徒や抽出指導でも数多く行われている「コミュニケーション」の(2)「言語の受容と表出に関すること」に課題を持つ児童生徒の指導方法について、抽出指導で取り組んでいる内容をいくつか紹介した(図1)(図2)。



(図1)



(図2)

3. 研修の経過(2年目)

(1) 抽出指導「コミュニケーション」の授業実践①

2年目は、抽出指導で「コミュニケーション」の(2)「言語の受容と表出に関すること」を選定項目にしている児童の授業研修を行った。というのもこの項目は全校児童生徒の中でも一番多く選定されている項目であり、抽出指導で行っている授業の内容について研修したことをクラス担任に報告することで、抽出指導を受けていない子どもたちにも還元できるのではないかと考えたからである。

日 時	平成25年 7月12日 (金) 13:00～13:45 第5限目		
対 象	1ブロック W	場 所	自立活動室3
児童(生徒)の実態	<p>ダウン症であり、低緊張のため嚙む力や飲み込む力が弱い。発音においても舌や唇等構音器官を正しく動かすことが難しいため、不明瞭な発音になることが多い。しかし身近な物の名前や要求を、マカトンサインを使いながら伝える場面が昨年に比べ多くなり、サインに併せて「晴れ」「椅子」等それらしく聞こえる発音が増えている。しかし依然発音が不明瞭で聞き取り難いものや1音多く発音することが多い。最近ではひらがなに興味を持ち始め、教室では友達の名前や教科名を書いたカードを指差して話そうとする気持ちが高まりつつあり、以前よりもクラスや家庭でも、マカトンサインや言葉を使って自分の気持ちを積極的に伝えようとする場面が増えてきている。</p>		
指導目標	<ul style="list-style-type: none"> ・構音運動を調整する力を高め、発音の明瞭度を上げることで、言語を表出する力を高める。 ・音韻意識を高める学習を行うことで、正しく発音できる言葉を増やす。 		
活動(単元)内容の設定理由	<p>本児は筋肉の緊張が低く、発音するために必要な舌、顎、唇の筋肉が柔らかいため、動きを調整することが難しい。そこで顔や口周辺のマッサージを行うことで筋肉を刺激し、顔や唇の動かし方を学習することが効果的と考えた。また舌の動きについては見本を見るだけでは模倣が難しかったため、飴を使って舌の動きを導き練習することが有効と考えた。それらの活動の後、本児が見本を見ながら唇や舌を自分でコントロールし、模倣する学習内容を設定した。発音が不明瞭なことや1音多く発音する課題については、今よりも音韻意識を高めるため、身近な物の名前前で1音のもの(「て」等)や2音のもの(「いえ」等)の音韻の違いを理解する学習から始めることが効果的と考え取り組むことにした。「か・き・く」の発音練習においては、母音は徐々に発音できるようになってきており、「か」「き」も単音であれば言えるようになってきているので、2文字連続の発音練習を行うことで単語の発音へと繋げられるような学習内容を設定した。</p>		
今までの評価	前時(7/1)の評価と反省	<p>母音を1音ずつゆっくり発音することは出来るが、連続発音練習の時に口の形が正しく行えない音があったので、その活動の前にもう一度正しい口の形を確認してから行っていく。「か・き・く」の発音練習を始めたが、絵カードと文字がまだ一致出来ていないこともあったので、わからないときはサイン(例「かーかー」+カラスのサイン等)と一緒に確認していく。音韻理解の学習にiPadの鼓を使って取り組もうとしたが、タッチが感知されなかったり、叩きたい気持ちが高まり動きを制止する場面もあったので、笛に変えて行ってみたところ本児も理解しやすく、活動にも前向きに取り組めた。しかし2音の名前は正しく2回吹けるが、1音のものも2回吹いてしまうことがあったので、1音と2音の違いを指で教えたり、手を叩く等して意識させていきたい。</p>	
	日常生活や各教科等の中での評価	<p>マカトンサインについては、出来るものが増えてきたので、今年度から学級の自立活動を中心に取り組むことを担任と話し合い、現在はマカトンサインのステージ1に取り組んでいる。以前よりも朝の会や終わりの会、授業の始まりなどの挨拶の場面やトイレに行きたい時等サインと併せて言葉で伝えようとする場面が増えてきている。家庭では「おかえり」を「おばえり」と言っていたが、最近では正しく話せる言葉が増え、保護者も話している内容が聞き取りやすくなったと話されていた。</p>	
本時の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・唇や舌等構音器官を意識して動かす学習を行うことで、正しく唇や舌を動かしたり、母音や「か・き・く」の発音を明瞭に行うことが出来る。 ・身近な物の名前の文字数と音の数を一致させる学習の中で、1音で出来た名前も間違わずに1音のみ笛を吹くことが出来る。 		
時 間	活 動 内 容	留意点及び支援の方法	評価の視点
13:00	<ul style="list-style-type: none"> ○始まりの挨拶をする ○顔や口等のマッサージ ○舌の動きの練習 ○くちゅくちゅぺ(口を閉じ、頬を動かす)、うがい(喉の奥を動かす)の練習 	<p>マカトンサインと一緒に1文字ずつ丁寧に話すように促す。 メニュー表を見て活動を確認しながら取り組む。</p> <p>棒付きキャンディーを使い、鏡の前で舌の動きを確認するよう伝える。 教師が正しい方法を見せる。</p>	<p>教師の口の動きを模倣しようとしたか。 メニュー表や顔を指差す等確認できたか。 正しい動きが出来たか。 水を飲まずに出せたか。</p>

1 3 : 4 5	○唇や舌、頬の動きの練習 (3秒間正しい動きを保持する) ・母音の正しい口の形を確認する ・ <u>母音の連続発音練習 (ア)</u> ○か・き・くの発音練習 ○ <u>音韻の理解の学習 (イ) (ウ)</u> ○終わりの挨拶をする	見本を正しく模倣出来ていないときは、その場所を触って意識させる。口の形が違う時は、手を使って正しく形作るように指示する。文字と口の形の絵が一緒になった見本を指差し注意を促す。生き物の鳴き声等と発音を結び付けるように働きかける。 指を使って文字数を確認し、笛を吹くのと一緒にその名前を読み上げる。マカトンサインと一緒に1文字ずつ丁寧に話すように促す。	3秒間正しく維持することが出来たか。特に「い」「お」は正しく出来たか。正しい口の形が連続で行えたか。「か」「き」「く」に近い発音が出来たか。1文字(音)の名前を間違わずに吹けたか。教師の口の動きを模倣しようとしたか。
準備物	顔や口のマッサージメニュー表、タイマー、ナイロン手袋、消毒液、クッション、棒付きキャンディー、鏡、口と舌のストレッチ表、母音の連続練習用メニュー表、「か・き・く」の絵カード、笛2つ、さいころ(1音・2音の物の名前と絵が書かれたもの)		

※ (ア)、(イ)、(ウ) は授業の反省が出た活動内容

(2) 授業実践①を終えての協議

授業の様子をビデオで振り返り、①授業の反省②改善点について抽出担当で話し合った。

① 授業の反省

ア、「い」「お」の発音では、指で唇の形を作ると正しい音を出すことが出来るが、音を聞いて直すことは難しい。

イ、さいころで遊んでしまう。

ウ、物の名前を1音2音と区別して笛を吹く時に時々間違えて吹く。理解していないからなのかたくさん吹きたい気持ちが勝るからなのか評価しにくい。

エ、一つひとつの活動において、本児が出来ていることと出来ないことがきちんと理解できる時間が少ない。

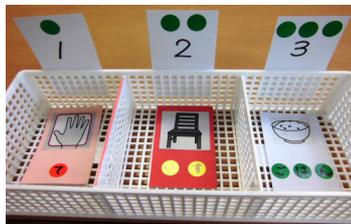
オ、坐位姿勢が悪い。(椅子の高さが合っていない。)

② 授業の改善点

授業の反省ア～オについて、以下のような改善を協議した。

ア、指での介助を少なくしつつ、鏡や見本の写真を見て、正しい唇の動きを確認する。

イ、落ち着いて取り組める様に、さいころをカードに変える。



ウ、1音ずつ手を叩きながら発音する。その後、指で文字数を確認してから笛を吹く。

エ、活動の評価を丁寧に本児に返していきながら確認する時間をとる。そして気持ちが高揚してきた時は、間を取りつつ落ち着いて活動が出来る様に言葉かけを行う。

オ、姿勢が安定していないから集中力が続かないのでないかと考え、足台を用意する。

(3) 抽出指導「コミュニケーション」の授業実践②の成果

授業実践①の反省・改善点を踏まえ、活動内容及び支援の方法を見直すことで、以下のような成果が見られた。

ア、見本の絵を写真に変えることで、口の形が理解しやすくなり、「い」「お」の発音が正しく行えるようになった。(今回は担任の写真を利用した。)

イ、カードに変更することで、活動の後半も遊ぶことがなくなり、最後まで集中して取り組めた。(裏向けたカードを本児が選択することで、残りの活動が視覚的に分かりやすく見通しを持って活動でき、最後まで集中して取り組めたのではないかと考える。また文字数によって仕分けする活動にも広げることが出来た。)

ウ、カードに書かれた文字を指差した後、文字数だけ手を叩き、その後指で「1」「2」と数を確認した後、笛を吹くことで間違いが減少していった。

エ、ひとつの活動が終わった後、プリントや絵カードを見ながら一つずつ児童と評価していく中で、本児自ら今のは「○」「×」と確認する姿が見られた。

オ、足台を使用することで上体が起き、教材や教師を集中して見る時間が増えた。

(足底を付けることで上体が保持しやすくなり、余力が出来たのではないかと考える。)

(4) 授業実践のまとめ

今回の授業実践で特に配慮したことは次の3点である。1つ目は子どもの実態に応じた教材の選択である。視覚支援ひとつを考えてみても、子どもの情報処理の特性や認知力に応じて、実物・模型・写真・絵・文字やそれらの組み合わせ、大きさ・数、提示の仕方等幾通りも考えられる。子ども一人ひとりに合った教材を選択するために、適切な子どもの実態把握を行うとともに、授業実践を通して評価、改善を繰り返し行った。2つ目は、子どもへの言葉かけである。気持ちが高揚しやすい子どもや自分から話すことが苦手な子ども等抽出指導を受ける子どもの実態は様々である。そのため子どもの実態に合わせて、声の高さや言葉の早さ、話の間等を工夫することや、指示だけの言葉かけだけでなく、子ども自身が活動を振り返り納得できるように話し合う時間を大切にしていることが、子どもの授業に向かう気持ちを高めていくことに繋がっていった。また集中が持続しにくかったり気持ちが高揚したりする子どもに対しては、子どもに主体性を持たせ、子どもの頑張ろうとする気持ちを大切にしつつ、課題から逸れないように授業の流れを教師がコントロールしていきけるように心がけて取り組んだ。これらの点を以前にも増して意識して授業を行うことで、子ども自身が課題に沿って主体的に授業に取り組む姿勢が見られるようになったと感じている。3つ目に配慮したことは、抽出指導で培った力を定着させるために担任との連携である。抽出指導は週に1時間という限られた時間の中で行われる授業であり、その学習内容をどのように学校や家庭の中へ一般化していくかが大きな課題である。今回の場合においては、抽出指導で行っている音韻意識を高める学習を担当が朝の会等でも取り入れている。例えば日直の役割として教科名や友達の名まえを呼ぶときに、一音ずつ手を叩きながら言う活動を続けることによって、本児の音韻意識は定着して

きている。子どもの全般的な成長を支援するためには、このように抽出指導で行っていることを、教室や家庭で無理なく自然にリンクさせていくこと、担任と日頃から共通理解を深め、連携していかなければならないことは言うまでもない。

4. おわりに

本校の抽出指導について2年間研究、研修を行った。1年目には、個別の指導計画を調査することで、自立活動の指導についてのニーズ、傾向、具体的な指導内容の項目、課題点を集約することができた。また2年目には、それらの課題に対し、抽出指導の視点からの事例研究を行った。「なぜ」（実態把握）に迫り、実践を積み重ね、授業の振り返り、評価、改善を経て、困難な課題における一つのモデルパターンを示すことができたと考える。

私たちは抽出指導を行うだけではなく、これからも抽出指導での成果を高めることで、抽出指導をしていない子どもにも参考にしてもらえるよう研鑽を積まなければならないと考える。抽出している子どもの指導から、同じ課題を持つ他の子どもたちに還元していくためにも、私たちが取り組んでいることを発信すること、またそのような機会を設定していくことが次の課題である。

自立活動は特別支援学校の教育課程の中核をなす領域であり、障害をもった児童生徒全員に対して全職員がかかわりつくり上げていく領域である。自立活動は個から始め、個に返る自立活動でなければならない。「なぜ」（実態把握、アセスメントの収集・整理）に迫り、「何をねらうか」を大切にしつつ、今回の研究、研修により見えてきた本校の自立活動の指導についてさらなる深化を目指し、今後も研究、研修を続ける必要があると考える。



まとめ

自立活動の時間の指導についての研究を4年間重ね、この紀要をまとめた。前回の紀要では、前半の2年間の研究の結果から自立活動は実態把握から始まり、個にせまる指導であるべきだと述べた。また、課題として「自立活動の内容のより深い理解と活用」と「P D C Aサイクルを充実させること」を挙げた。本紀要では、24、25年度の2年間の研究についてまとめてきた。

「自立活動の内容のより深い理解と活用」を進めるべく、自立活動部が開発した実態把握チェックシートを用いて実態把握を行った。この実態把握チェックシートは、自立活動の内容6区分26項目の全てを網羅している。それゆえ項目数は多いが、このチェックシートで実態把握することで自立活動の全ての区分、項目を具体的な子どもの姿と共に理解することができた。また、一人一人の子どもについて6区分26項目の全てについてチェックを行っていくことは、担任が本当に子どもの姿を的確に捉えているかをチェックすることにもなり、実態の見落としを防ぐことでも効果があると思われた。

2つめの課題である「P D C Aサイクルを充実させること」を目指して時間における指導の授業改善に取り組み、個にせまる授業とはどうあるべきかを全校で考えてきた。P D C Aサイクルで授業を改善するという事は、何度もP l a n（計画）つまり実態把握や、仮説に立ち返るということであり、自分たちがたてた目標や、活動内容の設定を確認しながら実践を行っていくということであった。時には、実態把握や仮説が間違っていることもあり、目標から修正し直すということもあった。しかし、間違った仮説で効果の薄い授業を続けていくよりも、こういった修正をしながら的確な指導、支援を伴った授業に近づいていくことが大切である。また、授業改善は協議会という形で教員同士が様々な意見を出し合いながら進められた。担任や授業担当だけでは見えなかった児童生徒の実態を共有でき、一人一人の姿を多角的に捉えることも出来た。

授業改善を重ねる中で環境づくりや場の設定、適切な集団づくりなどが重要であるということも全ての実践から伺えた。自立活動の指導計画は、個別に作成されることが基本であり、個別指導の形態で行われることが多い。その上で効果がある場合には集団での指導も考えられると指導要領解説でも述べられている。つまり、個々の目標を達成するためにどんな場で、だれと活動するのが良いかを考える必要があるということである。「自立活動は個別でなければならない」のではなく、「自立活動は集団が効果的だ」でもなく、一人一人に合う環境を整えなければならない。このことは、「般化」にもつながっていくと考えられる。例えば、人間関係の形成などが課題となる事例では、個別で始めた取組のステップアップとして集団の場で実践を行うということも考えられる。自立活動は、時間における指導の授業時間や一定の場面でできたことを日常へと般化させていくことがポイントとなってくる。そのためにも、その時その時に適切な場を選択して取組を進めていくことが重要である。

今後の課題は、P D C Aサイクルに合わせてダイナミックアセスメントをそれぞれの授業の中で行っていくことである。P D C Aサイクルで授業改善を行った場合、年間で2回の協議会を持ち、2回の改善を重ねることができたが、個の実態に沿わなければならない自立活動においてはそれだけでは

不十分である。児童生徒の実態の変化、その日その日の児童生徒の気持ちや体調、予定外の児童生徒の行動等に適切に対応、支援するためにダイナミックアセスメントで即時評価、即時改善を行いながら日々の授業を進めていきたい。指導計画や指導案は詳細に準備される必要はあるが、授業は生き物で変化させながら作っていくものである。ダイナミックアセスメントを推し進めるためには、教員の力量が問われることとなるので、日々研鑽を重ねながら研究研修を行っていきたい。

Ⅲ 寄宿舎「生活に即した自立を目指してⅡ」

1. はじめに

寄宿舎には小学部から高等部の生徒が入舎することができ、現在は中学部・高等部の生徒計26名が集団生活を通して、身辺自立や社会的自立などの生きるためのちからの獲得を目指している。近年、子どもたちの入舎形態が多様化し、従前の月曜日帰舎から金曜日帰省というかたちが大きく変化してきており、週に数泊や学期単位の入舎など様々になっている。このため、継続した学習の積み重ねが困難になってきており、大きく見直しを迫られている。このような状況ではあるが、一部の舎生を抽出し、「生活自立学習」に取り組んできた。また、舎生全員を対象に交通安全や身だしなみなどの学習にも取り組んでいる。今回は生活自立学習に取り組む一部の舎生の様子を中心に、今後の生活自立学習のあり方についても考えていきたい。

2. 実践事例

(1) Aくん

① 取組前の様子

自分に自信が持てず、積極的に行動することが難しいため、同学年の他の舎生と比べても目立つ存在ではなかった。また、人の話を理解するまでに時間がかかる、状況判断が難しい、相手の立場にたって物事を考えることが難しい、などの様子が見られた。しかし、相手によっては強い口調や態度で接することもあった。

② 取組により見られた変化

様々な経験を積み重ね、積極性や自信をつけることを目標に、生活自立学習を高2の9月より開始した。最初のオリエンテーションでは、衣類の片付けや掃除、調理等の日常生活上必要なことについてがんばりたいと語ってくれた。学習を通しての具体的な目的として、「人の話を落ち着いて聞き理解する」「相手の立場を考えた話し方、行動ができるように」「状況判断ができるようになる」を設定し、炊飯や朝食づくりなどの調理、手指の巧緻性、コミュニケーションについて取り組んだ。どれをとっても初めての経験で、説明を聞くだけではなかなかうまくいかず、やる気は感じられるものの、スムーズには進まなかった。このため、次々と新しいことに取り組むのではなく、同じ内容の学習を繰り返し、失敗してもどこで失敗したのかを振り返りながら根気よく学習を続けた。特に人との接し方について学習を深めることにより、人当たりが柔らかくなり、協調性がめばえた。このように生活自立学習を進めることが彼の自信にもつながっていき、舎生会役員としてもみんなをひっぱっていこうとする姿が見られるようになった。また、調理実習や身だしなみ、マナーなどの学習を積み重ねることにより、帰省時に家庭での生活に幅が生まれ、食事の準備や洗濯、掃除など、積極的にお手伝いをするようになった。

③ 卒業式での本人の言葉

僕は高2から寄宿舎に入りました。掃除、配膳、洗濯など色々なことを教えてもらいました。最初は難しかったけど、だんだんできるようになりました。夏休みにヘルパー2級の資格を取りました。卒業したら「結い」へ行きます。喫茶店などいろいろな活動がんばります。

④ 活動内容と様子

日程	活動内容	様子
4/24	オリエンテーション ・生活自立学習ではどんなことをするか。 ・卒業後の自分を考える。	「卒業後の進路については考え中」「一人暮らしについてはまだ分かりません」「寄宿舎に入って掃除機をかけることができるようになった」「洗濯干しをがんばる」などの意見がでる。卒業後の自分を想像できていない様子が見られた。
5/10	炊飯	計量カップで米を計る際、1合の意味がわかりにくい様子が見られた。米の炊き方の文章を読んでも理解できていない様子が見られた。
6/7	自身の生活環境について ・ゴミの分別	ゴミの分別を実際に行った。分別の仕方が次第に理解できにくにつれ、他舎生が行っている時に「それは、こっち」と教えて、他舎生が持っていたゴミを取って自分で捨てる様子が見られた。
6/25	自転車交通安全 ・交通ルールの確認 ・自転車の点検	自転車の点検整備では、自分の自転車と構造が少し違う為に戸惑いが見られた。また、空気入れについては、空気入れの先端の挟む部位をタイヤのバルブに上手く固定できなかつたり、力が弱くポンプを押せなかつたり、などの様子が見られた。
7/9	調理 (卵焼き・ウィンナー・インスタントみそ汁)	一人で実施したためか、緊張し、かなり汗をかいていた。手先の不器用や理解力不足、集中力切れの部分が目立った。やる気は十分に見られ、積極的に参加できていた。
8/28.29	夏休みの取組	資料1参照
9/27	手指の巧緻性	ネクタイを結ぶことは、初めてだった様子
10/11	靴洗い ・運動靴を洗う	初めてだった様子。
11/15	電話の応対 ・電話のかけ方・受け方のマナーについて	練習では、相手に対しての受け答えの言葉が抽象的になっていた。 (例：待ち合わせの時間が曖昧であったり、漠然とした内容になってしまう)
11/29	まとめ ・1年間の活動を振り返る	1年間を振り返り「すいはんでごはんのたきかたをやりました。くつみがきできれいにみがきました。ちょうちよむすびはむずかしかったけどさいごまでがんばりました。せんたくのほしかたとつかいかたとたたみかたをしました。ちょうりじっしゅうをしました。でんわのかけかた、くつみがきかたしたかった。」と最後に感想を書いた。

ア、夏休みの取組（資料1）

買い物 (プライスカット)	自転車でプライスカットまで行く。交通ルールを守り、安全運転で走行できた。 店内では、参加舎生で相談して買い物リストを渡し買い物をする。店舗により食品の配置が少々違うので買い物に時間がかかった。その時に店員さんに聞くことはできなかった。値段などは特に気にしないで購入していた。必要な人数分の購入や簡単な暗算も難しく、また3人で相談して買い物することも難しかった。
夕食作り ラーメン・炒飯・中華 サラダ	炊飯は、何度か経験していたが、戸惑いながら行っていた。ラーメン作りを担当し、7人分を作る。周りの進行状況を見ながら料理をすすめる。(麺がのびないようにするため) ラーメンのつゆの袋を破るのに苦労する。ネギを切る時包丁を使う。火加減の調整、菜箸などの扱いなどなれていないためか苦労していた。
朝食作り	食パンをトースターで焼いただけの食事だったので早く食事が終わる。 (自分たちでできていた)
昼食作り (うどん作り)	うどんの麺を実際に自分たちで作る。思っていたより、力やコツが必要だった様子で3人とも大変そうであった。
全体をとおして 3人で力を合わせて生活を作る大変さは実感できたのではないと思う。事前に調理実習を計画していたが現場実習等の関係でできなかった。見通しを持った生活を作るという点については課題が大きすぎた。全体的に自分で判断することは難しく、指示待ちの状態が多かった。	

イ、洗濯学習

全自動洗濯機の使い方、干し方、たたみ方を2年間の舎生活のなかで実施した。1年目の最初は何度も説明が必要で忘れることも多かったが回数を重ねることで出来るようになった。
--

(2) Bさん

① 取組前の様子

週1泊からの寄宿舎生活が始まりました。寄宿舎では素直でよく気がつき、舎生に親切で先輩の面倒をよくみてくれたが、良い子でいなければいけないという気持ちが強く、ありのままの自分を出せずにいた。家庭ではほぼ漫画を読んで過ごしており、友達との関わりはほとんどなかったようである。整理整頓や食事マナー・言葉遣い・自分の言いたいことが言えない(言葉にできない・まとめられない)などの課題があり、急な予定の変更や時間にせまられると慌てて混乱状態になることもあった。寄宿舎での個別目標は「整理整頓をきちんとする」。自分で考えた寄宿舎での目標は「当番の仕事をがんばる」。10月より週1泊(水)から週2泊(月・水)に増えた。

② 取組により見られた変化

週1泊の入舎とともにスタートする生活自立学習は、身体的、精神的に過大な負担にな

るのではないかという声もあった。しかし、そんな心配をよそに、オリエンテーション時での活動内容の説明に興味を持ち、積極的に参加したいという様子が見られた。生活自立学習をする事によって忙しくはなったものの、Bさんにとって興味深い内容の活動を多く取り入れた事により、充実した寄宿舎生活を送れたようである。手先が器用で、特に裁縫や調理などでの細かい作業も最後まで集中して行うことが出来ていた。自分一人でやり遂げた達成感が彼女の自信にもつながったようである。また、10月からの泊数増加により、友達との関わりの時間が増え、職員に話を聞いてもらい、思いを受け止めてもらう機会も増えたことで、自分の気持ちを少しずつ表現できるようになっていった。そのことが、彼女のストレス解消にもつながっていったようである。

③ 卒業文集にのせた本人の感想

寄宿舎では友達と遊んだり、ふとんカバーの入れ方やアイロンのかけ方を学んだりしました。寄宿舎に入ってから、家ではあまりしなかった手伝いをするようになりました。これからも寄宿舎での経験を生かしていけるようにしたいです。

④ 活動内容と様子

日程	活動内容	様子
4/25	オリエンテーション ・生活自立学習ではどんなことをするか。 ・卒業後の自分を考える。	卒業後や一人暮らしに関心があった。「調理や裁縫などいろいろとしたい」という意見が出る。卒業後の進路について不安を感じていた。また、卒業後の自分が想像できないようであった。
5/9	人とのつきあい方 ・人との付き合いで大事なことを考えよう。 ・言葉遣い、態度、距離感	友達と接する時を思い出し、悪いところや良いところを言い合う。言っではいけないと思いつつ、きつい口調になる時があると言っていた。
5/30	身だしなみ・あいさつ	身だしなみについては自分のできていないところ（前髪の長さ・爪を切る）を確認することができた。あいさつは、進路の先生からも話を聞いたようで、どんなあいさつがあるのか答えられていた。大きな声であいさつするように学校でも言われているようである。
6/13	生活をとのえる ・整理整頓、掃除、ゴミの分別	実際に自分の使っているタンスの整理をし、意識しながらできていた。ゴミの分別に関して興味を持ち、説明の冊子に興味を持って見ていた。ゴミのカレンダーを見せると、ゴミの出す日を気にしていた。「今日学んだことを、家に帰って親に話したい」と本人が言う。
7/4	自転車・交通安全実技 ・交通ルール確認、自転車の点検	普段自転車に乗っているので安全にプライスカットまで行くことができた。自転車の点検も職員の説明を聞き、できていた

7/18	炊飯	家で行っていて、手際よくできていた。
8/2.3	夏休みの取組	資料2参照
9/26	裁縫の基本 ・運針、ボタン付け	集中してできていた。
10/15	アイロンがけ ・ハンカチ、シャツ	使用時の注意事項を説明した後、アイロンをかけた。注意事項を守りながら丁寧にやることができた。
10/29	巾着作り①	説明を聞いて縫っていた
10/31	巾着作り②	前回の続きをする。時間を超えても仕上げたいと意欲的に取組縫い終わる。回数が増えることで、少しずつ上手になってきた。
11/14	電話の応対 ・電話のかけ方、受け方のマナーについて	普段の様子を聞いた上で電話の応対の注意事項を説明する。あまり電話をかけることはなく、受けることの方が多く様子。電話の応対の練習では照れていたが、適切な言葉遣いは大まかに理解できていた。
12/10	調理実習（シュウマイ、ポテトチップスサラダ）	自分で作りたい料理を考え調理した。野菜を切る、シュウマイを包むなどレシピを見ながらほぼ一人で調理できていた。
12/17	靴洗い・靴磨き ・運動靴を洗う。 ・パンプスを磨く。	靴洗いの説明を聞き、丁寧に洗うことが出来ていた。家では、ほとんどしていないようであった。靴磨きは、初めてで、興味を持って参加していた。
1/21	巾着作り③	紐通し。説明がなくても上手にできていた。
1/28	まとめ ・1年間の活動を振り返る。	1年間を振り返り「楽しかった。生活に役に立つと思った。アイロンができるようになった。料理することできるようになった。2月にバレンタインのチョコを作りたいかった」と最後に感想を書いた。

ア、夏休みの取組（資料2）

買い物 (プライスカット)	買物リストを見ながら、商品と値段をチェックしていた。 時間はかかったが、1つ1つ丁寧に選ぶことができた。 商品を袋に入れる時、重い物から入れていた。
夕食作り ハンバーグ、添え野菜、みそ汁、ご飯	お米を3合正確に計り、3回といでいた。玉ねぎのみじん切りでは、包丁使いに戸惑っていたが、見本を見せると、上手にできた。パン粉を牛乳でふやかす。ミンチと材料を混ぜ合わせる。ハンバーグの形に丸め空気抜きも行う。フライパンで焼く時、油の跳ねを怖がる。
朝食作り サンドイッチ (ハム、ツナ、たまご、きゅうり、レタス)	パンにマヨネーズを上手に塗る。細かくきゅうりを切っていた。 上手にたまごを割る。火加減を気にして、スクランブルエッグを作っていた。ツナにマヨネーズで味付けする。少し薄味の味付けであった。好きな具を順番に挟む。 サンドイッチを上手にいろいろな形に切っていた。

<p>昼食作り お弁当作り (キティーちゃん のキャラクタ ー弁当、ミ ートボール、 だし巻き卵、 ウインナー)</p>	<p>本人の強い希望でキャラ弁を作ることになった。その関係か、意欲的に取り組んでいた。作る前に、キティーちゃんの下書きをする。それを見て、ハムや海苔を載せて顔を作る。花型でハムや卵を抜いて飾った。ミートボールを湯煎とレンジどちらでも温められることを知っていた。ミートボールの袋のワット数と時間を確認していた。だし巻き卵の醤油の量を少しずつ入れる。3回に分けて生地を流し入れ、巻いていた(卵焼き器使用)。空気抜きもする。ウインナーは、包丁を上手に使いタコやカニを作る。</p>
<p>全体をとおして 調理で分からないところは、職員に自分から尋ねていた。手本を見せるとすぐにできていた。</p>	

イ、洗濯指導

全自動洗濯機の使い方・干し方・たたみ方は1回説明すればすぐ理解できた。ただ雑になりがちであった。

3. まとめ

卒業後の生活を考え、社会的な生活力を身につけるために始めた生活自立学習ではあるが、最近の卒業生の状況を見てみると、一人で生活を送っている人がほとんどおらず、当初の想定とは違った現状であることがわかる。しかし、短期的には生活自立学習で培ったことが活かされてはいなくても、長期的なスパンで見れば、いつかは必ず必要になることばかりである。また、現在は一人暮らしをしていなくても、家族のために調理、洗濯、掃除など日常적으로こなしている人もおり、自分の生活の中でどのように生かしていくかは、その人の生活環境次第ではないだろうかと考えられる。

ただ、冒頭でも少し触れたが、入舎形態が大きく変わり、継続的に反復して学習を積み重ねることが困難になってきており、これまでと同じような取組が続けられるかが課題になっている。また、以前から施設設備面や職員体制などにも課題があり、今後も継続していくためには、より一層の工夫が必要である。課題の解決の方法を模索しながら、子どもたちの現状を正しくとらえ、今後のあり方についても論議を重ねていきたい。